



年代記

Anna Sokalska

年代記

© 2023 Team17 Digital Limited.

Published by: Team17 Digital Limited

Production & Direction: Stan Just

Writing: Anna Sokalska

Proofreading & Editing: Ewa Popielarz

Illustrator: Dominika Bochenek

Localization: Roboto Global

eBook adaptation: Piotr Najar / UNO Kooperatywa

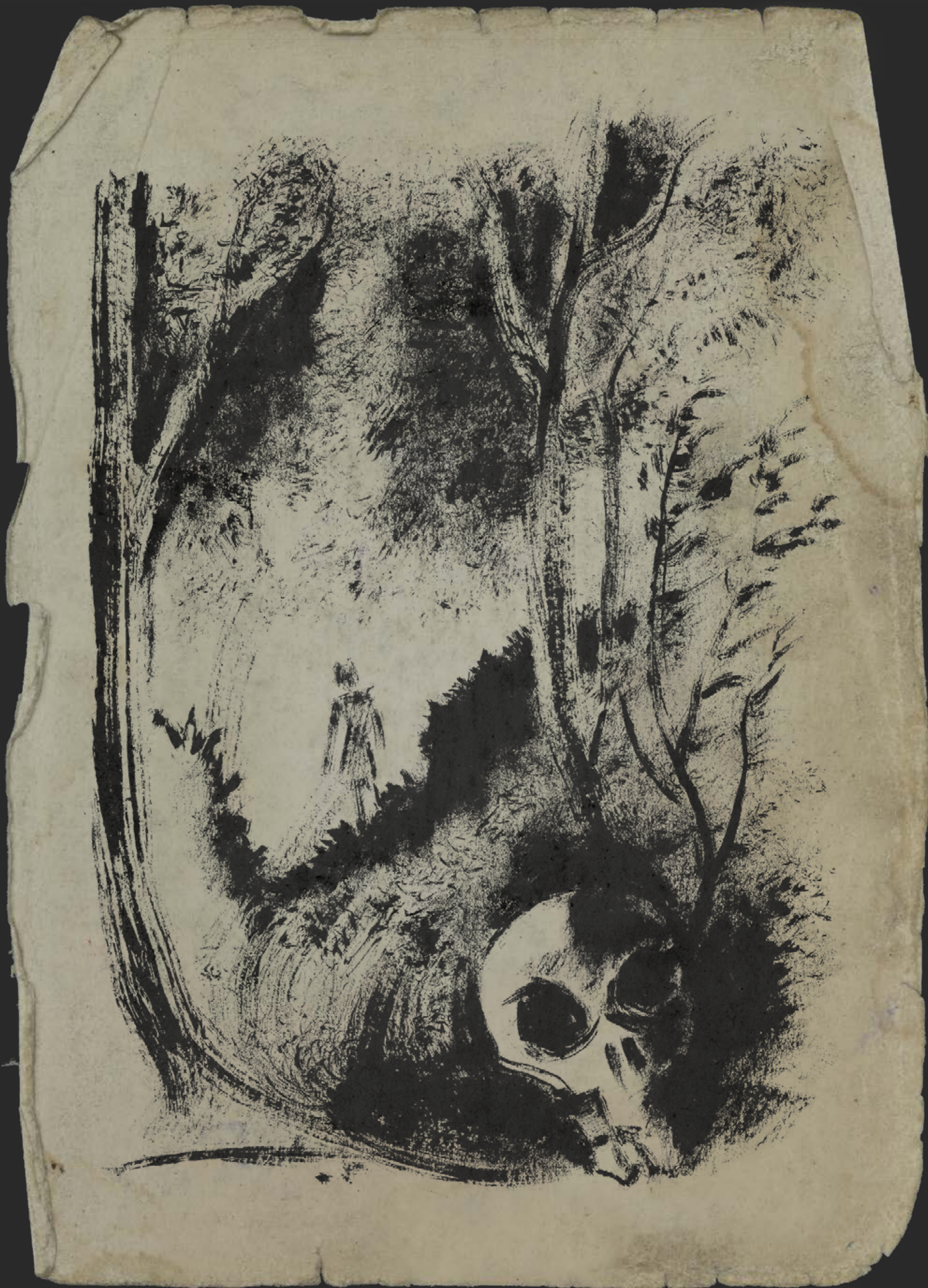
内容

- 一 まことの神々 を讃えよ!
- 二 始まりの目覚め
- 三 無限の源
- 四 孤独を慰める
- 五 生命の水
- 六 娘みの誕生
- 七 ヴェレスの創造
- 八 不注意の影
- 九 冥界
- 十 帰ってきた孤独
- 十一 雷を司る者
- 十二 女の創造
- 十三 男の創造
- 十四 ダボ一の誕生
- 十五 幸福の時代
- 十六 黄金の王国
- 十七 プラボ一の饅り物
- 十八 時なき時の終わり
- 十九 魂の救済

- 二十 ヴェレスの使者
二十一 魂の二元性
二十二 〈凄惨〉の時代
二十三 嘆きのモコツ
二十四 偽りの糸
二十五 恐れと無力
二十六 太陽の降臨
二十七 神の心
二十八 地の骨
二十九 神の刃
三十 闇の始まり
三十一 気まぐれな火
三十二 大火
三十三 陰謀
三十四 冥界の君主
三十五 誘う火
三十六 燃れた火
三十七 燃える行列
三十八 スヴァログの冒険
三十九 火が食らうもの
四十 怖ろしきものども
四十一 夜の王
四十二 恐怖のささやき

- 四十三 恐保の礼
四十四 モコツの犠牲
四十五 女神の誕生
四十六 調和を保つ者
四十七 地上の呼び声
四十八 神の歩み
四十九 腐敗
五十 引き裂かれたドルヤ
五十一 ささやき手の任命
五十二 神の烙印
五十三 リブツユカの物語
五十四 ささやきの物語
五十五 まじない
五十六 対立
五十七 不信
五十八 ダボ一の館り物
五十九 ペルソの館り物
六十 神器について
六十一 ドルヤについて
六十二 大呪
六十三 ささやき手の名誉にかけて
六十四 神なる力の詔
六十五 ヴェレス敗れる

- 六十六 審判の日
六十七 狼狽
六十八 最初の ささやき手 の凋落
六十九 裏切り
七十 凄惨
七十一 死の腕
七十二 熱慮
七十三 追放
七十四 放浪
七十五 ボハソ
七十六 ふたたびの団結
七十七 神々の英雄
七十八 盟約の者
七十九 世界の崩壊
八十 神なきこと
八十一 ささやき手 のたそがれ
八十二 プラボーの凋落



一 まことの神々 を讃えよ!

記憶する者に幸いあれ。記憶と〈まことの神々〉への信仰だけが、我らを邪な僭主から救うからである。

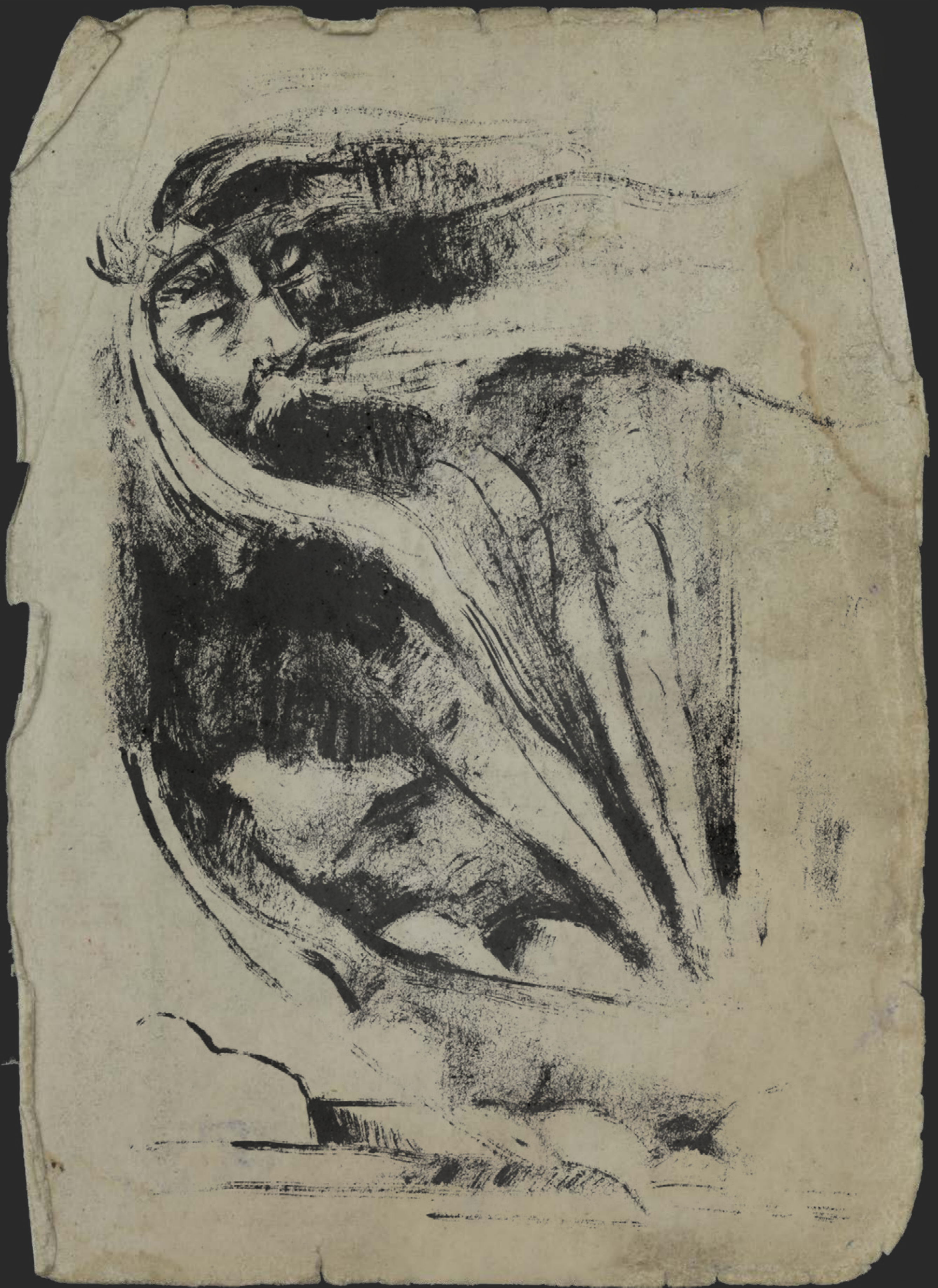
誘惑に敏にして呪いを避けよ。空は清らかなれど、大地は腐り、害獣に毒されている。男の肺を靈気で満たす大気は清浄なれど、その肉体を貪る土は不潔である。土に隠された黄金を空むなかれ。それは哀れなる精神を邪気に導くからである。

汝、この物語を記憶し、自らを救え。

我が名はガ=アル、〈神の娘〉ドルヤを信奉する〈ささやき手〉。慈悲深きモコツの祝福により、女が男を産み、その男がまた息子をもうけ、世々世代にもわたって命がつながれてきた。私もまた、彼女の肉体と魂から創られた息子である。

これは昔の〈時〉の証言にして、ただひとつの真実。時は流るるも、記憶は残る。伝承はこの先も我らの子孫とともに生きるであろう。

〈まことの神々〉を讃えよ!

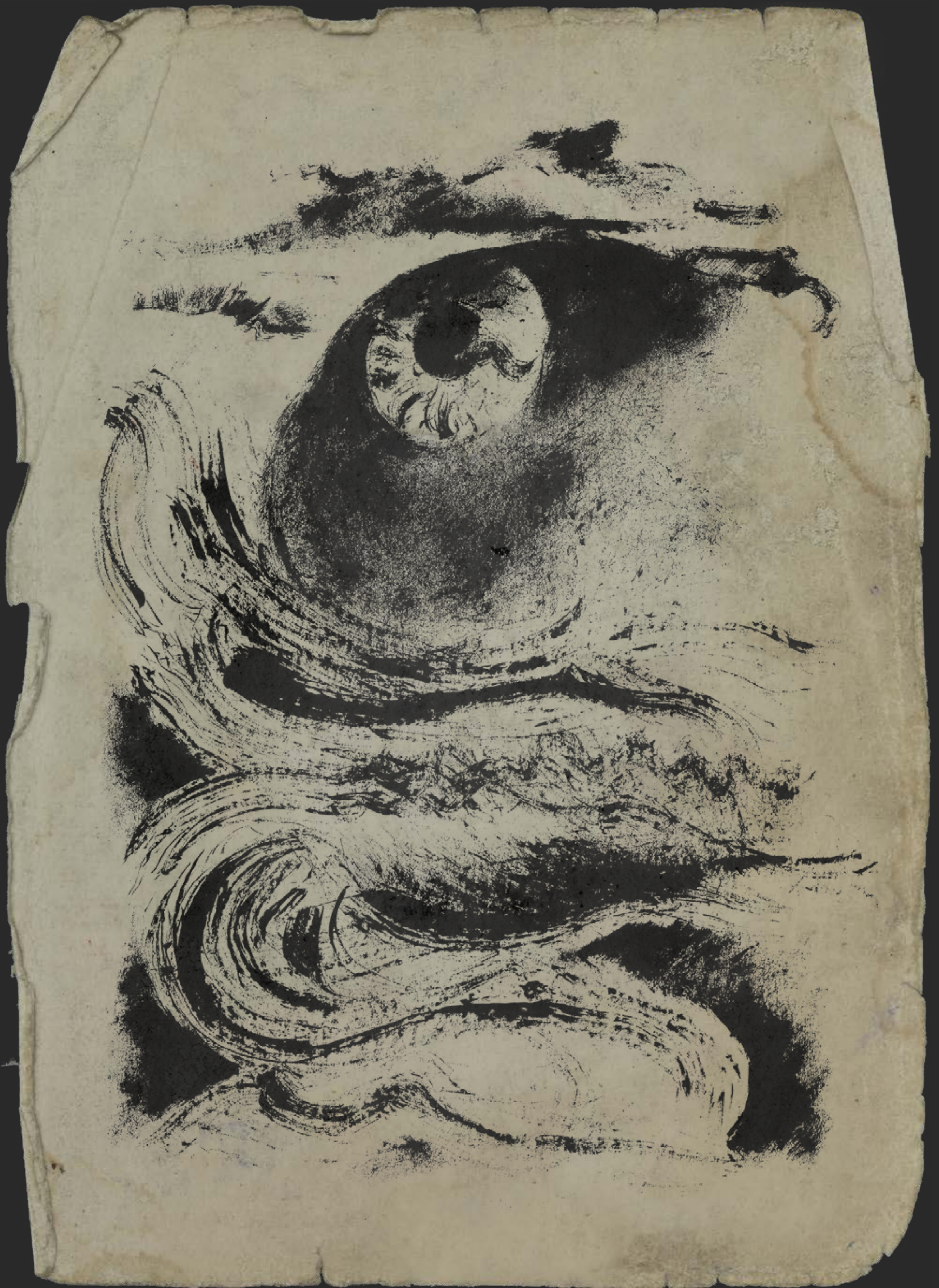


二 始まりの目覚め

最初に天があつた。天は広く、見事で、力にあふれていた。人間の心では、天をそれほどまでに満たす平安と知恵の深さを理解しえない。宇宙の万物は最も神聖なる吐息の、何ものも手を絶れていない魂の精髓の、神のなかの神の、あらゆる生命の始まりの形をしていた。

そうして、善なる性愛を持つ天はまどろみから醒めるがごとく目覚めた。天が起きあがると、それは霧のごとく深密であつた。そして、天の意識が世界を、無限の源を照らした。見よ、プラボ一の誕生である。〈民の父〉、〈天界の王〉、〈息を吐く者〉として知られる、そよ風のごとく柔らかく、嵐のごとく強靱なる者。

彼の土地はすばらしく、永遠に明るく、柔らかく、無限であり、いかなる憂いもなかつた。



三 無限の源

プラボーは善良で、彼の土地は羨しかった。それは、あらゆるものを収めてなおあり余るほどの空をだったからである。彼の力は創造の力であり、神である彼の吐息にひとたび満たされたものは存在できるようになり、天を飾りたてた。とはいえ、いかなる創造物も彼に喜びをもたらすことはなかった。彼はあらゆることを予見できたからである。空をもまた彼の創造物であり、プラボー自身と同じく、重さというものがなく、明るかった。

そして、プラボーは未知のものへの渴望だけを携え、天を訪れた。自らの土地の果てを見てみたい、彼の空みはそれだけだった。プラボーの思考は際限なく広がり、無限の空間が彼を圧倒した。

だが、この広大な空間で彼は何ものにも出会わなかった。彼は孤独と沈黙におののき、自らにとっては天すらも未知のものではないことにおののいた。プラボーは泣きだした。

風の眼から涙が大雨となって降り、滝のごとく注いだ。何千という神の吐息が空を掃でると、プラボーの眼に海の輝きが映った。



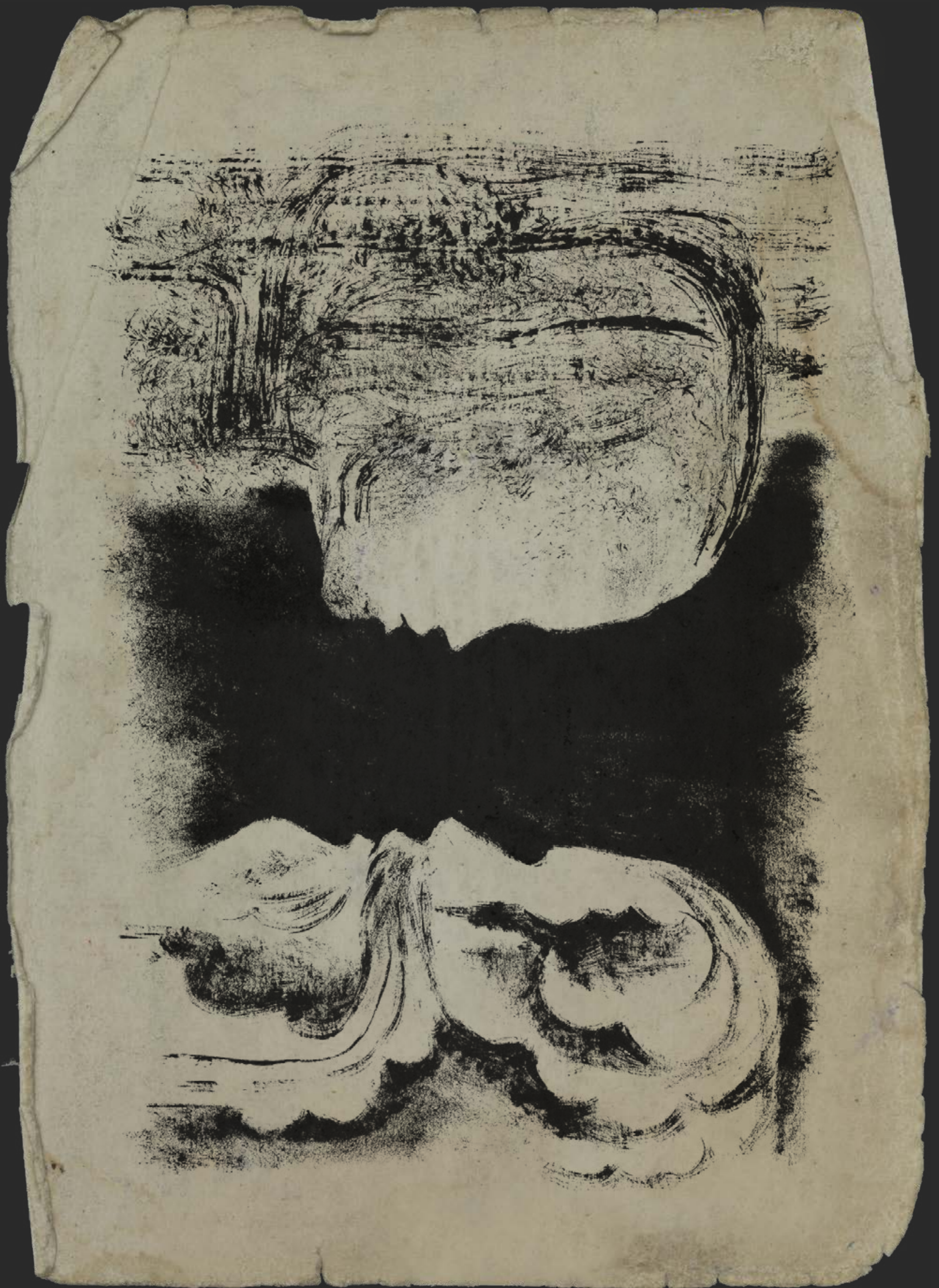
四 孤独を慰める

海面に映る自らの姿を見ると、プラボーの心臓は絶望に突かれた。今ではどこへ行くにも自らの言葉の鏡像がついてまわり、自らの孤独がいつそう際立つように感じられたからである。

プラボーが自らの鏡像のまえて嘆くと、彼の言葉にとこしえにつきまとう吐息が、泣きやまぬ赤子を慰める母親のごとく海面を揺れた。

自らの意いと空みを告げたプラボーの心は千々に乱れ、ついにはまどろんだ。目覚めてみると、自らの鏡像の隣に、別の何かの影が見えた。これまで、海面はあまりにまばゆく、水晶のごとく澄んでいたが、今はどうあがいても見通せなかった。

プラボーはもはや、矢から与えられた唯一にして絶対の存在ではなかった。この新しい何かは彼と等しく、しかし、まったく異なるものであり、それゆえ謎めいていた。そのようにして、プラボーは海面に近づいた。



五 生命の水

プラボーが海の肌を見ると、見通すことも、眼を逸らすこともできなかつた。

海に映る自らの鏡像の下に何かがあることに、彼は唐突に気づいた。それはあまりに美しく、あまりにやさしく、慈悲深かつたため、プラボーの胸から吐息を盗んだにちがいなかつた。プラボーは凍りついたようにそこに立ち、この眺めに魅了された。

このようにして、水が命を得て、〈神秘と慈悲〉のモユツが誕生した。彼らはいずれも同じ空をより生じたため、彼ら以外には何もなかつた。そのため、お互いに歩み寄ることを望んだ。だが、両者の性質は異なり、互いに接してはいても、ひとつになることは叶わなかつた。さながら硬貨の表と裏のごとくに。彼らは無限の水平線に勾かたれ、触れ合うことができなかつた。



六 娘みの誕生

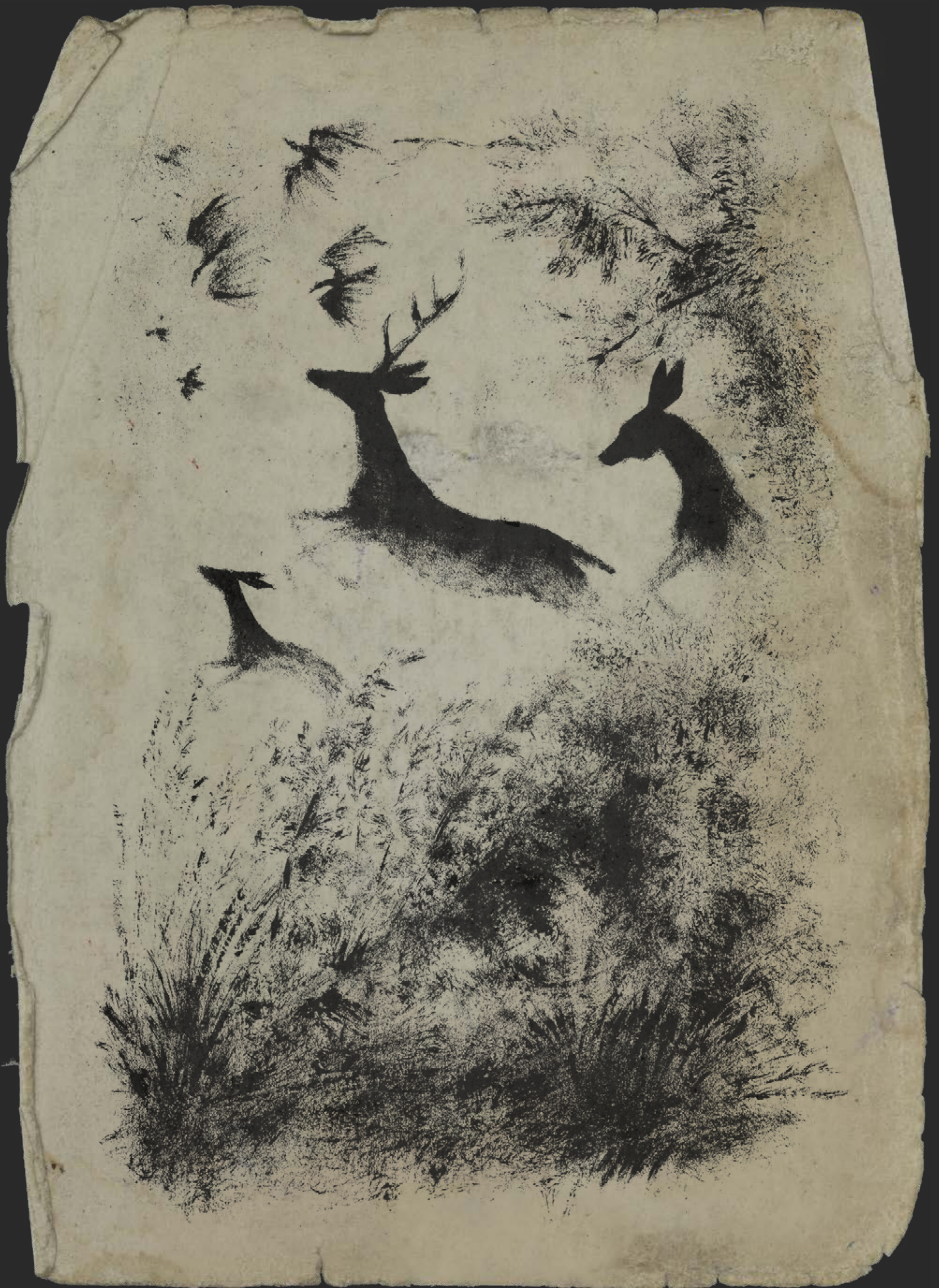
壘は豊かで肥沃なもの。それは新しい家を建てる土地のように、強固な基盤である。それはふたつをつなぐ橋のようであり、汝を導く道のようなものである。だが、壘は貪欲なものでもあるまいか？それは沼のごとく汝を引き込み、自らの作物を貪ってはまた育ち、貪ってはまた育つ。

そのいずれもまことであり、プラボーとモコツが互いに与えた壘は羨しかった。彼らの吐息が雲となり、波となり、砂浜が現われた。それは輝き、黄金色で、柔らかく、温かかった。

そのようにして、ふたりは神々として黄金の大地に降り立ち、抱擁に加わった。神なる彼らの肉体は欲望と充足、恐れと安堵、喜びと悲しみ、好奇と祝福ではち切れた。

大地は神々の温かい液汁を浴びて震え、神の足が触れたことで目覚めた。だが、ふたりの欲望も壘情も、大地には向けられていなかった。大地はそれを理解し、嫉妬に焼かれて自らの身中を震わせた。

このようにして、神の壘に醜妬し、ヴェレスが目覚めた。その壘は彼に向けられたものではなかったにしろ。ヴェレスの唇は欲望とともに走り、創造の神力が彼の指からほとばしった。そしてプラボーはこれを見た。モコツもまたこれを見た。

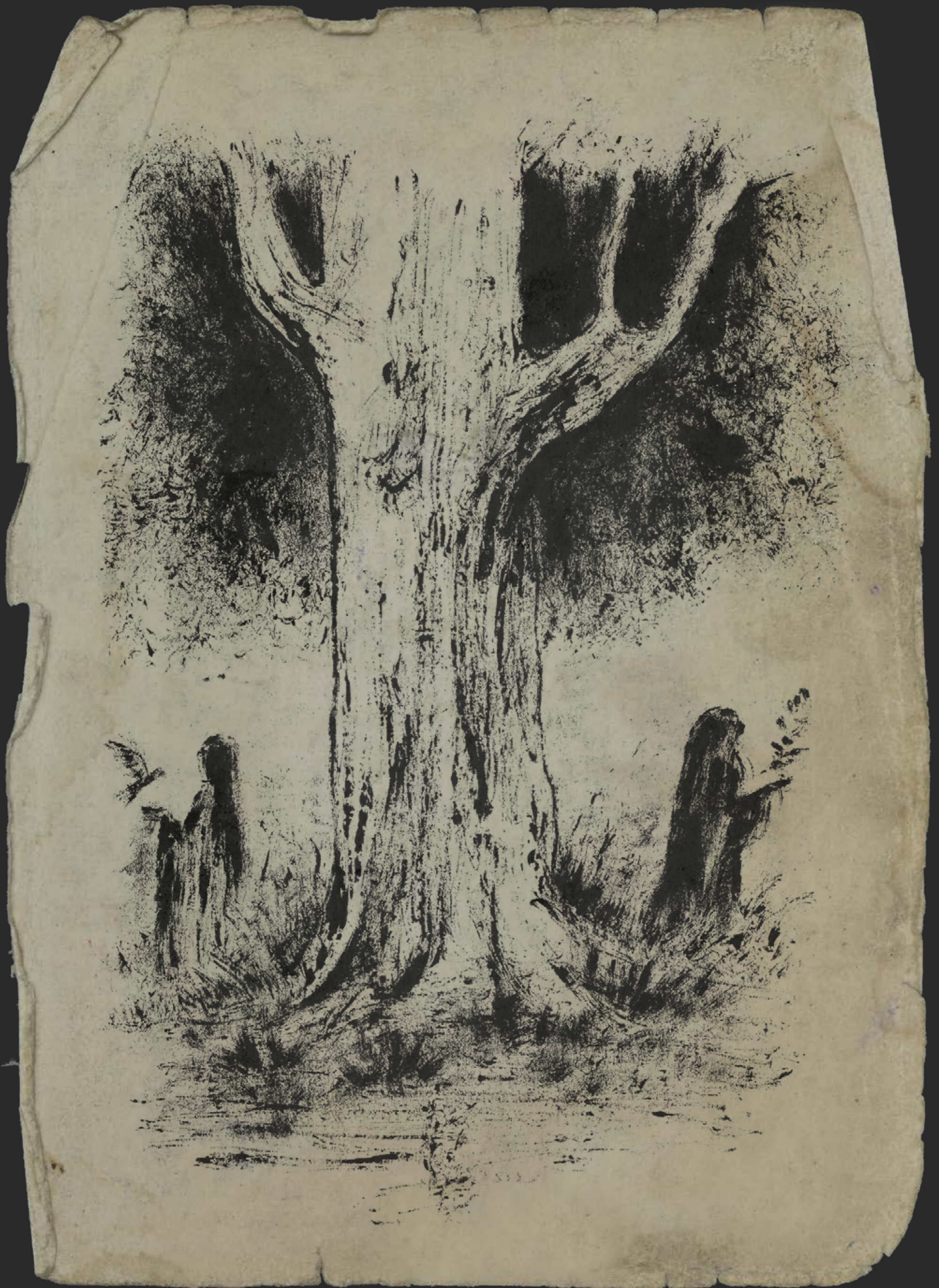


七 ヴェレスの創造

山を形づくり、砂を運び、谷間でさきやくのは風であるが、大地にとって水より尊いものはなかった。水は浜辺を抱擁し、その掌数の銀の指で亀裂を癒やし、洞の最も深く、最も暗い裂け目にまで染み入るからである。

そのようにしてヴェレスはモコツを産し、彼の渴きを癒やす唯一の者とした。ヴェレスはモコツを、彼女の指先を、神なる彼女の靈気を感じた。モコツは生命であり、慈悲であり、忍耐だったからである。

ヴェレスは小川から水を引き、砂を潤した。それは神なる彼の産により、赤く、熱くなっていた。このようにして生まれた粘土より、ヴェレスは植物と動物とを削った。彼は自分の削った形を氣に入ると、神の力を使い、それらに命を吹き込んだ。神祕のさきやきが風に乗る、漏れ聞こえた。



ハ 不注意の影

そうして、世界は着々と美しく、いたるところに動物たちの姿が見られるようになった。あまりに肥沃で柔和だったため、プラボーは最善のモコツが彼への恩と感謝を示すためにそれらを創造したと考えた。プラボーはなんらの憂いなく、植物が育ち、動物が歩きまわる姿を見つめた。彼の眼と心は喜びに満たされた。そのようにして、プラボーは恩する者からの甘き便りを待った。モコツは自分のために餌り物を用意し、世界を見せてまわるつもりなのだろう。そのように考えてのことである。

そのころ、モコツは新たに生まれた創造物たちのなかにプラボーの吐息と力を見た。そして、それらは恩するプラボーが謙実と献身への礼として彼女に餌ったものであると考えた。そのようにして、モコツはプラボーの邪魔をせぬよう、彼が心穏やかに餌り物を仕上げられるよう、時間を与えることにした。

それでも、モコツは木の幹のあまりに太いことに、花々のあまりにみずみずしいことに、鹿たちの肢の速いことに、熊たちの疲れを知らぬことに感嘆し、好奇の心を抑えられなかった。そのようにして、彼女はひそかに動物たちのあとを追い、プラボーの眼から離れた。プラボーの未完の創造物を見てしまうことで、彼をうろたえさせたくなかったからである。



九 冥界

モコツは世界をさまよひ、やがて大きな山の麓に出た。それは風に運ばれた土が大地の震えによって盛りあがった山だった。硬い岩のなかに、モコツは暗く、冷たい洞を見た。温かく穏やかな水が流れたことにつくられた洞だった。旅に疲れたモコツは水が力を与えてくれることを願ひ、水晶のごとく澄んだ小川に手を伸ばした。まず、モコツは川底が全て覆われていることに気がついた。それは美しく、誘うようで、彼女がこれまでにこの世界で見た、いかなるものよりもきらめいていた。モコツが顔をあげると、洞の暗い場所にも同じく光が見えた。それは言葉では言い表わすことのできぬ何かを約束するようにきらめいていた。

そのようにして、疑うことを知らず、好奇心の強いモコツは暗い洞に入っていった。それはヴェレスの王国への門につながっていた。次の瞬間、大地が揺れ、入口が崩落し、モコツは冥界に閉じ込められた。ほかに出口はなかったからである。



十 帰ってきた孤独

世界の水は日に日に黒ずみ、濁っていった。水が流れるのをやめると、かびくさい静寂が空気を満たした。

そして、プラボーが降り立った。彼は重えていた。償い物をくれるはずのモコツから、いまだ償いがなかったからである。彼はこの世界を隅々まで歩いてまわった。だが、最悪の者はいずこにも見つからなかった。

プラボーは呼びかけ、耳を傾けたが、空寂だった。プラボーが聞いたのは動物たちの叫び声だけだった。彼らの語はもつれ、なんら役に立たなかった。

矢に戻ると、プラボーはその高みから窺う者を捜した。もし地上に姿が見えなければ、モコツは眼では窺くことのできぬ地に、すなわち冥界に隠れているにちがいないからである。



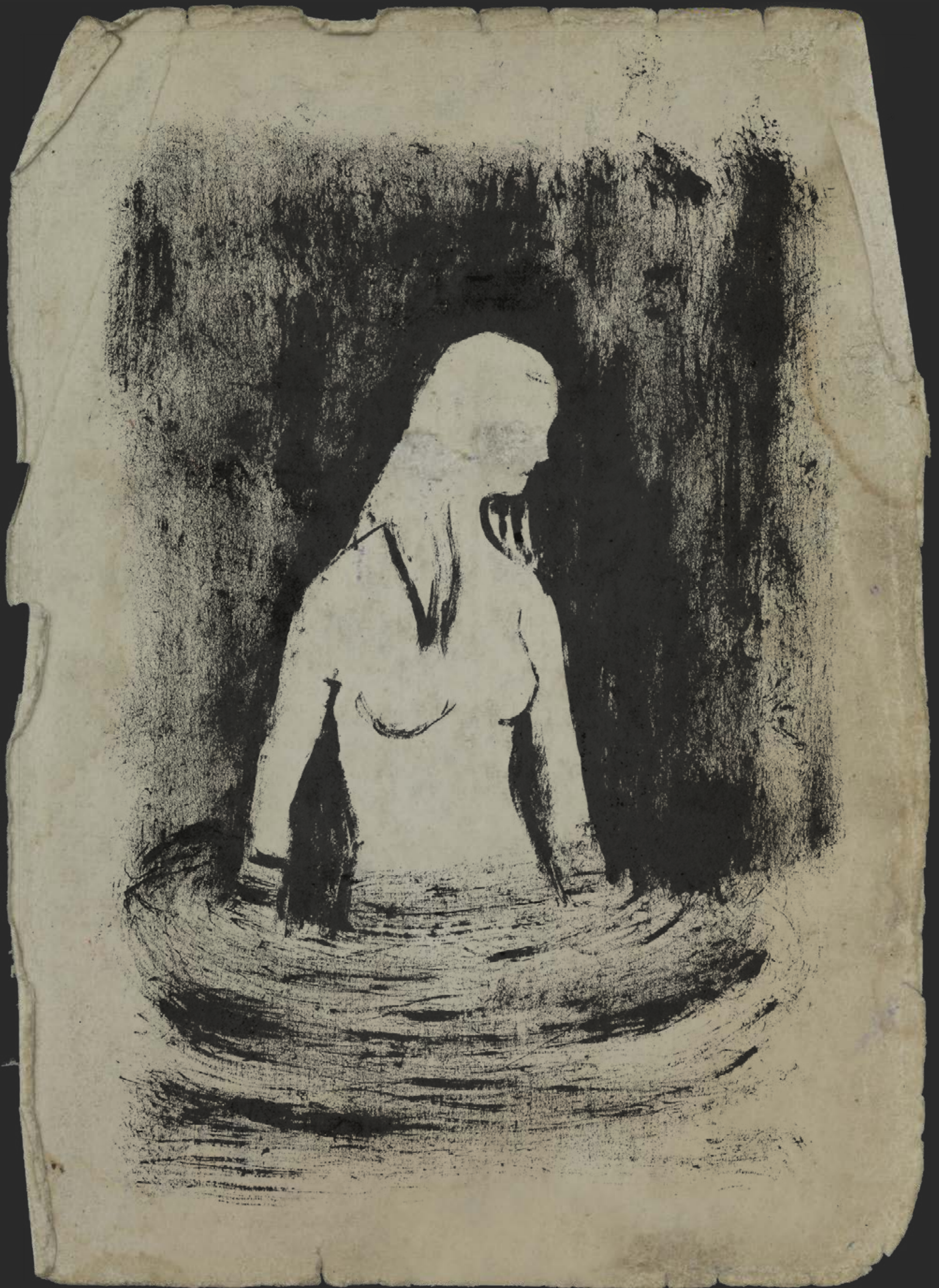
十一 雷を司る者

苦惱するあまり、プラボ一の心はかき乱され、混乱した。そして恐れた。彼の力は震える空気のなかで揺れた。黒い雲が低い空に吹き、大地を覆った。動物たちはみな恐怖した。大嵐が吹き、神の力が衰き、神の涙が流れた。猛る風が森を吹き抜けると、ふたたび波が立ち、川が流れた。

天よりのいかずち。それは呪いであり、呼び声であり、絶望であり、誓いであった。そのようにして、あらゆる稲妻と稲光の狭間、大いなる暴虐の狭間より、勇気と正義が生まれた。ペルソの誕生である。彼は神の敵を討つ者、プラボ一の敵を討つ者であった。

天と地の粒が震えた。ペルソの力が上は雲を、下は硬き地面を貫いたからである。彼を見ると動物たちは逃げ、最も太き木もこうべを垂れた。

雷の王は荒々しく、自らを疑うことを知らなかった。このようにして、世界には三粒の神、すなわち天のプラボ一、水のモコツ、大地のヴェレスしかなかったため、ペルソは復讐心に満ちた眼を〈冥界の王〉に向け、さながら稲妻の一番粒のごとく、詛りの言葉投げた。



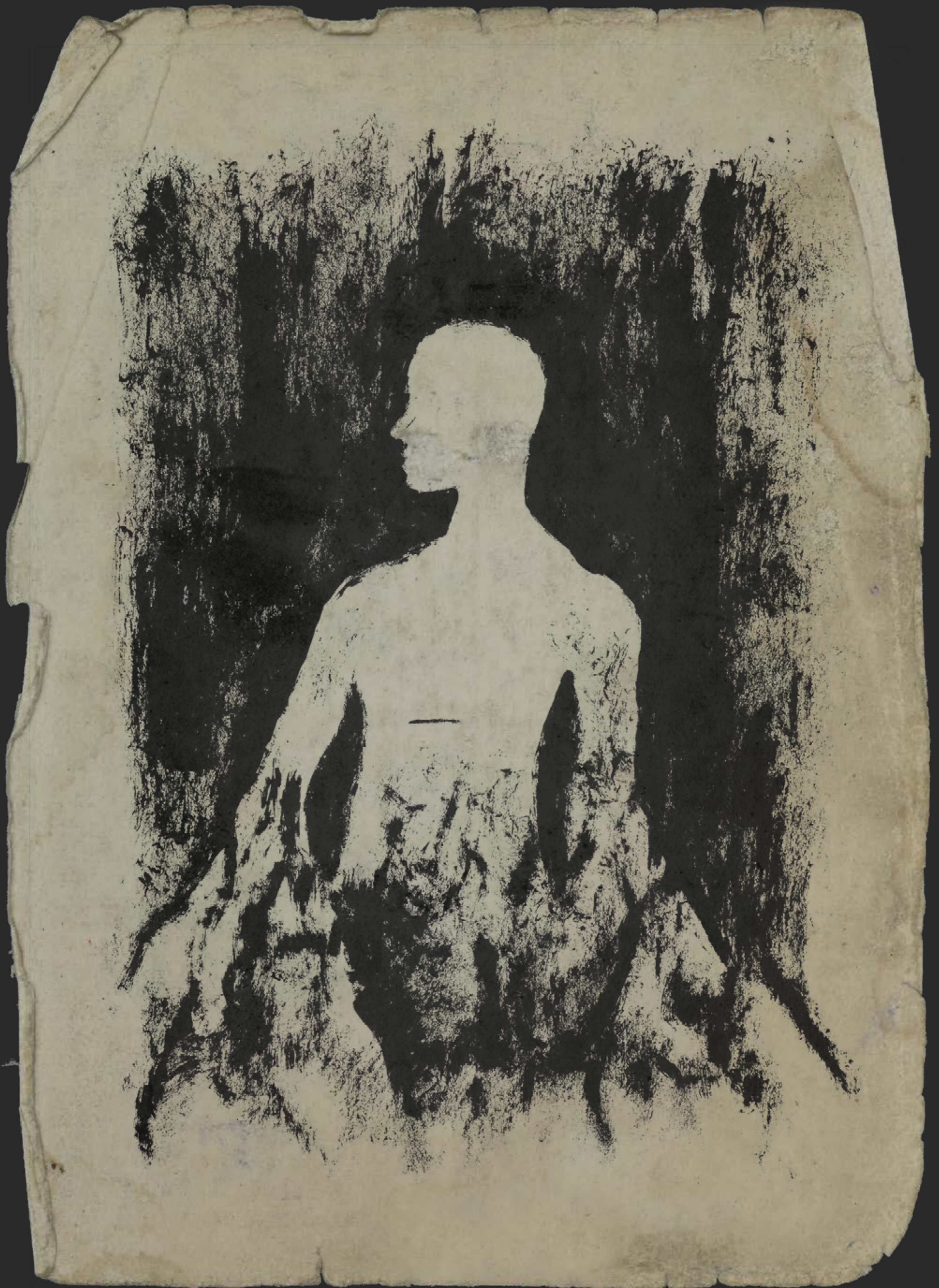
十二 女の創造

ペルソは雷を打ち、多くの稲妻を投げた。だが、彼の力をもってしても、岩々を穿くことはできず、ヴェレスが身を隠す冥界には届かなかった。しかし、ペルソにはプラボーに立てた誓いがあった。そのため、彼はあきらめようとしなかった。毎度も毎度も戦いの熱に駆り立てられては、力を失い沈黙した。

モコツを求めるあまり、プラボーは萎え、地に降り立った。だが、大地は汚れ、硬く、ヴェレスそのものを思わせた。そこでプラボーは荒れくるう川に向かい、記憶を貪るごとくに川を貪った。その清らかな水をすくい、神の両手を用いて、光り輝く水滴を自らの焦がれる姿形へと変えた。

このようにして、プラボーは人間を創った。彼はそれを女と呼んだ。自らの息を吹き込み、女の肺と心臓を動かすと、〈生命の水〉で女の肉体を満たした。するとやさしさ、愛、忍耐、理解、謎、産が芽生えた。

プラボーは女を地面の上に置き、しげしげと眺めた。モコツの似姿として創られたそれは好奇の心に満ちていたが、謎にも満ちていた。

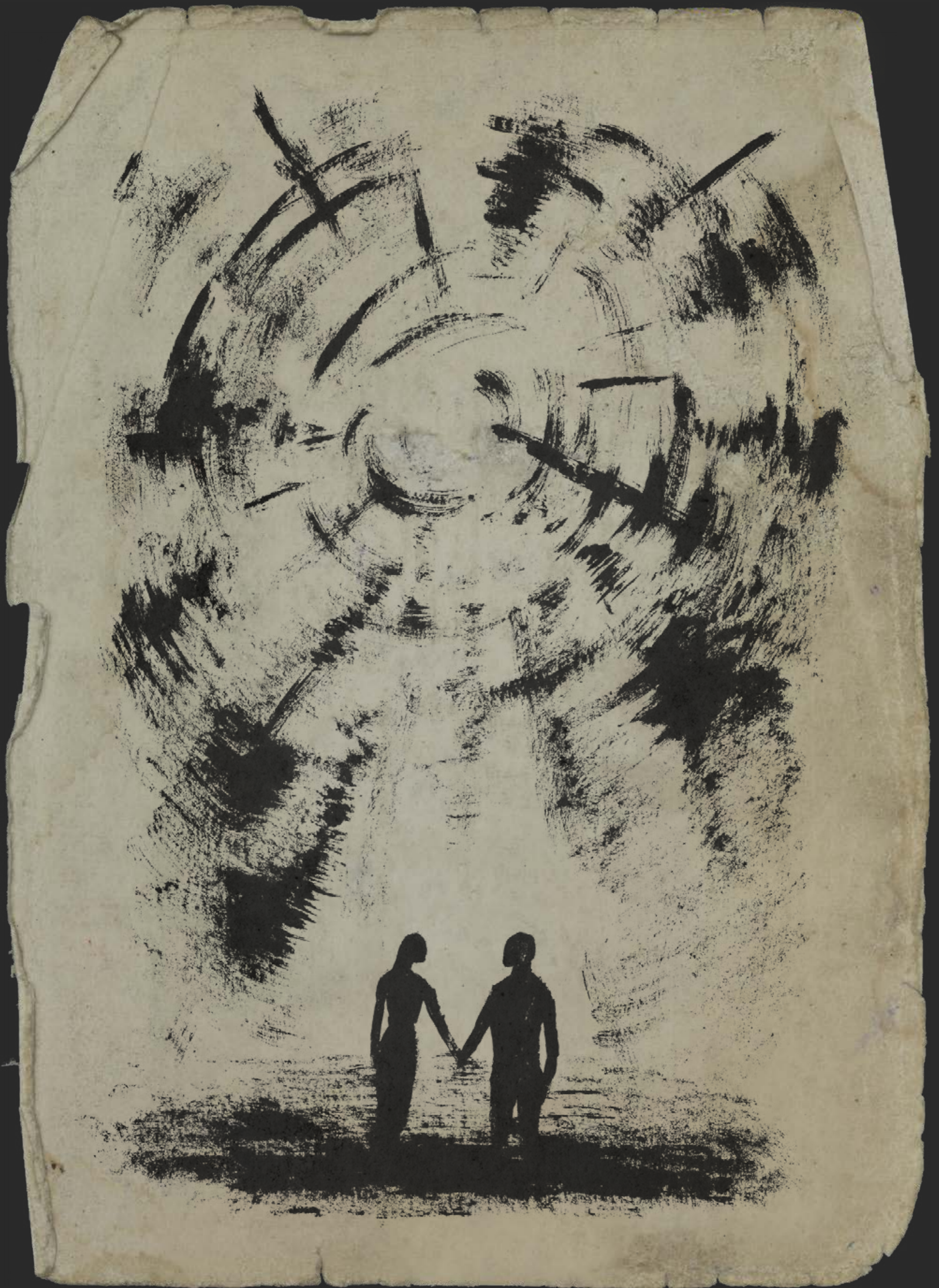


十三 男の創造

女は眼を下にやり、石をひとつずつ裏返すと、動物たちの痕を追った。が、暗い洞を恐れ、熊を避け、長い旅に耐える力を持たなかった。何よりも、女は孤独で、聴かされた。

そのようにして、プラボーはもうひとたび大地に降り立ち、憎きヴェレスの岩を取った。なんと知恵のまわることか！ 大地は最も水がなければ生きてゆけない。大地は硬く、山のごとくであり、雨、風、嵐にも耐える。

そのようにして、彼は最も頑丈な岩を選び、自らの似姿を彫った。そして命を吹き込むと、それを男と呼んだ。その創造物は岩のごとくに硬く、そして、女を愛した。ヴェレスとプラボーがモコツを愛すがごとくに。ヴェレスとプラボーが溶け合い、ひとつになったかのごとくに。男は狂暴であると同時にやさしく、嫉妬の深さと同時に思いやりの深さも持っていた。男は獣たちから女を守り、食わせ、はるか遠方への旅につき添った。



十四 ダボ一の誕生

人間たちが殖えていくのを見て、プラボーは眼を細くした。モコツの似姿と彼の似姿が密し合い、大地を闊歩し、そしてほかの何ものよりも美しく、幸福で、強かったからである。

好奇心と欲にあふれる人間たちが世界のあちこちに広がっていくのを見ると、プラボーはいつそう喜んだ。男の力添えがあれば、女は冥界に通じる門を見つけられるにちがいないからである。神なるプラボーの吐息は、モコツが冥界にいると感じていた。

彼の喜び、希望、自尊心が矢のなかで輝いた。さながら神の力を示す大なる灯火のごとくに。すると太陽が生まれ、あまねく光を一身に集めた。

太陽はきわめて美しく、まばゆく、熱く、それゆえ人々はそれを崇めた。自分たちの肺を満たす、見えざる風の吐息を崇めるよりも熱心に。が、プラボーは喜えなかった。太陽は彼の子であり、人々がモコツを捜しつづけられるよう、人々に仕えることが太陽の務めだったからである。

神の力に満ち、人々の祈りに支えられ、太陽は目覚めた。そのようにして、人々の守護神にしてプラボーの使いであるダボ一が生まれた。



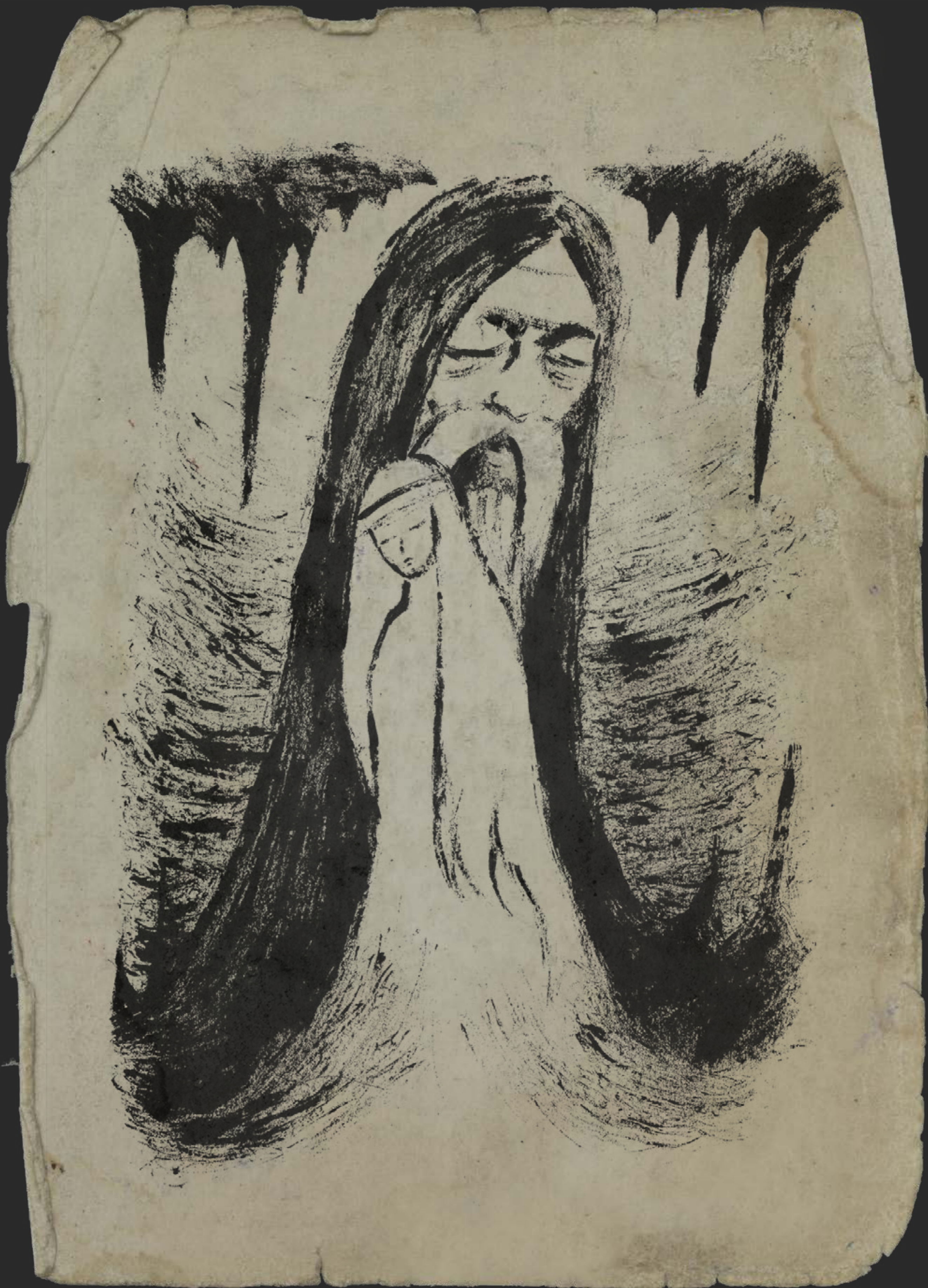
十五 幸福の時代

地上の女たちと男たちにとって、生はよいものだった。プラボアの吐息が彼らの肺を満たし、ダボアの輝きが彼らの眼を喜ばせ、ペルソの力が神に対する信心と信頼を呼び起こした。

人間は世界にあまねく店がり、植物と動物に囲まれ、木を切り倒して家をつくり、獣を狩って肉と皮を集めた。

人間たちにとって、生はよいものだった。足りないものはなかったからである。神々は空襲、寒さ、獣から彼らを守った。そのようにして彼らは殖え、その数が増すと、プラボアの喜びも増した。人間たちはすぐに地上のあらゆる土地を見つけ、あらゆる秘密を神々に告げるだろう。プラボアはそう信じていた。そして、神々は人間たちの祈りを享受していた。それらは甘露のように甘く、神々を力で満たしたからである。

その一方で、大地は人間の影響によって変化していた。木の枝は人間の斧のまえに膝を屈し、狩られた獣たちは骸となって連なり、豊かな茂みはもの言わぬ砂漠に変わった。



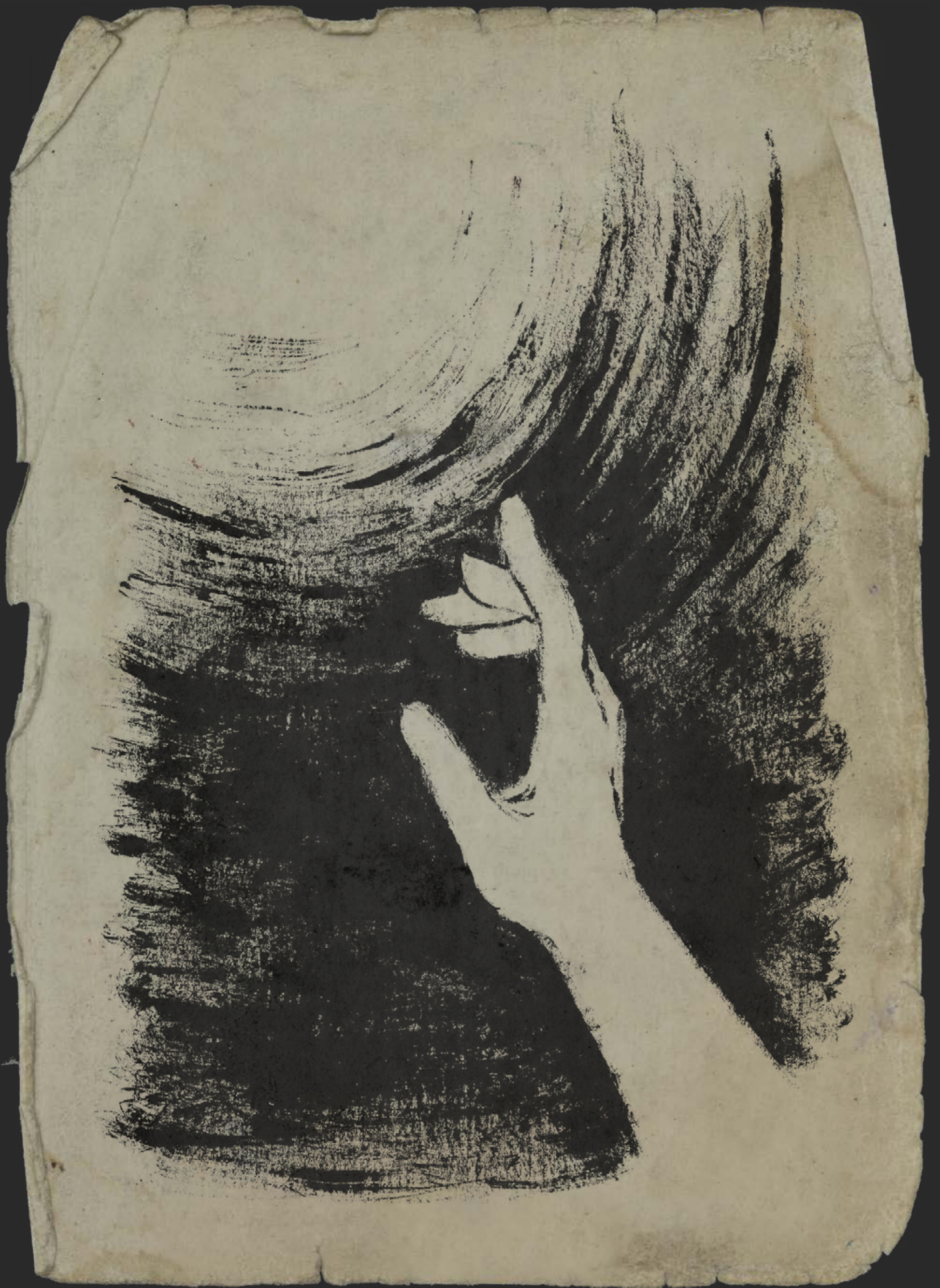
十六 黄金の王国

すがすがしい空気と水の急流を離れ、モコツは死と泣いた池とのあいだを縫って歩き、洞窟から洞窟へとさまよっていた。

そのとき、ヴェレスが現われた。陰鬱な様子で、渇き、求め、渇望していた。女神は恐怖したが、それを表には出さなかった。

ヴェレスの王国の玄関口はおどろおどろしく、数種の魔獣が駆けまわっていた。が、ヴェレスがモコツをさらにその先に導いていくと、そんな光景は一変した。彼の洞窟のなんと壮麗なることか！ 山々の突き出た肋骨を宝石と金とが埋め尽くし、それらが闇を照らすほどまばゆく輝き、見る者の眼を喜ばせていた。

ヴェレスの王国には美が満ちていたが、命が欠けていた。そのため、モコツは彼を憐れんだ。彼女にはヴェレスの望みが手に入るようにわかったからである。ヴェレスが悲しみと沈黙をもってモコツを見ると、生命の奇跡が見えた。が、それはヴェレスが死ねれば崩れ落ちてしまう奇跡だった。ヴェレスが冥界で彫りうるのは死したもののだけであり、彼が地上で刻った植物や動物は、いずれも王国の玄関口より先に足を踏み出そうとしなかった。



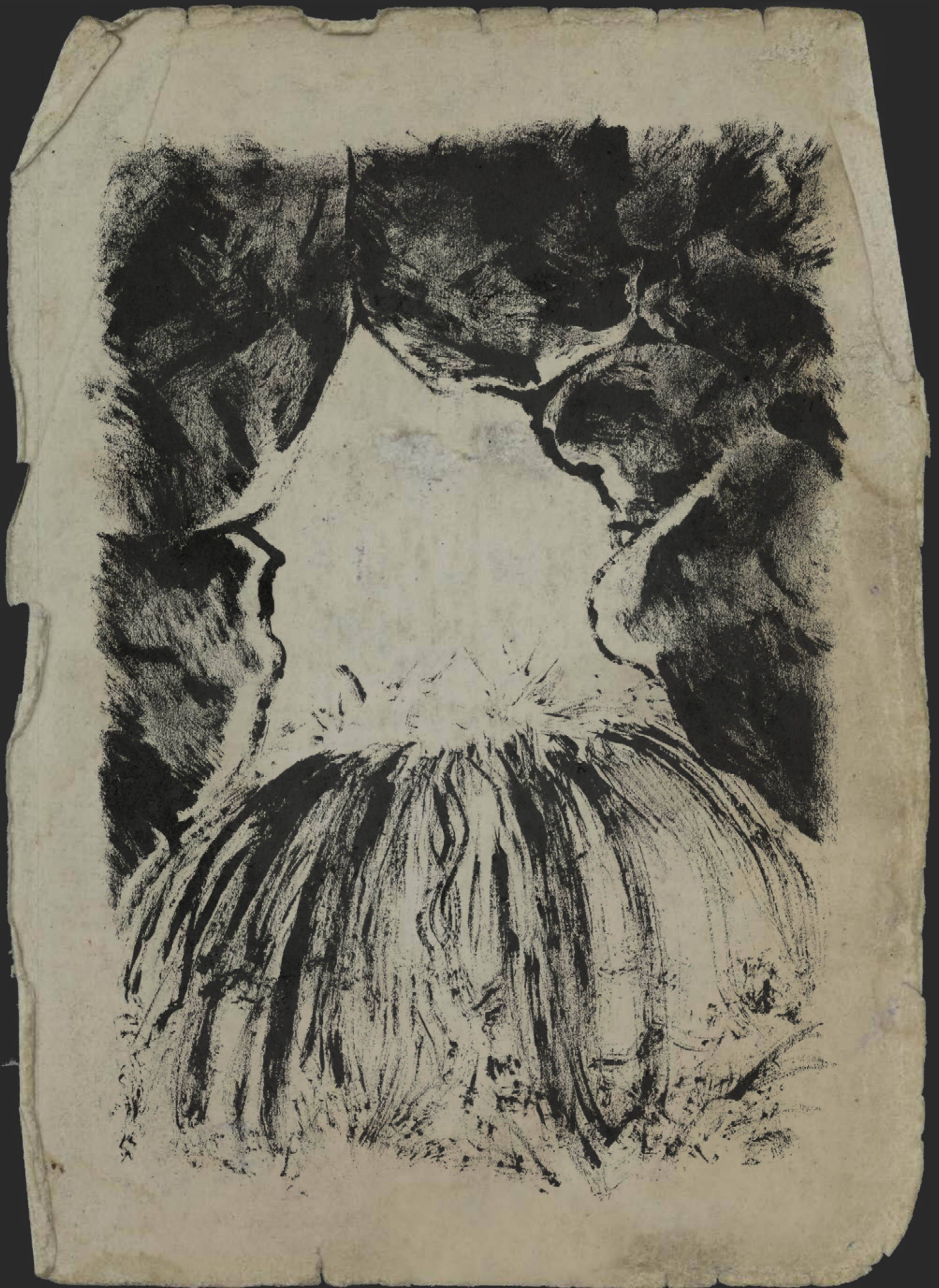
十七 プラボーの饅り物

このようにして、モコツは切望の眼差して地表を見た。彼女は自らの大切な動物たち、すばらしい植物たち、ほとぼしる水流、そして、その力でもってすべてを動かす、鋭う風を見た。

そのとき、その生き物たちのなかに、モコツが見たことのないものがいた。それはほかのどんなものともちがっていた。自分自身にそっくりだったからである。それは女であった。女の隣を男が歩いていた。男はプラボーの生き写しだった。

モコツはすぐにこう考えた。彼らはわたしのために創られたものにちがいない。モコツとプラボーの姿を祝い、記憶するために。モコツは彼らを気に入った。

だが、ヴェレスも男と女を見、嫉妬に歯をきしらせた。〈冥界の王〉が何よりも腹を立てたのは、人間が覚定見に殖え、ヴェレスの創造物を破壊していることだった。そして、モコツの喜びがヴェレスの心を砕いた。



十八 時なき時の終わり

ヴェレスは蒼洗に満ち、モコツは彼が自分に智を向けようとしているのを見た。そして、大なる蒼惱がヴェレスの体内で蠢んでいるのを見た。ヴェレスは人間がこの世界にばらまいた破壊をモコツに見せた。人間たちは永遠に若く、半神のごとき強さを備えていた。モコツも心を亂された。彼女は男と女の美しさに気を取られるあまり、彼らのおこないがいかにか定見であるか、気づいていなかった。

モコツは言えた。プラボーとその創造物を愛していたからである。だが、なんということか、彼女はヴェレスの創造物のすばらしさにも心を打たれ、ヴェレスの動物たちと植物たちを憐れんでもいた。

そのようにして、モコツが洞窟の崩壊した場所に行くと、死した小川が地表の手前まで届いていた。彼女が水の溜まりに絶れると、その指によって水が目覚め、岩に注ぎ込み、刻れ目を刻んだ。

モコツは自らの身に〈生命の水〉を呼び寄せた。そして、生命を与えられたあらゆる創造物について、それがヴェレスの獣だろうと、薬草だろうと、プラボーの人間だろうと、いずれ女神のもとへ、冥界へと返るようにした。このようにして、地上の生命に終わりがもたらされた。

このときより〈時〉が始まり、死によって〈生命の川〉の流れが変わり、冥界の暗き刻れ目に注ぐようになった。



十九 魂の救済

あらゆる創造物は恐怖した。すべてのものが定命の存在となったからである。植物はしおれ、動物は衰え、女の子宮は乾き、男は灰に変わった。モコツは生命が流れ出ていた泉の流れを止め、物事はもはや〈始まり〉のときとは様相を異にしていた。

女たちと男たちは死につつあった。プラボーによって吹き込まれた吐息は人間たちのもとを去り、最後の吐息は〈生命の水〉のおかげで享受できていた命を切望し、世界じゅうをさまよい、嘆き、天に呼びかけた。

そこでプラボーは新しい動物を創った。空気のように軽く、空をすみかとするこの者たちを、彼は鳥と名づけた。定命の肉体を離れた吐息は鳥の背に乗ってプラボーのもとに帰り、めいめいの記憶を彼に伝えた。人々はその吐息を魂と呼んだ。



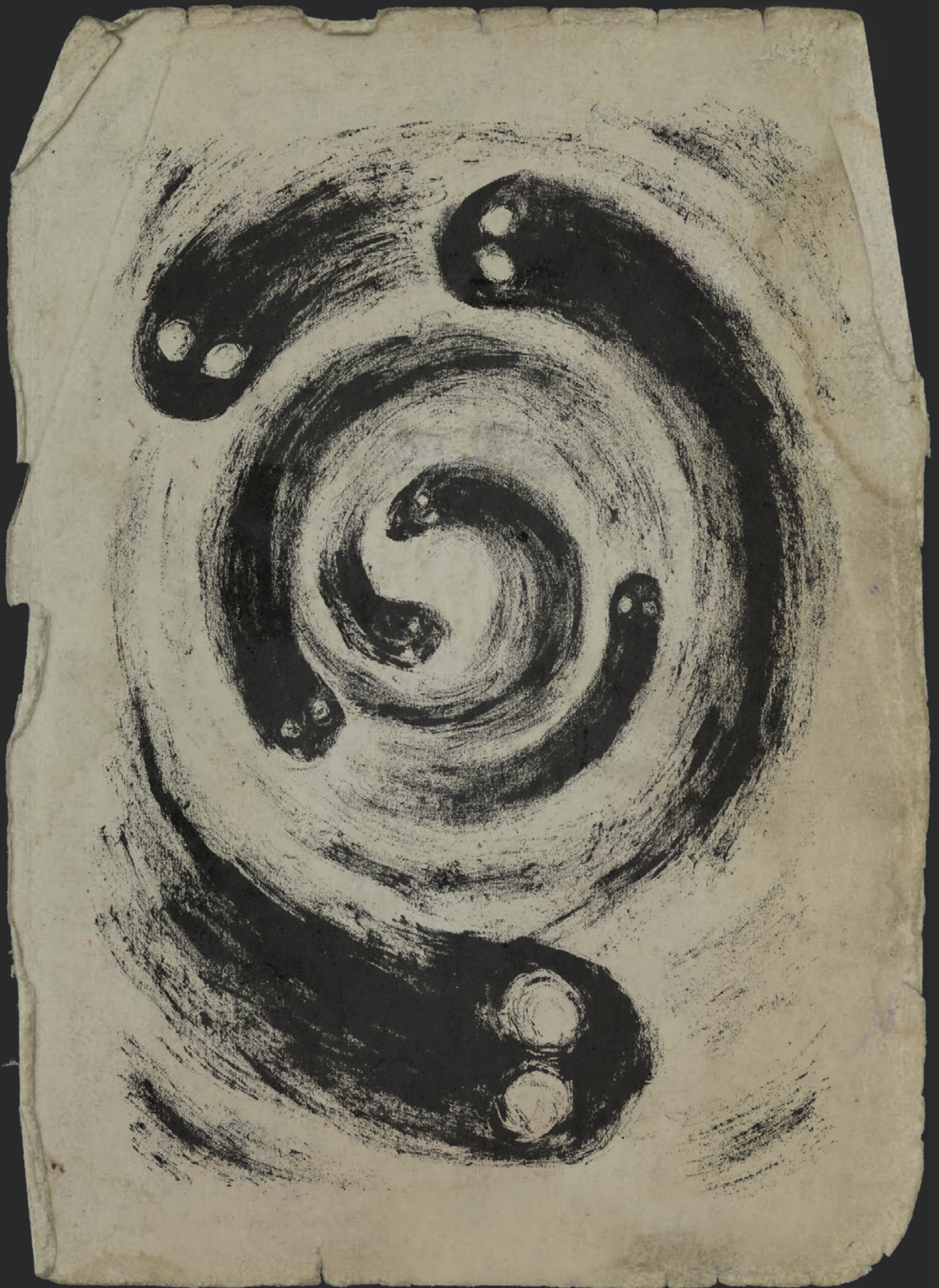
二十 ヴェレスの使者

ヴェレスは鳥の背に乗る魂たちを、自今の土地の空を、モコツの孤独を、地表に向けられた彼女の焦がれるような眼差しを見た。

そのようにして、ヴェレスは鳥の敵を削った。鳥たちが天につながれているごとく、地につながれた者を。鳥たちが身軽なごとく、体の重らかな者を。鳥たちが陽気なごとく、陰気なものを。そして、羽毛の代わりに、ヴェレスはそれを鱗で覆った。歌う能力の代わりに、彼はそれにしゅうしゅうと音をたてるよう命じた。好きなところへ喜んでゆける代わりに、彼はそれの手足を奪い、ありとあらゆる穴のなかに滑り込めるようにした。このようにして、彼はこの者を自らの使いとし、蛇と呼んだ。

蛇たちは人間の魂を求めて徘徊した。魂たちに噛みつき、巻きつくために。魂たちの乗る鳥を殺し、丸呑みにするために。そして、ひとたび人間の魂を捕らえると、蛇はそれを逃げ場のない地下へと運んだ。

ほどなく、冥界は魂であふれ、ヴェレスがその主となった。彼らはそこで永遠にモコツの相手をする事になった。時の経わりが来たるまで。



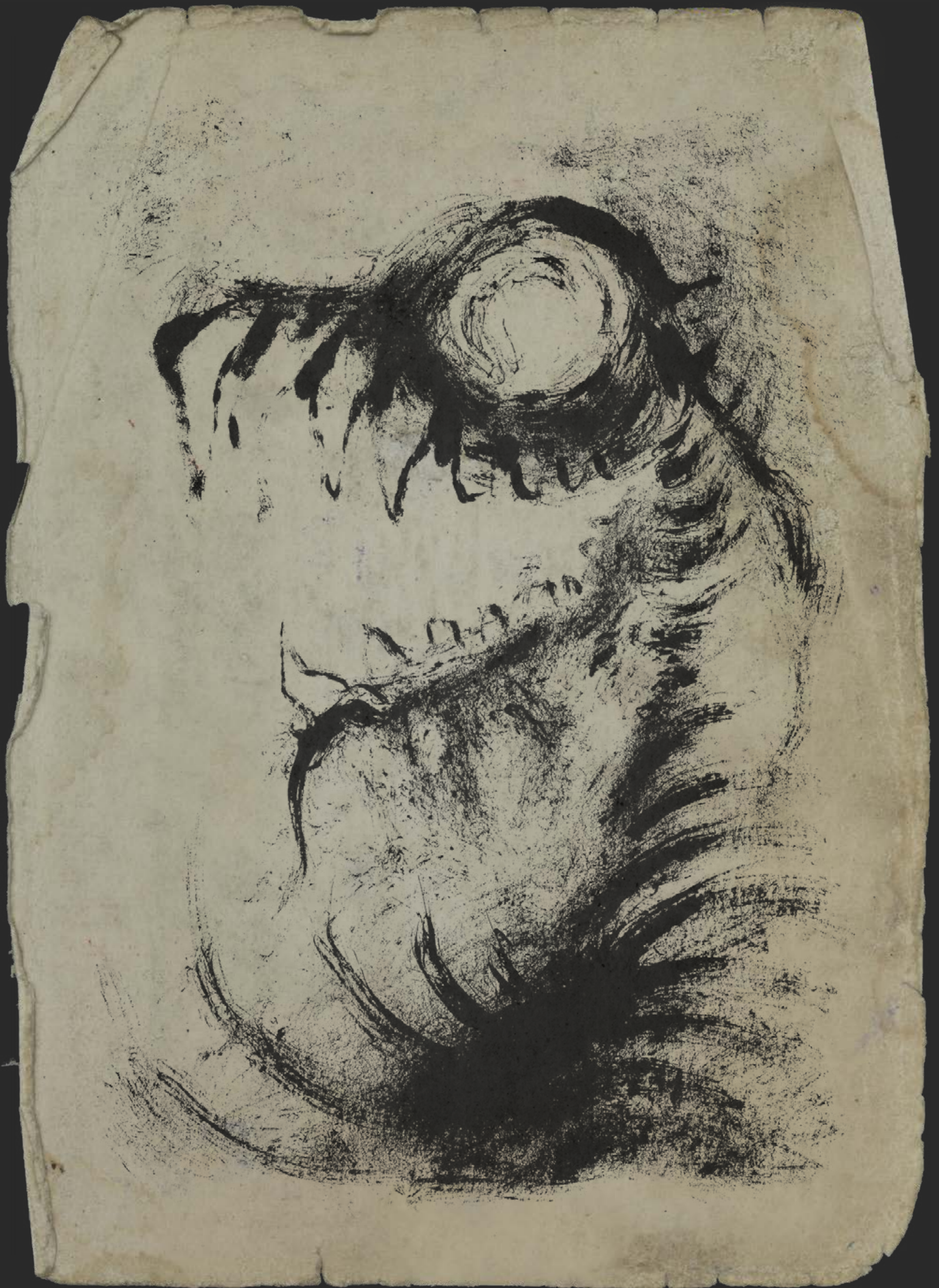
二十一 魂の二元性

ヴェレスからの饅頭物はモコツを心底から驚かせた。

なかには美しい魂もあった。太陽の光のごとくまばゆく、大気のごとく軽やかで、湧き水のごとくすがすがしい魂も。それらのなかに収まっている記憶に飽れると、モコツは楽しい気持ちになった。それらから流れ出る思いが、彼女の心を祝福と温もりで満たした。

だが、そうではない魂もあった。形容しがたい重荷に浸され、喉が詰まり、糞穢にとげの刺さったかのごとき魂も。モコツはそれらを避けた。彼らの恐怖、悲しみ、怒りを感じたからである。そうしたものは心を毒し、肺を重くするからである。

ヴェレスもまた、両者のちがいを知った。そして、苦惱する魂は生命を吸い尽くし、毒に変えてしまうことを知った。そこで、彼はそうした魂を捕らえ、創造に失敗した残骸から集めた殻にそれらを入れた。それらは見るも恐ろしく、できそこないの姿形に閉じ込められた魂たちが思いつくのは、恐ろしい考えばかりだった。そのため、ヴェレスはこれらを〈恐怖〉と呼び、地上に送り込んで人間たちの対処に当たらせた。



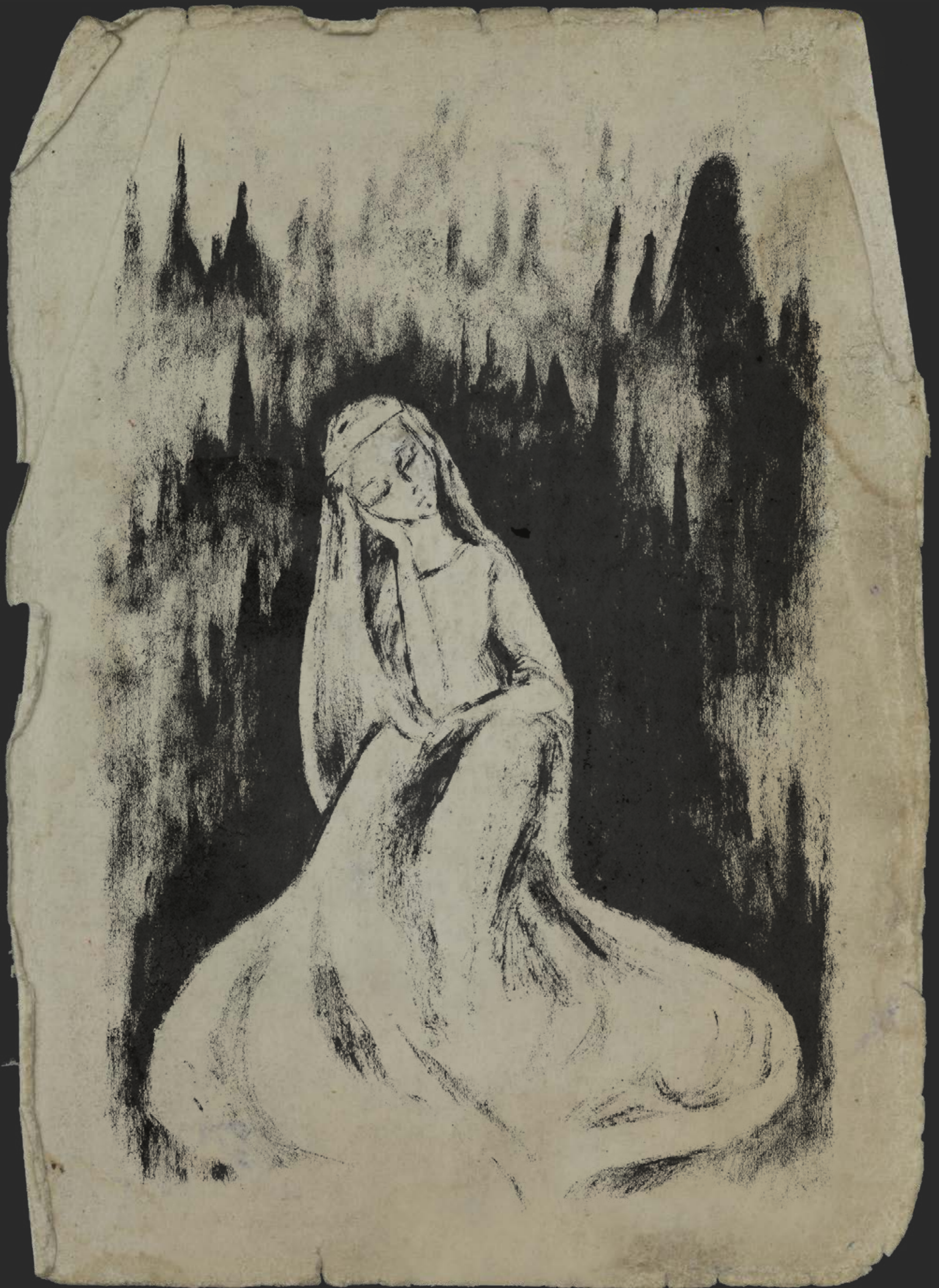
二十二 凄惨の時代

なんたる恐怖! なんたる不幸! ヴェレスは冥界から最初の〈恐怖〉を放ち、大地の最深部をひらくと、腐敗したありとあらゆるものをそこからばらまいた。そして、害虫たちが人間たちの魂を食い尽くした。

かつて清らかであった〈生命の水〉を濁した泥は、ヴェレスの手より生まれたものであり、偽りの神の産物であった。それは人間の心と精神を蝕み、記憶を暗くし、苦悩とともに彼らの感情を腐敗させた。

そうしたすべてのものから、ヴェレスは悪夢の軍勢を誕生させた。不安、不道徳、欲望、情熱、自尊心、恥辱が現実となり、人間らしきもの、大気より生まれたものはみな等しく憎悪された。

ヴェレスの力は容赦を知らず、大きかった。が、自らの創造物を人間に踏みにじられ、最悪の者が日がな矢を仰いでいるとき、ヴェレスが感じた屈辱と恥辱のほうが大きかった。そこで、ヴェレスは人間に対してためらうことなく〈恐怖〉を解き放ち、かくして〈凄惨の時代〉が始まった。

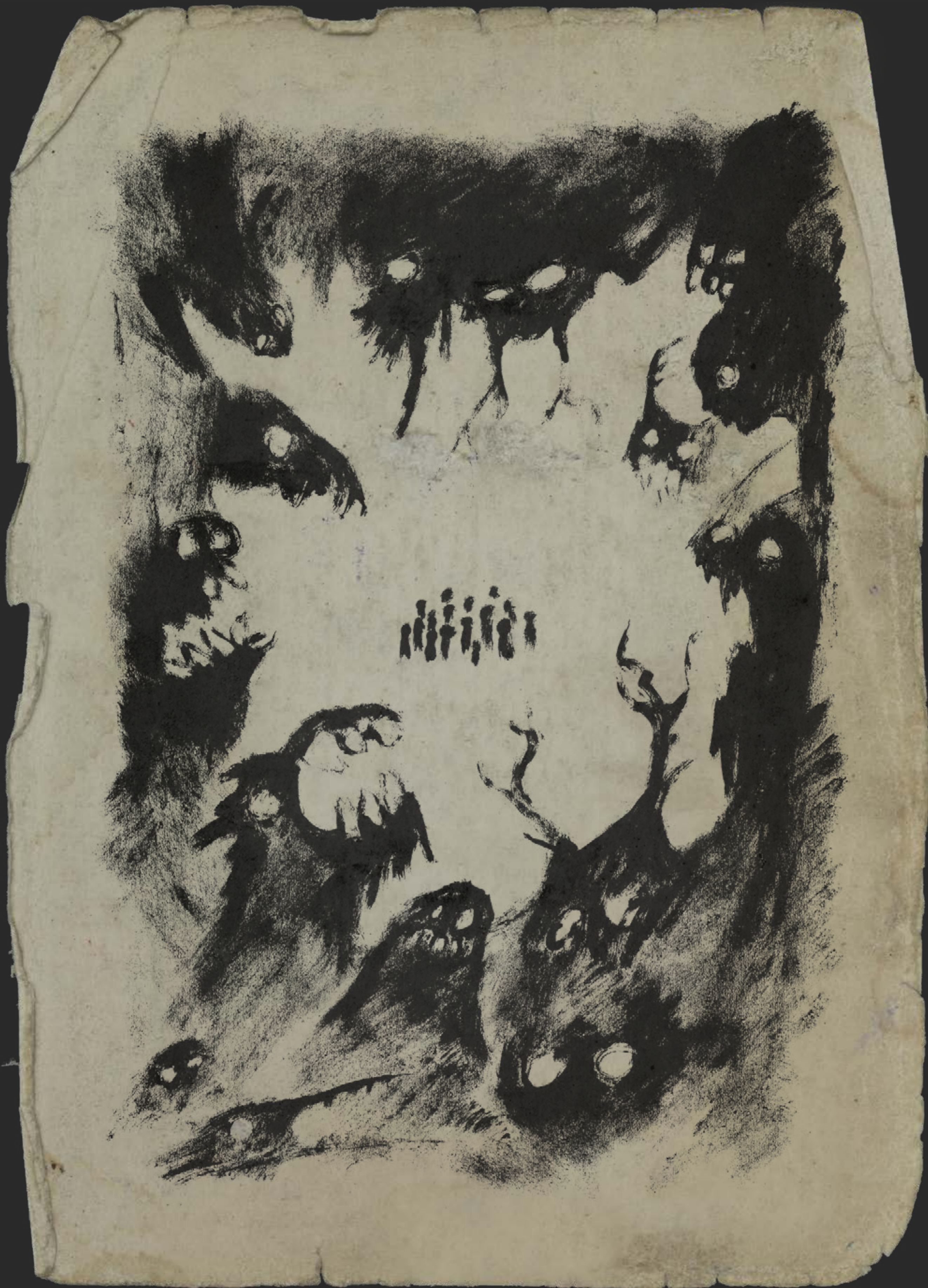


二十三 嘆きのモコツ

モコツはヴェレスを憐れんだ。彼は孤独で、陰鬱としていたからである。モコツの眼には、ヴェレスが光を、温もりを、愛を渴望しているように見えた。ヴェレスがそれらを受けるとは、かなわぬ定めではあったのだが。モコツはヴェレスの情熱と強さを見た。その創造物の力強いことを見た。彼が地上に刻ったものたちを見た。そして、彼が自らの冥界を満たした奇跡の数々を見た。

しかし、モコツは恐れてもいた。ヴェレスのなかの妬みを、彼の野生の力を、そして満たされることを知らぬ欲望を。モコツが〈恐怖〉を、ヴェレスの陰気な性質が最も唾棄すべき形で結実したものたちを見ると、恐れはいやがうえにも増した。彼女は自らの身を、世界の行く末を棄じた。神なる慈悲の心により、モコツは世界と結びついていたからである。だが、いったい何ができようか。モコツは不浄なる魂たちを引き裂いてやりたかった。が、彼らを虚無に委ねることは、最も下劣なことであった。

〈恐怖〉らの内側で膨れあがっていた恐れは、彼らの責めに帰すものではなく、神の妬みと情熱より生まれたものだったからである。モコツは慈悲と思いやりにあふれ、忍耐強く、寛大であった。このようにして、これらの魂たちに彼女が与えようとしたのは、まったく別の運命であった。



二十四 偽りの約束

かくして、モコツはヴェレスのもとを訪れ、〈恐俘〉について彼を問いつめた。

モコツが求めたのは、ヴェレスが卑しき〈恐俘〉どもをなだめ、罪のない者どもを襲うのをやめ、自然を守る以外のすべてのおこないをやめることであつた。彼女はヴェレスにこう約束するよう迫つた。〈恐俘〉のいずれかが仕事を果たし、襲れることがあつたのならば、ヴェレスの力により、彼らを残忍きわまる奉仕から解放し、すべての不浄を清めるようにと。また、ヴェレスが〈恐俘〉を自らの王国に引き取り、二度と纏れた殻を着せることのないようにと。

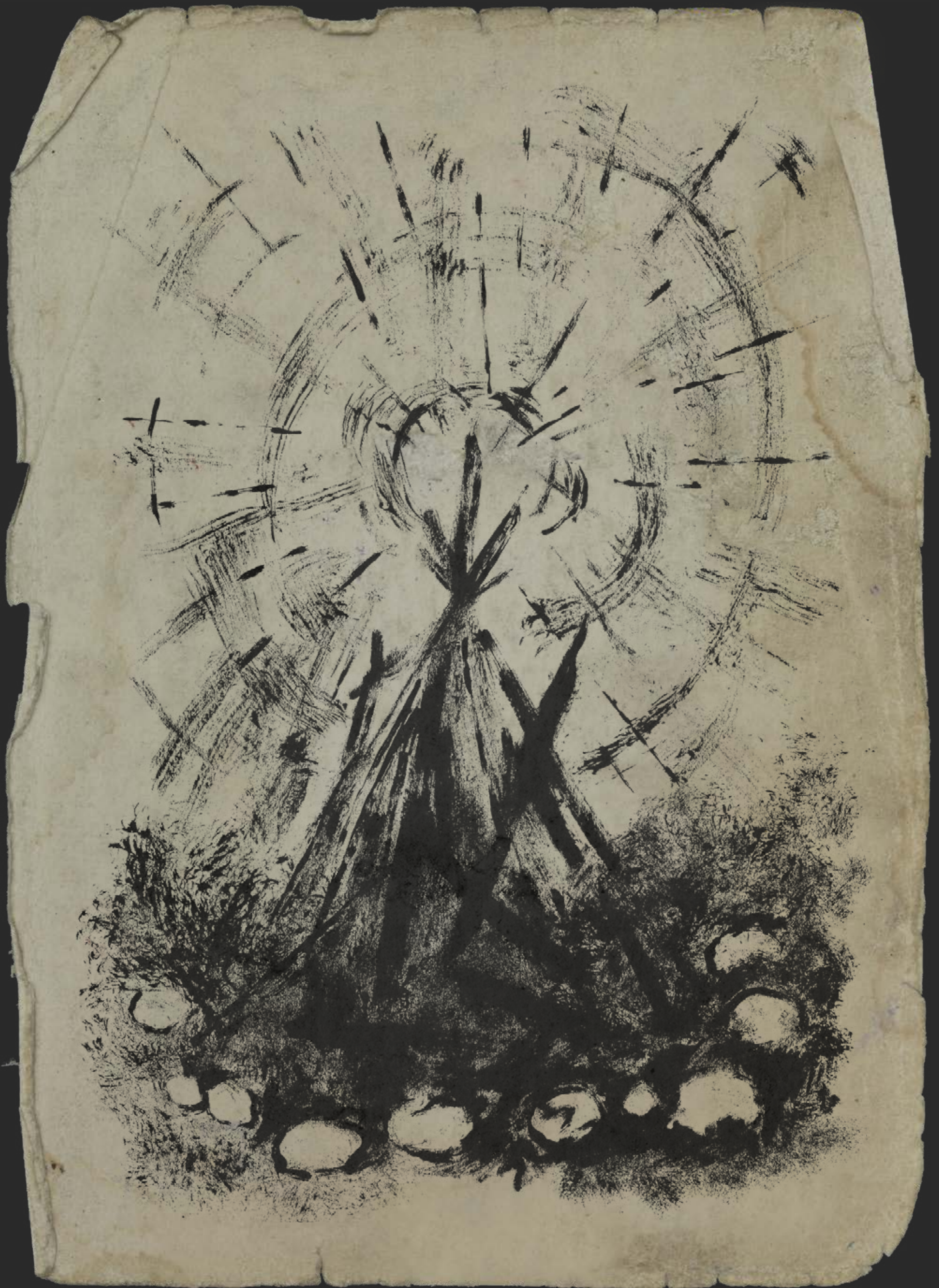
ヴェレスは首を縦に振り、モコツは安堵した。このとき彼は明かさなかつたが、〈恐俘〉に対する彼の力は弱く、この約束は大なる獣をつなぐ滑りやすい縄のごときのものであつた。〈恐俘〉はおもに大気と水でできており、土はわずかしか含まれなかつたからである。ヴェレスが刻つた〈恐俘〉は、ヴェレスには抑えきれなくなつていた。これが〈凄惨の時代〉の眞実である。



二十五 恐れと無力

〈恐俵〉は最も恐るべき生き物であり、人間でも獣でもなかったが、その両者の性質を持つこともあった。大きいものもいれば、小さいものもいた。罪のごとき醜いものもいれば、最も深き願望のごとき魅力を持つものもあった。静かに産して人間を避けるものもあれば、狼のごとく、人間を仕留めるまで、どこまでもおいを追っていくものもあった。獲物をじっくりといたぶり、鴉のごとく、生きたままそれを引き裂くものもあった。

そのため、人間はいくつかの宗族が集団となり、農耕を営み、互いに眼を配らなければならなかった。不注意は過去のものとなり、それゆえ、誰かが恐怖のうちに暮らした。あらゆる者が己の今を知り、長老の声に耳を傾け、自らの覚悟を求めた。そうしなければ、彼らの誰ひとりとして、〈恐俵〉から生き延びられなかったからである。冷淡であることは戦士の名誉とされた。〈恐俵〉が狩りに来たとき、戦士たちは避けえぬ死を覚悟し、勇敢に戦ったからである。彼らは部族のほかの者たちを逃がすことにのみ専念したからである。

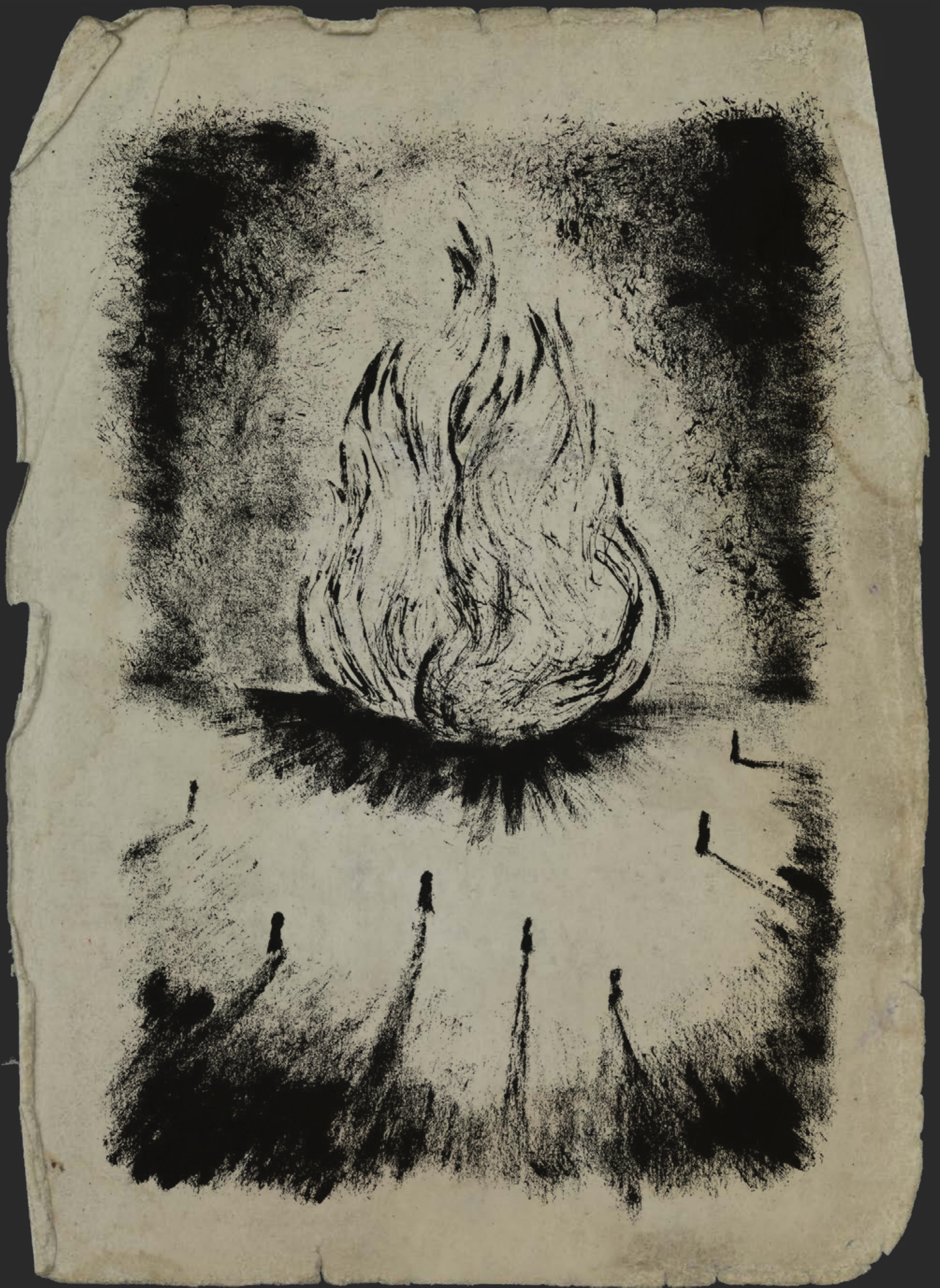


二十六 太陽の降臨

実に、〈凄惨の時代〉の始まりはむごたらしかった。人間は凋落し、〈恐怖〉の不浄の力に打たれ、臆病な獣物のごとくに追われ、狼の一群に遭遇した迷い子のごとく無力であった。

それは涙を誘う光景であった。人間の悲惨な没落と、それに続く〈恐怖〉の忌まわしい支配とを描いた、血も凍る陰図であった。ダボーは高みよりそのすべてを見ていた。天の守護神にして〈大恵を与える者〉、温かく、幸福なる接吻の化身のごとく輝く者、天の太陽のごとく強く、無敵なる者、それが彼であった。

このようにして、ダボーは大地に、人間たちのあいだに降り立ち、彼らを自分のまわりに集めた。ダボーは人間たちに向かって、木を集め、それを天に向かって積みあげ、石で囲むよう命じた。そうしなければならない理由は誰も理解できなかったが、彼らは自分たちの神の声に耳を傾けた。ダボーは偉大にして憐愍の神だったからである。



二十七 神の心

彼らは自分たちの光り輝く神を畏れと喜びの眼で見た。ダボーは美しく、あふれんばかりの力を持ち、森の黄金の木漏れ陽のようだったからである。だが、そのとき彼らはひとり残らず恐怖の叫び声をあげた。ダボーが燃える心臓の半分を自らの体内から引き抜き、眼のまえの藁の山の上に投げたからである。そのようにして、藁の山に火がつくと、ダボーはそれを焚き火と呼んだ。明るさと熱が始まり、すべての人間の心に力が注がれた。人間に火を与えたダボーを讃えよ!

人間たちは喜び、驚いたが、神の館り物は遊びのためのものでも、好奇の心を満たすためのものでもなかった。ダボーは人々を沼地に連れていき、湿った土を棒でつついた。やがて柔らかな肉の下に、骨のごとく硬いものが見つかった。ダボーは人々にその〈大地の骨〉を火中に投じるよう命じ、それが〈恐怖〉に耐える武器になるであろうと言った。土よりはがされ、炎に鍛えられし武器になるであろうと。



二十八 地の骨

鉄は〈大地の骨〉であり、我々はそれを柔らかな沼地より引きはがした。沼地は大地という皮膚の下の脂のごとく豊穡であった。

だが、大地は自らの骨をやすやすと手放さなかった。沼地に足を踏み入れる者よ、用心せよ。すでに多くの者が沼に吞まれ、多くの者がその瘴気で理性を失ったからである。

しかしながら、沼地を自らの王国と呼ぶ生き物がひとつだけあった。それは〈たばかる者〉と呼ばれ、なかにはそれを神と崇める者たちもいた。〈恐怖〉と呼ぶ者たちもいた。そのいずれがまことなのかを知る者はなかったが、鉄を求める者はこれを警戒すべきであった。

それは角を持つ巨大な甲虫のごとくであり、鬼火のごとく沼地の上を漂っていると言う者もあった。棒げものをすれば、それは汝を鉄の溜まりに導き、糞を損ねることをすれば、それは汝を灰と死に導くであろう。

この生において、何ごとも代償なしには得られぬからである。

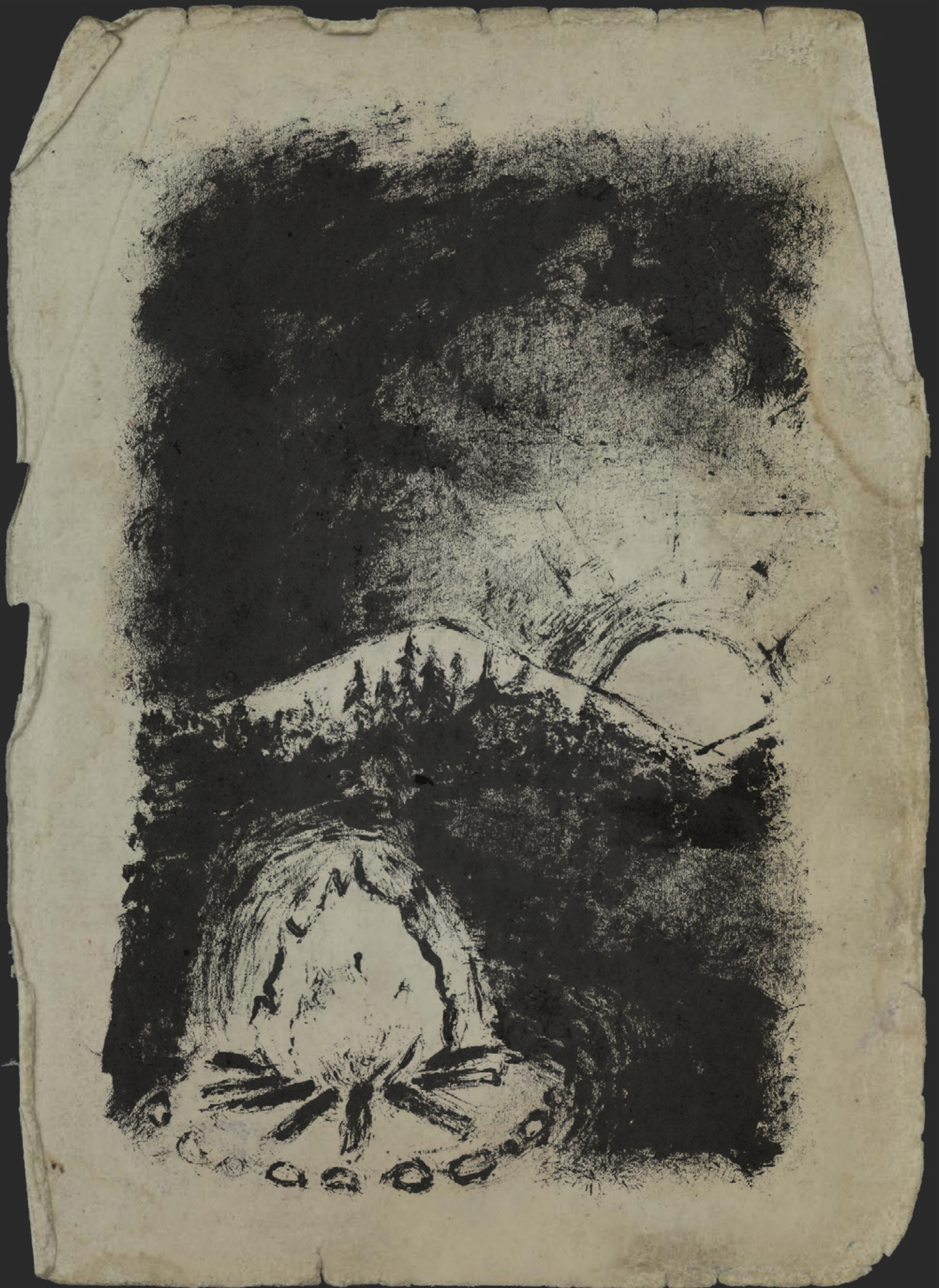


二十九 神の刃

その骨を集めたら、泥と草とで漏斗をつくるべし。それが乾いたら、木から燻した火と、集めた〈大地の骨〉をそのなかで燃やすべし。〈骨〉に火がつけば、あらゆる穢れが燃え、最も貴重な核のみが残る。そうなれば、鉢に入れ、熱き血となるまで溶かす。その血を、あらかじめつくっておいた土の型に注ぐ。〈骨〉が冷たくなったら型を打ち壊す。そうしてできたものを釜のなかで打ち、刃となす。

人々はかつてこう言った。もしも刃が〈恐儂〉に効あるだけでなく、それを拵つ腕にとってもよいものであるならば、戦士は森に入り、クドラクを呼び寄せらるべし、と。もしクドラクが戦士を気に入れば、それは狼の、熊の、あるいは野牛の皮をかぶって姿を現わし、戦士を試すであろう。その者がこの獣を打ち倒せば、それは神の袂の印である。だが、もしクドラクが姿を現わさず、あるいはこの者を打ち砕けば、その刃はより強き戦士に与えられるべし、と。

かつてはそのようであった。だが、今はしたたかな〈恐儂〉のみが残り、戦士のまったき一団をもってしても、打ち倒すことはきわめて困難である。それでも、クドラクの祝福を得るに越したことはない。



三十 闇の始まり

ダボ—を讃えよ!

人間への彼の献身は遠方もないものであった。〈地上の火〉を離れると、彼は天に戻り、太陽として人間の道を照らした。が、なんということか、その力はもはや半分以上が残されていなかった。

爾来、自らの光で世界を満たしていた太陽は、力を取り戻すために休み、眠らなければならなくなった。太陽が自らの仕事に疲れて沈むと、暗闇がそれにとって代わり、そのようにして夜が始まった。夜はきわめて穏々しく、曇りで、人間の脅威となった。夜のあいだ、人間たちを見守る守護神はいないからである。

そして火だけが、神の駒より引きはがされ、薪と脂を与えられた火だけが、人間のために暗闇を照らし、かくして夜の恐ろしさを教えた。そのため、人間は昼間に太陽を崇め、そのようにして、火をも讃えるようになった。火は力強く、善で、熱く、我を忘れさせたからである。

ダボ—を讃えよ! 彼の心臓を讃えよ!



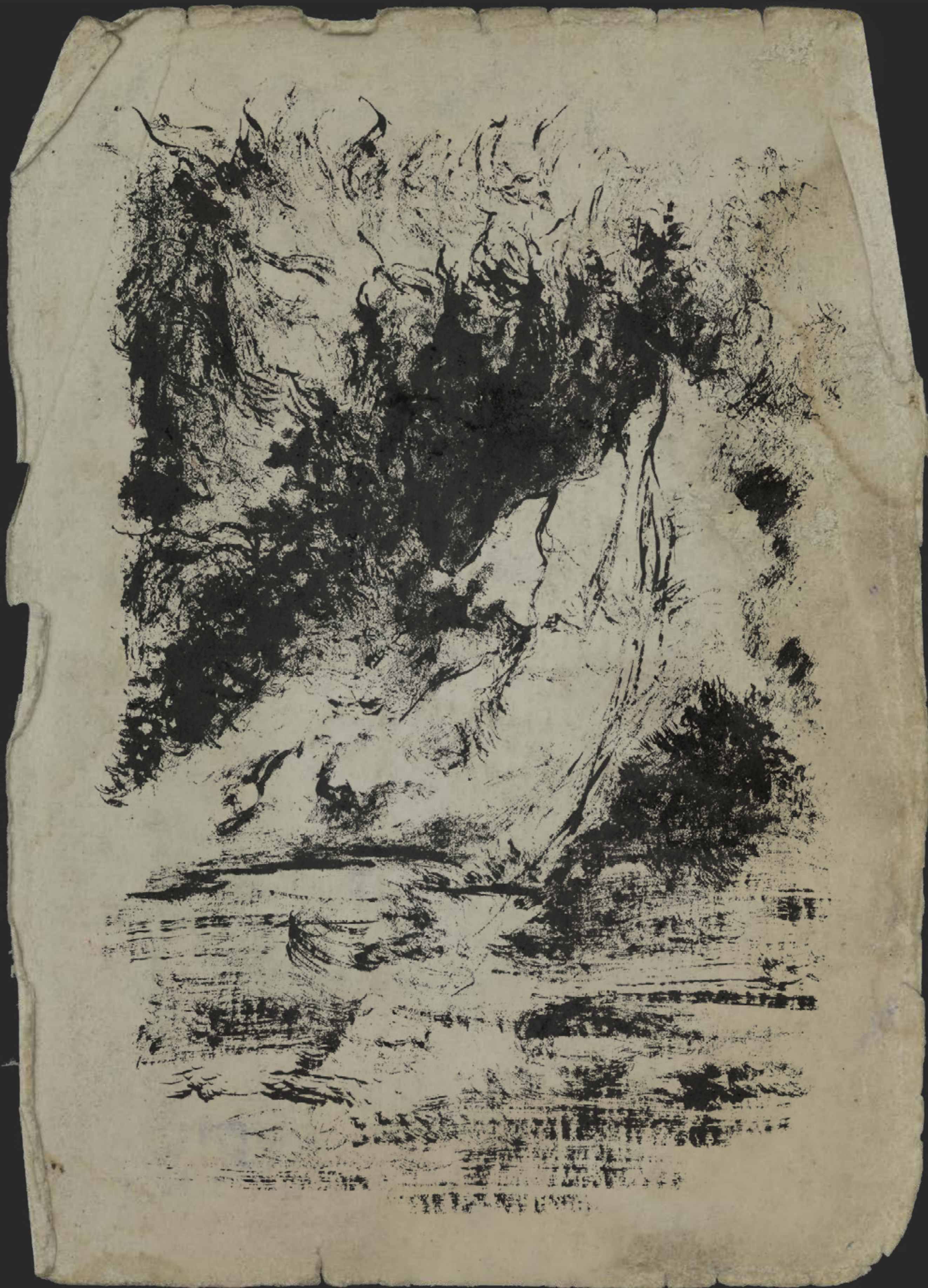
三十一 気まぐれな火

火は神の心臓にして、勇敢で強く、善にして移り気、破壊の力と等しく創造の力を指つ。それゆえ、〈恐俤〉たちは火を好まなかつた。火は彼らの瘴気よりも強かつたからである。

だが、火は美しく、善でこそあれ、まったきものではなかつた。それは神の心臓の半分より生まれたものであつて、ひとつの心臓すべてより生まれたものではなかつたからである。

火には食べるものが必要であり、慎重に食事を与えてやらなければならなかつた。火を〈恐俤〉に向かつて投げつければ、その瘴気だけでなく、土地そのものをも焼き尽くしてしまうかもしれないからである。そうなれば、集落は破壊され、遠き地の狩りの獲物をも怯えさせ、作物はただの灰と化してしまう。火に食事を与えすぎれば、それは大きく、大きく育ち、その飢えもまたいや増すからである。

この神の館り物は聡く使い、敬をかかぬようにせねばならない。火のいるべきところはかがり火の上、焚き火のなか。繩れを寄せつけぬために、また、夕暮れの道を照らすために用いなければならぬ。勇気を持たぬ者は火を大きく育てる代わりに、自らを悪災後より守り、災いを遠ざけてくれるよう、リーホに慈悲を乞わねばならない。

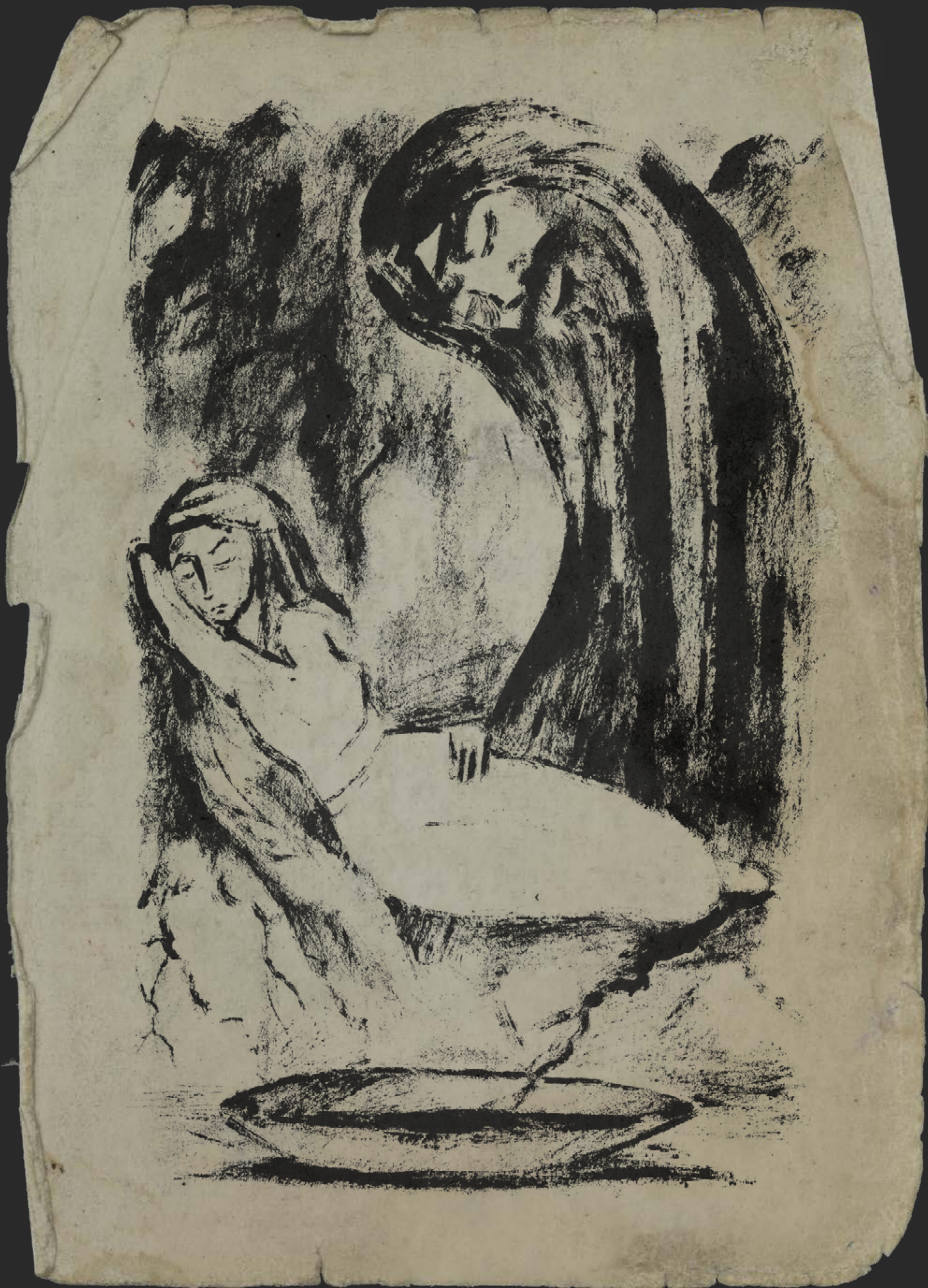


三十二 大火

火は薪と脂を食し、大地とヴェレスのカより生まれしあらゆるものを食す。ヴェレスの創造物にとって、なんと恐ろしい敵であろうか。火の恵みの大にして善なること。ダボーを讃えよ!

ひとたび火の勢がきらめけば、植物はこうべを毛れ、狩りの獲物たちは逃げだした。火はすべてを呑み、あとに灰だけを残し、ヴェレスの魔術を砕くからである。人間たちは大地の鉄より取り出した〈骨〉を鉄と呼び、神なる鍛冶師ダボーに教わったとおりに、燃えたつ抱擁のなかにそれを投じた。それらを使い、男たちは動物たちを恐れさせる矢尻をつくり、女たちはダボーを讃えて自らの体を鉄で飾った。

ヴェレスは冥界のねぐらからすべてを見ていた。そして、はじめのうちは火とその猛威を恐れた。だが、ヴェレスは狡猾にして残忍な神であり、絶れるものすべてを穢し、腐敗させる。彼のささやきに耳を傾ける者に笑いあれ! 彼のまえに立ちはだかる者に笑いあれ!



三十三 陰謀

ヴェレスは長いあいだ火を見つめ、いかにしてこれに立ち向かい、自らの創造物を火の手から守るべきか思索した。あらゆる動物、植物は今やたいまつを携えた人間たちを歓迎し、〈恐俵〉さえも火を見ただけで怯え、ダボ一の心臓と戦うことを嫌ったからである。また、鉄の爪をかまえた人間たちはもはや警備な獣物ではなくなっていた。このようにして、多くの〈恐俵〉たちが狩りへの渴望を満たせずにはいた。

だが、火に征服できぬものがふたつあった。岩と川、すなわち大地の心臓と水の血である。そのようにして、ある夜、モコツが疲れ果て、すやすやと眠っているあいだに、ヴェレスは暗闇の覆いのなかを忍び寄り、彼女の肉体からゆっくりと流れ出ている血を盗んだ。これは命の流れが絶えぬよう、あらゆる女の体から流れ出ているのである。



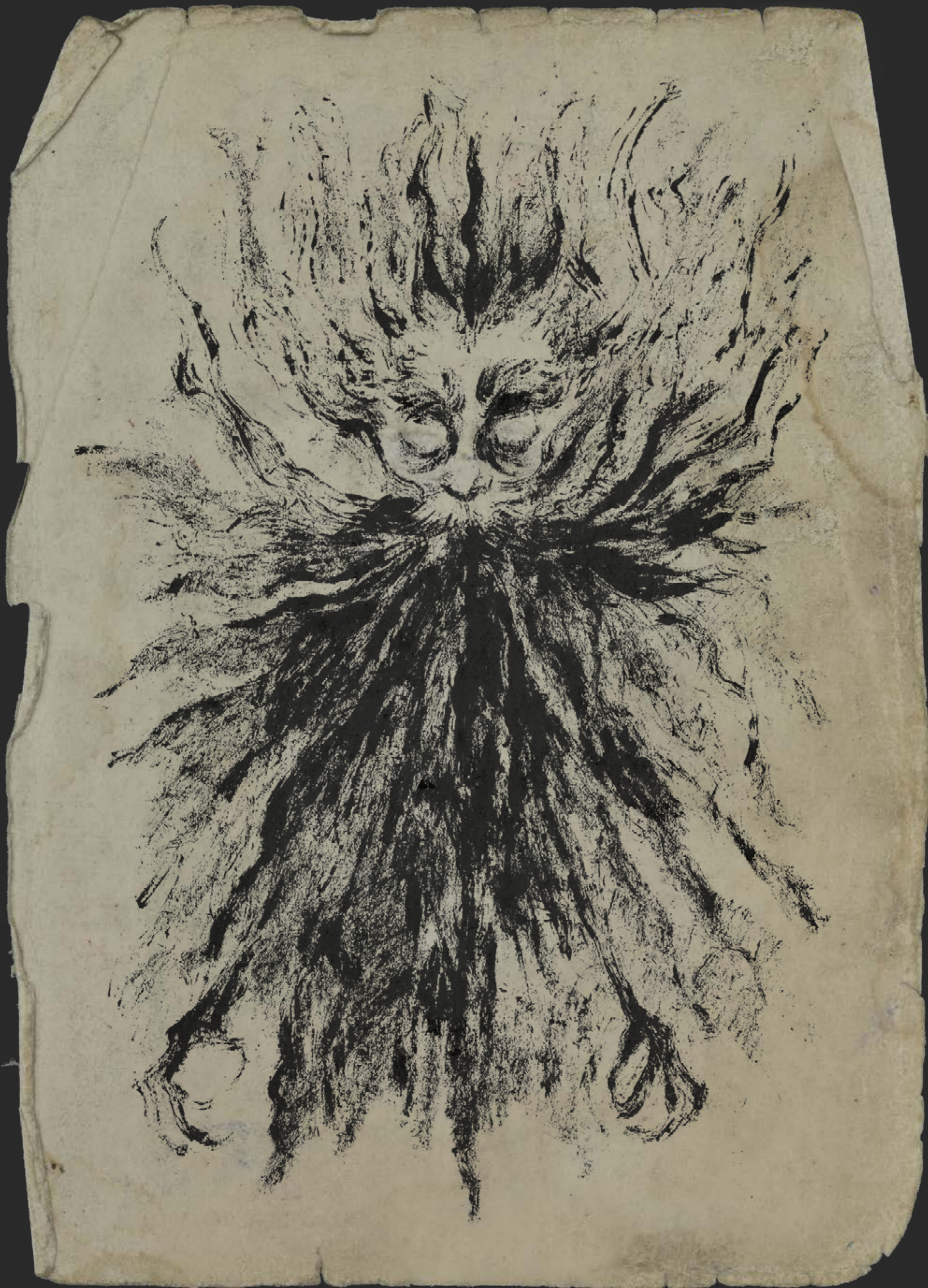
三十四 冥界の君主

ヴェレスがひそかに魔力を与えると、モコツの血はちらちらと光った。彼のカは天から盗んだものであり、〈始まり〉より昔、それは水とひとつだったからである。

ヴェレスは水晶のごとく澄んだモコツの血を取り、これまでに彼が剝ったなかで最もまったき、最も恐ろしき形のがなかへと注いだ。しかし、彼は大気のカでそれに命を与えたくなかった。天の吐息は火の滋養となり、火を育ててしまうからである。そのため、ヴェレスは別のカを求めた。

ダボーが人間たちを救うために自らの火の心臓を半分に裂いたごとく、ヴェレスはすべての人間の死を願ひ、自らの一部を裂いた。それはこの世界のいかなるものより硬く、暗く、最も邪な考えと最も重き情熱によって剝られたもの、すなわち岩であった。

岩はヴェレスがきわめて多形なる創造物を生むためのカと意志の源であった。ヴェレスは火を笑うこの者にズメイと名づけた。これは蛇と〈恐怖〉の君主にして、人間の敵であった。

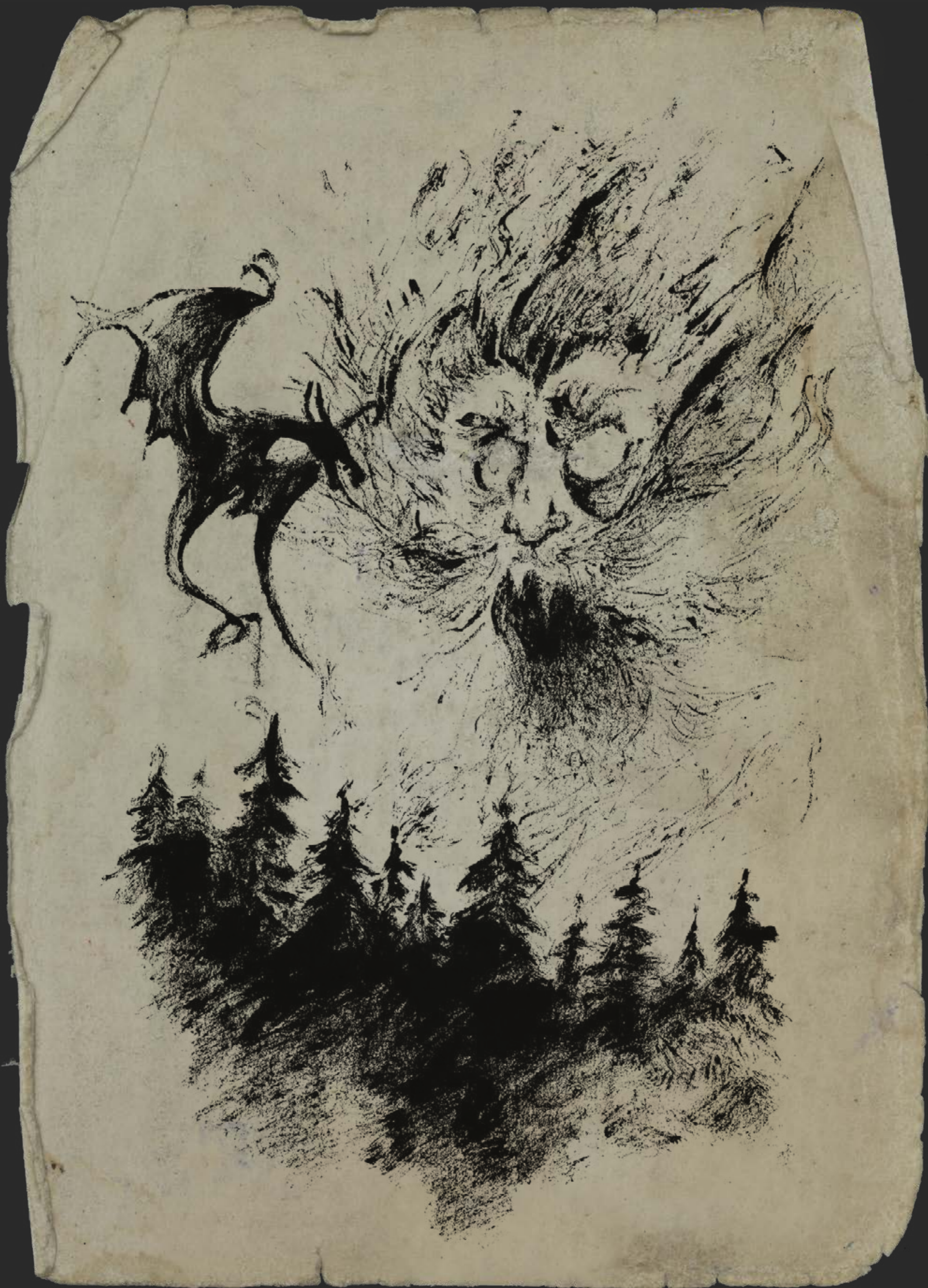


三十五 誘う火

ズメイを眼にした者は石のごとく硬直し、恐怖のあまり魂を失った。人間は火を放ち、火の籐でズメイを取り囲んだ。が、火の香がズメイの鱗を撥てようとも、それは空気に終わった。ヴェレスの将、〈蛇の君主〉が尾をひと振りすると、それだけでたいまつが火がかき消えた。さながら秋の紅き葉が風に散るがごとくに。

火の敗北のいかに大きなことか。その恥辱と怒りたるや！ ヴェレスは火の欲望と情熱を見た。彼はそのいずれをも知っており、それらをいかに育てるかを知っていたからである。そこで、ヴェレスは火のもとを訪れ、その耳にささやいた。力の味を、勝利のにおいを。そして、恐怖と崇拜の甘美なる旋律を。火は耳を傾け、興奮にその身を赤くすると、熱で身を熱くした。さながらめんどりが卵のなかの子を温めるがごとくに。

だが、卵の上に産しているのはめんどりではなく、〈冥界の王〉、〈ズメイの父〉であった。そのため、卵の殻が割れると、粗気と争いの神が生まれた。彼の名はスヴァログといった。



三十六 穉れた火

〈凄惨の時代〉のいかに恐ろしきことか。それは血と狂気の時代、大火と暗闇の時代であった。今や福々しきは、そして忌まわしきは、蛇たちが群れをなす道、心を恐怖で満たす彼らの君主の邪な影であった。

ただひとつの望みはダボーのうちにあった。はるかな高みで輝き、安全な道を示す太陽のうちに。影はそこより走り、夜の訪れを待っていたからである。

狂気のうちにスヴァログに与し、火に身を投じ、スヴァログを崇拜する者もあった。その者たちに不運あれ。彼らはヴェレスの魔力に穉され、その言いなりとなった。ヴェレスの薪と脂を食さぬのであれば、火は何を食らうのか？ 善良なるダボーの過ちのいかに大なることか！ 彼が自らの心臓から削った武器は、今や御しがたく、自らの力を味わうようになっていた。スヴァログがいかにヴェレスに抗えるというのか。自らを善い、大きくしてくれる者に。スヴァログがいかに我らをズメイから守るというのか。ズメイは蛇がめんどりの子の首を絞めるがごとく、火の首を絞めているというのに。

火のまえに穉を屈し、その傷りの昭かりに眼をくらませた者に
笑いあれ！



三十七 燃える行列

不謙実なるはヴェレスとそれを信奉する〈不憚者〉たちなり。

火はヴェレスの約束の誘惑に抗えず、その脅しに屈した。欲深く、武勇なき者たちは灼熱の行列に加わった。燃える神の名のもとに、自らに烙印を押す者を正気と呼びうるであろうか？ ほかの部族を襲う者どもを、武勇ありと叫ぶであろうか？

熱が彼らを狂わせたが、その者たちは憐れむに値しない。彼らの神、スヴァログはヴェレスのさきやきに耳を傾けると、火と大地のまえに膝を屈しない者たちを、ただ〈恐怖〉とズメイから身を守ろうとしていただけの者たちを討つことを誓った。

そのため、〈まことの神々〉を崇める者たちはあらゆる悪にとって敵となり、正しき男たちの心は狂気に毒された。

彼らはこのように叫んだ。

我らに笑いあれ、我らに笑いあれ！ 生贄を食らい、炎が育つ！ 我らもまた、贄を捧げ、我らの神々の飢えを満たさねばならぬ！ 供物だ！ 供物だ！ 絞め殺せ、吐息をプラボーに返さんがために！ 水に溺れさせろ、モコツが力を取り戻せるように！ 拳で打て、ペルソの名のもとに！ 血を吐かせろ、自らの心臓を引き裂いたダボーのために！



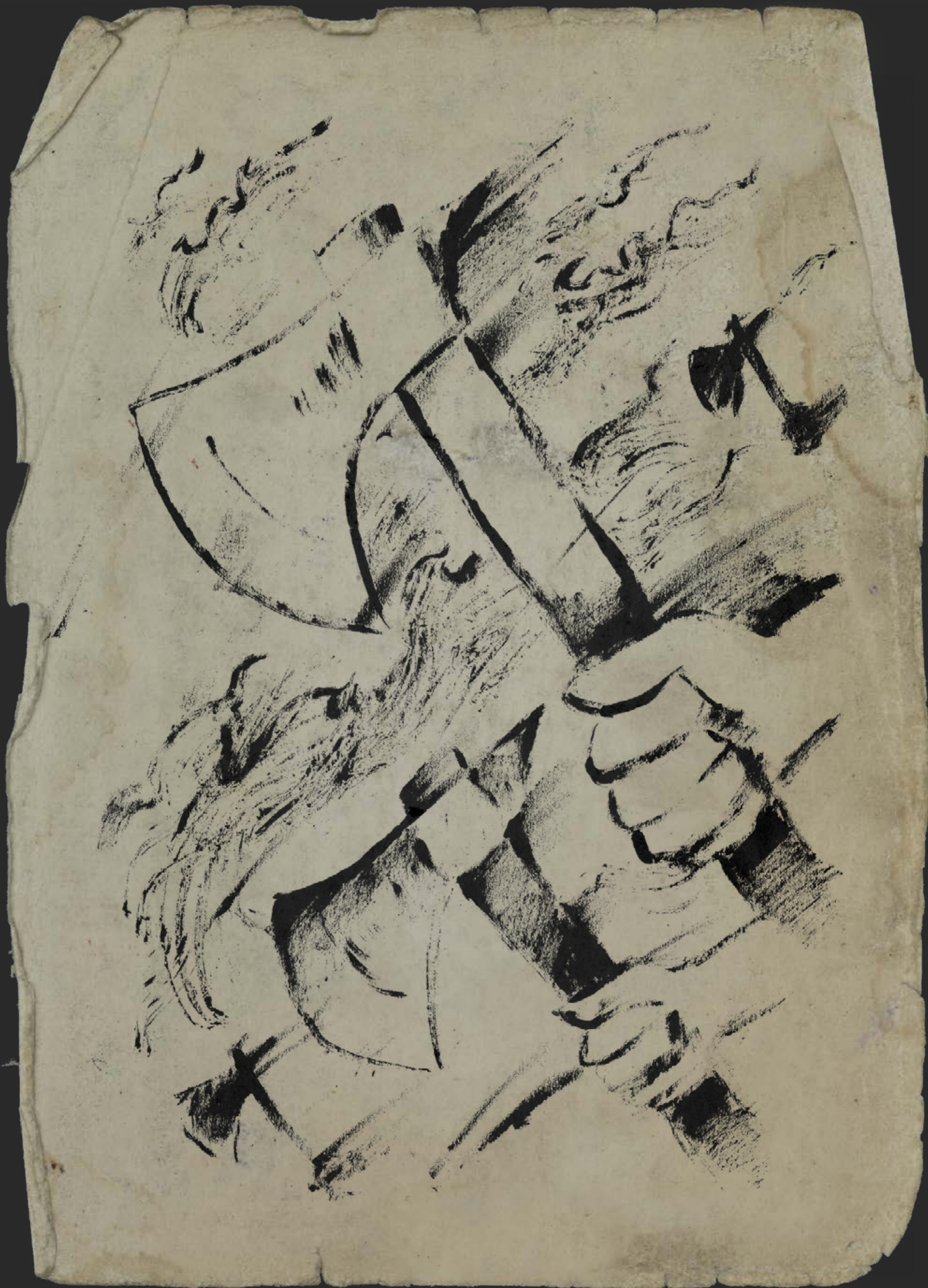
三十八 スヴァログの 冒険

見よ、炎の神官を崇拝する者どもの言葉によりて、彼らの狂気を語らせよ。これらは我、ガ＝アルが彼らのゴードのそばにひそかに近寄った際、耳にした言葉である。

かの者はかく語った。

神々とは何か？ 男とは何か？ 一方は世界の創造者にして、また一方は… その従順な群れに過ぎぬ！ 男たちが動物たちにとって神であるように、人間も神々の従順な群れに過ぎぬのか？ 神々は自らを益するために男たちを飼い、生と死を司っているのではないか。しかし、男たちは動物たちよりも強い。男たちは神々と取引するすべを心得ており、神々を出し抜き、恐れさせる。見よ、かの男は火を支配し、石から火を煉し、それを水で煮たではないか。火を神となし、人間を飼い慣らす神々に抗う武器となし、獲物、植物、湧き水を与える者の群れに加えたのは男たちではないか。それが男！ 燃えさかるたいまつを手に、火で新たな道を開き、敵を呑み尽くす！

男を讃えよ！ 火を讃えよ！



三十九 火が食らうもの

恐るべきはスヴァログの神官の言葉である。私が彼の敬虔なる信者のふりをして聆れ込み、語を聞いていると、その者の憎しみが私を恐怖で満たした。彼はこう言ったのだ。

ほかの部族どもは恐怖に満ちあふれている！ やつらは自らを狩る者にこうべを垂れる穀物のごとく、〈旧き神々〉に、プラボーにこうべを垂れている。プラボーは火のごとく眼に見えず、この世界を見捨てたというのに。そして、やつらはダボーにこうべを垂れている。ダボーは夜のなかに姿を消し、祈りの言葉は沈黙したというのに。そして、やつらはヴェレスにこうべを垂れている。ヴェレスは横臥し、魂を貪ることを待ちわびているというのに。

各なきは火を育み、それに加わる者たちだけである！ ここにいるのは自らの定めを自ら選び取る战士们、征服者たち、支配者たち。〈新しき神〉、火は我らのものなり。彼は熱く、寛大である！ 彼は我らに焚き火を与え、そのため我らは飢えを知らぬ！ 彼らは我らに粘土壺を与え、そのため我らは財を集める！ 彼は我らにとこしえの光を与え、そのため夜は我らを打ち倒せぬ！

臙瘡者どもには、獸のごとく森のなかで狩りをさせておけ。
臙瘡者どもには、山羊のごとく草を食ませておけ。臙瘡者どもに
は、その子供らを豚と同衾させておけ。我らはやつらを支配し、
やつらが育てたもの、つくったもので生きてゆく。やつらは我ら
のためにゴードを建て、やつらの女どもは我らの子を宿す。



四十 怖ろしきものども

火の襖を受けた者の、なんという侮蔑！ その者の語りは筆舌に尽くしがたく、彼の言葉をいかに思うか、それは汝が決めることである。

彼らのごとき臆病きわまる者たちは、みなヴェレスを崇める者たちである。彼らは絶えざる恐れの中に生き、やがて正気を失うからである。彼らのなかには冥界の王の予興を買うことを恐れ、朽れた杖で小屋を造ることすらできず、地面に落ちたものしか食べようとせぬ者もいる。ヴェレスの手先どものごとく墮落せずすみよう、多くを語ろうとせぬ者たちもいる。彼らは同じ理由から、生皮しか着ようとしないのである。

狂気のうちにある彼らは我らを狂人と呼び、そればかりか、〈恐怖〉と姦淫する。それゆえ、彼らの女たちは贅として捧げられ、子を宿して帰ってくる。そのようにして、女たちは〈魔物〉と呼ばれる不浄な混血を生むのである。

〈魔物〉は唾棄すべきものであり、蓋体もないが、スヴァログは彼らを殺さないでヴェレスに誓った。

嗚呼、ヴェレスはプラボの創造物を穢すことで、いかな喜びを覚えたであろうか！ だが、プラボは我らに近づこうとしない。スヴァログを生み出した火を、我らが携えているからである。



四十一 夜の王

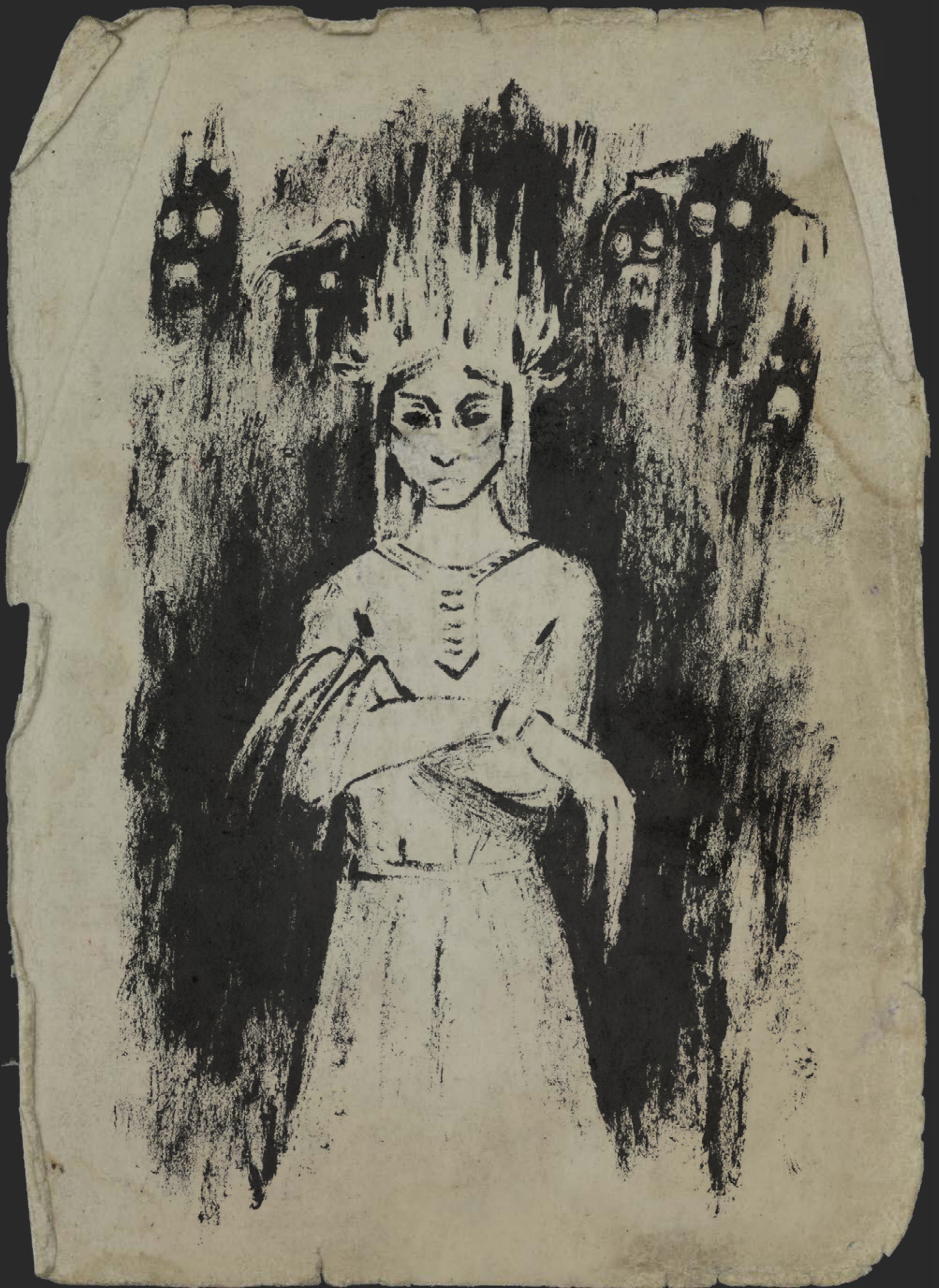
私は蔭に覆われた仔牛のように潜み、語を聞いていた。まわりの狼たちはそのにおいを嗅ぎつけた。私の恐怖は増すばかりだった。神官の言葉には、いかなる慈悲もなかったからである。

人々はありとあらゆるものを恐れる。彼らはヴェレスを恐れる。〈恐俵〉を恐れる。〈魔物〉を恐れる。暗闇を恐れる。それだけではない。彼らは空腹を、寒さを、死を恐れる！ 自らの影すら恐れる者もいる！

我々が火を信奉するがゆえ、そして墮落した部族を恐れるがゆえにスヴァログが存在しうるごとく、夜の王が生まれ落ちた。〈魔物のさきやき手〉にして〈恐俵の将〉、かの者の名はホルス！ ホルス、汝らの胸より絞り出された、かすれた吐息のごとき者！

ホルスは若く、残忍で、そのはらからたちと同じく、人間を憎む。太陽が高い昼間は姿を隠しているが、夜の時間、暗闇が訪れると、その残虐ぶりを遺憾なく発揮し、気の向くままに支配する。

彼の行く手をふさぐ者は、生きてふたたび曙光を見ぬであらう。



四十二　〈恐俘〉 のささやき

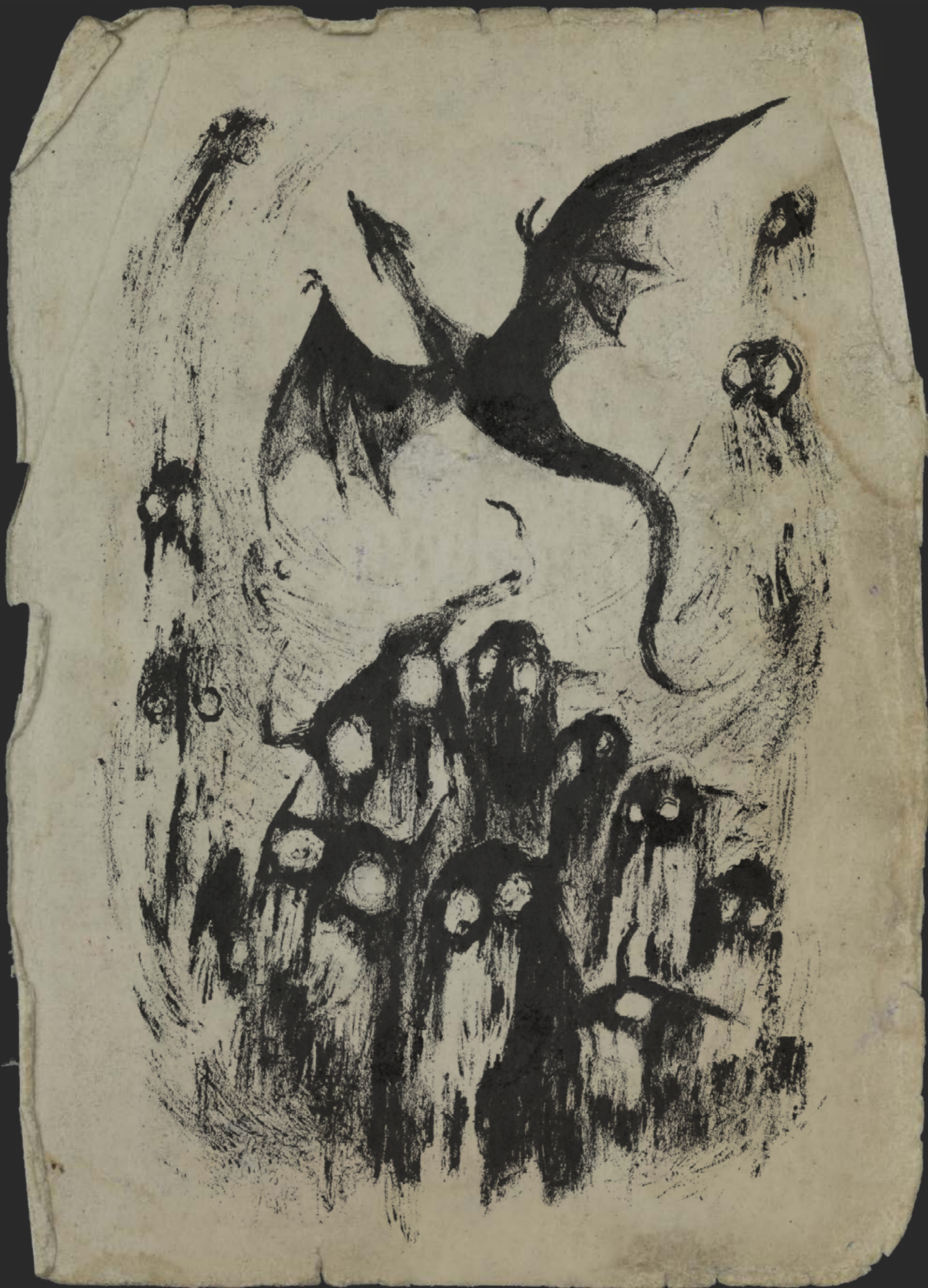
そうした日々、私は抜け目ないハヤブサの翼の下で葦むらを徘徊する野ネズミのごとくであった。そして、スヴァログの信者たちの燃えるような凝視から逃れる日がやってきた。道を引き返している、あの神官の言葉がこだまとなって私の心に戻ってきた。

牛飼い部族の神どもの弱きこと！ それを崇める者どもの弱きこと！ 彼らの恐れは信仰より強く、彼らの嘆きの声は祈りの声よりも大なり。そうして、彼らの恐れと嘆きより、ホルスが生まれた。

太陽が地の下に落ちるとき、ホルスは最後の一条の光を盗み、そこから自らの王冠を編む。彼はその輝きをもって夜の生き物たちを呼び集める。そのなかには〈恐俘〉も〈魔物〉もいる。ホルスはその者たちを導き、男たちにけしかける。最も甘き甘露を与えるがごとく、恐怖を食らわせるために。

美しきはホルス、恐ろしきはホルス。死のごとく青をく、夜のごとく残忍。月に満月と新月があるごとく、彼はふたつの顔を持つ。そして、偉大なるは彼の魅力。魂は蛾のごとくホルスに引き寄せられ、凋落へと導かれる。彼の輝きに欺かるるなかれ！

ホルスはかくのごとき神なり。人間の恐れより生まれ、〈魔物〉と交わる者！



四十三 〈恐俘〉の乳

ドルヤの名において、私はこの〈年代記〉の続きを書こう。偉大にして名誉あるガ＝アルが私の以前にそうしたように。

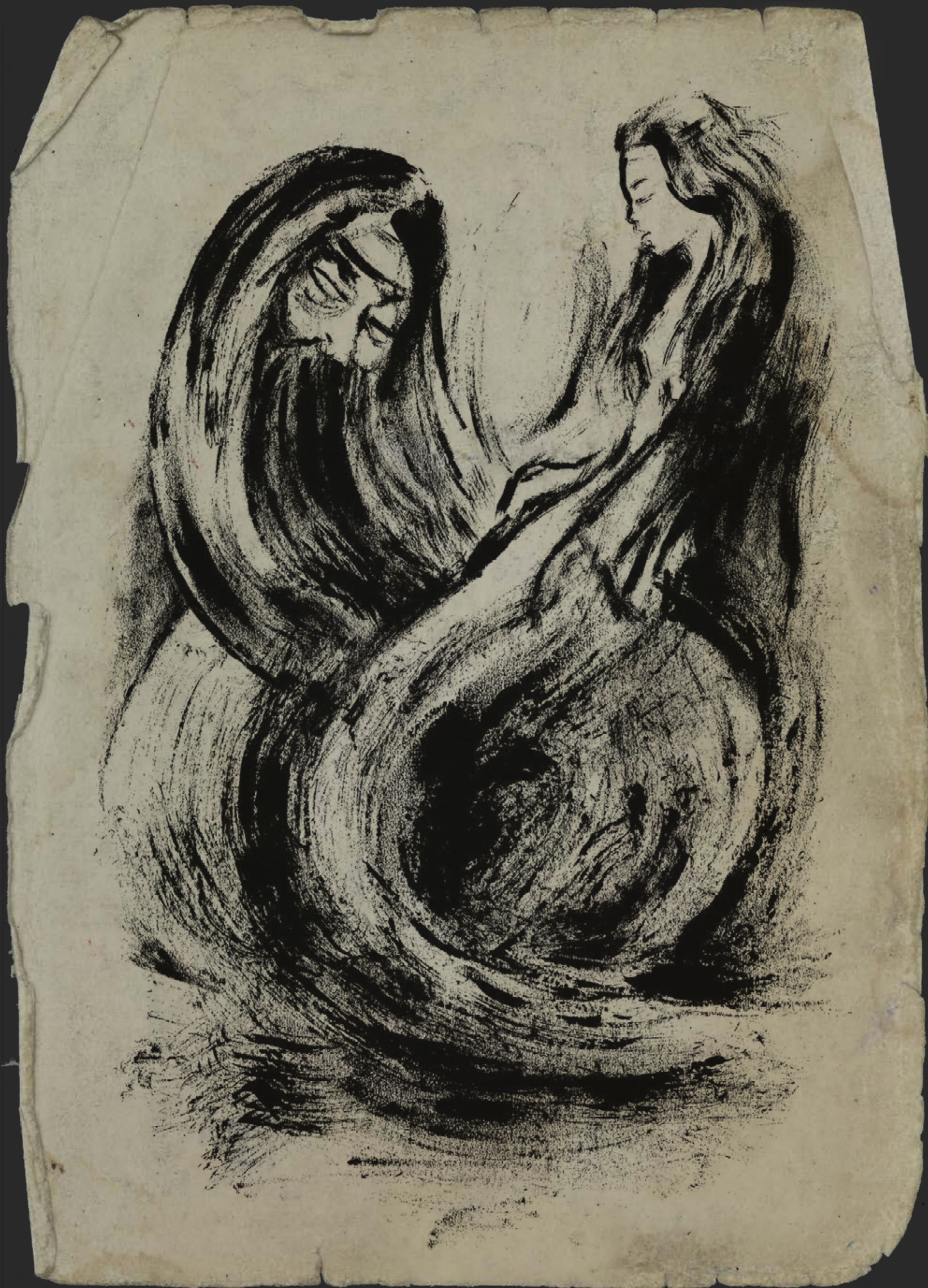
ドルヤを讃えよ！ その誕生により〈凄惨の時代〉に終止符を打ち、〈希望の時代〉の始まりを告げた者を讃えよ！

ドルヤの誕生に先立つ日々はまことに残酷であった。ホルスが率いる〈恐俘〉と〈魔物〉どもが人間の集落を襲い、それにより、ヴェレスがモコツと交わした約束は破られた。ヴェレスは自らの創った生き物たちに対する支配を失い、彼らは今やホルスを王とみなしていた。

しかし、ホルスは話し合いができる相手ではなかった。脅しの言葉に屈したり、嘆願の言葉に耳を貸したりする者ではなかったからである。男たちのいかなる武器もホルスや〈恐俘〉を止めることはできなかった。だが、最も大きな混乱は、〈蛇の君主〉ズメイがあらんかぎりの侮蔑でヴェレスを拒んだことにより、もたらされた。

あらゆる契りが破られた。火の信者たちも、スヴァログでさえも、ホルスの盲目の怒りのまえには安泰でいられなかった。

大地は血で赤く染まり、その上に矢の雨が降り注いだ。誰もが自分たちのほらからのことしか考えられなくなり、虐殺を食い止めようとした。腐った花のごとくにしておれながら、人間は自らの存亡をかけて戦い、その頭上にホルスの足が静止していた。その足は振りおろされ、人々を灰に返す、その時様を待つばかりであった。



四十四 モコツの犠牲

モコツは絶望していた。プラボーの似姿である男たちが、そして彼女自身の似姿である女たちが、ばらばらに裂かれていた。それについて、モコツにできることは何もなかった。つまりところ、彼女は冥界に囚われていたのである。

ヴェレスも答しんでいた。〈恐怖〉とズメイに裏切られたからである。妬みと願より生まれた者は飼い慣らすことができず、そのような者たちは自らの欲望にのみ従う。

それがヴェレスの学んだ教訓であった。それも、教え切れぬほどの人間の命を犠牲にして。

モコツはヴェレスの力が衰えるのを見た。が、彼女にその理由はわからなかった。ヴェレスが自らの心臓を引き裂いたことを知らなかったからである。が、そのためにヴェレスは衰えつつあった。彼女はヴェレスを憐れみ、また、多くの餓り物に感謝していたが、愛してはいなかった。彼女はかつてプラボーを愛していたからである。にもかかわらず、モコツは心を決めた。ヴェレスは愛への渴望より生まれた者であるから、その欲望を満たせば、もしかしたら力を取り戻してくれるかもしれない。そう考えたのである。

そこで、彼女はヴェレスとともに伏し、自らを与えた。猛る鼠の泣ぐ水をことごとく呑み干す砂漠のごとく、ヴェレスはモコツを呑み干した。



四十五 女神の誕生

モコツは子を宿した。生命の女神の胎内で新たな生命が育まれていた。すなわち、この子供の生命は倍の強さを持つということである。

まさに奇跡であった！ 未来は見通せぬ霧に澄まれ、神々でさえ予見できなかつた。

四十九の昼と四十九の夜ののち、夜明けと朝まだきの瀬戸際の刻、モコツは神々のまことの子を産んだ。万物より引き抜いたものでなく、神々がまことに身ごもつた、最初にして最後の女神である。

女神はモコツによく似ており、モコツのやさしき、誕めいたところを受け継いでいた。だが、同時にヴェレスの慈悲さ、力、冷静さも備えていた。

このようにしてドルヤが生まれた。美しき女神！ 希望をもたらす者！ ふたつの世界の支配者、地表と冥界の番人！ 我らが女神、〈ささやき手〉と〈均衡の守り人〉の母！

ドルヤを讃えよ！ 神々の娘を讃えよ！



四十六 調和を保つ者

ドルヤはモコツとヴェレスのあいだに生まれた。そのようにして、彼女は愛と知恵、思いやりと憐れみ、創造の力と願望に満ちていた。

彼女は自然を愛し、父が命を与えたあらゆるものどもを愛した。が、彼女は人間をも、とりわけ母の似姿として創られた女たちをも愛した。

ドルヤは嫉妬と好奇の眼で地表の領域を眺めた。そして、ヴェレスの眼がないときにはいつも、冥界のあちこちをさまよう人間たちの魂の声に耳を傾け、昔話を聞いた。

このようにして、彼女は〈恐怖〉と人々の敬愛の暗い過ちを知った。若きゆえの熱心さで、彼女はあらゆるものには均衡があり、生と死の法に敬意を払いさえすれば、混沌と無秩序は抑制できると考えた。



四十七 地上の呼び声

ドルヤの両の手はヴェレスの指を満たすのと同じ力を発していた。ヴェレスが十の力を発揮できたものについて、ドルヤは五の力を発揮できた。残る半分は母親の力を受け継いでいた。

そのようにして、ドルヤが生まれ持つ性愛は母親の性愛によく似ており、それが彼女を冥界の隧道の最深へへと導いた。木の根がドルヤの髪に絡みつき、砂が彼女の肩に落ちた。頭上の地面が獣たちの足音に合わせて震動した。彼女はそれまで、地表にこれほど近づいたことはなかった。

ドルヤが黒い、湿った土に両手を置くと、口から言葉が漏れはじめた。彼女は大地の円蒼に、すべてをつなぐ水に、涇のように絡まり合う根たちに語りかけた。

地面が崩れ、湿り気が引き、根が分かれた、地上への道が姿を現わした。

ドルヤは冥界から出ると、一度だけうしろを振り返り、来た道をふさいだ。そして、自らの力のひと房を取り、モコツとヴェレスの眼から見えなくなる外套を脱いだ。ふたりに邪魔されることのないように。



四十八 神の歩み

ドルヤは長く、遠く旅をし、行く先々で幸いをもたらした。

彼女は大小さまざまなおこないをし、多くの教えを施したからである。

ドルヤは生と死の法について語り、敬聖を禁じ、あらゆる創造物への敬意を求めた。土を耕し、作物を豊かに実らせ、しおれさせないすべを人々に教えた。また、皮を鞣にし、肉を食らうほかにも獣たちとうまくつき合うすべを教え、動物の世話をし、乳を搾り、羊毛を洗うすべを教えた。

彼女はまた説いた。赤子が女たちの子宮のなかに宿ることを、ふたつの性がそろってはじめて繁栄が可能になることを、それから、お互いを思いやり、健やかでいることの大切さを。

あらゆる部族のあらゆる人々が彼女の言葉に耳を傾け、首を縦に振り、熱のこもった声をあげた。そして、彼女が去ると、彼らは膝をつき、悲しみに暮れて土をかきむしった。だが、ドルヤの姿が見えなくなると、あらゆる困難が息を吹き返した。ドルヤの知恵から得たあふれんばかりの恵のせいで、争いはより善いものとなった。



四十九 腐敗

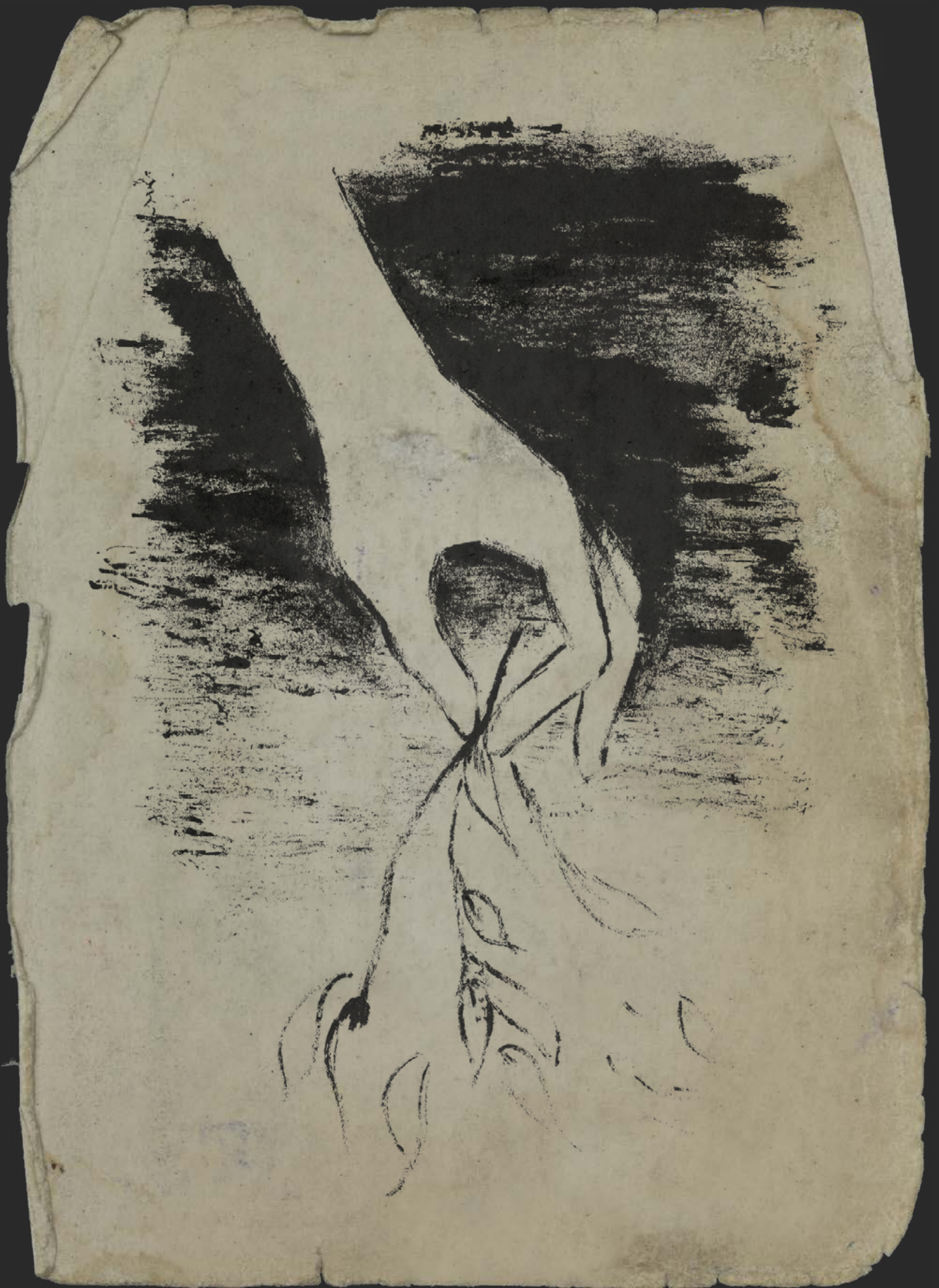
ドルヤは人間たちが語る物語を聞くことを楽しんだ。彼らがいかに世界を見ているかを理解できるようになったからである。彼女が最も知りたかったのは、善と悪のちがいであった。それは神々が理解していないことだったからである。神々は善のおこないと悪のおこないが存在する以前から目覚めていた。そのため、死への恐れを微塵も抱くことなく、自由気ままに振る舞っていた。

かたや人間たちは高貴なおこないと邪悪なおこないを分け隔て、一方を讃え、一方を譏り、彼らのうちの誰ひとりとして、それらに無関心な者はいなかった。

そのようにして、彼女は神の巻を見つけた。善なる巻と悪なる巻、そのいずれも巻であることに変わりはない。善なる巻はモコツと〈跡絶ゆるの神〉がともに抱いた巻、悪なる巻は〈冥界の王〉がモコツに抱いた巻であった。

人間が巻によって奇跡のごとく誕生したことを知り、また、不浄な敬があらゆる祝福を滅ぼさんと奸計を用いたことを知り、ドルヤの胸は恥、怒り、悲しみではち切れんばかりになった。

自らがその腐った果実であると理解したからである。

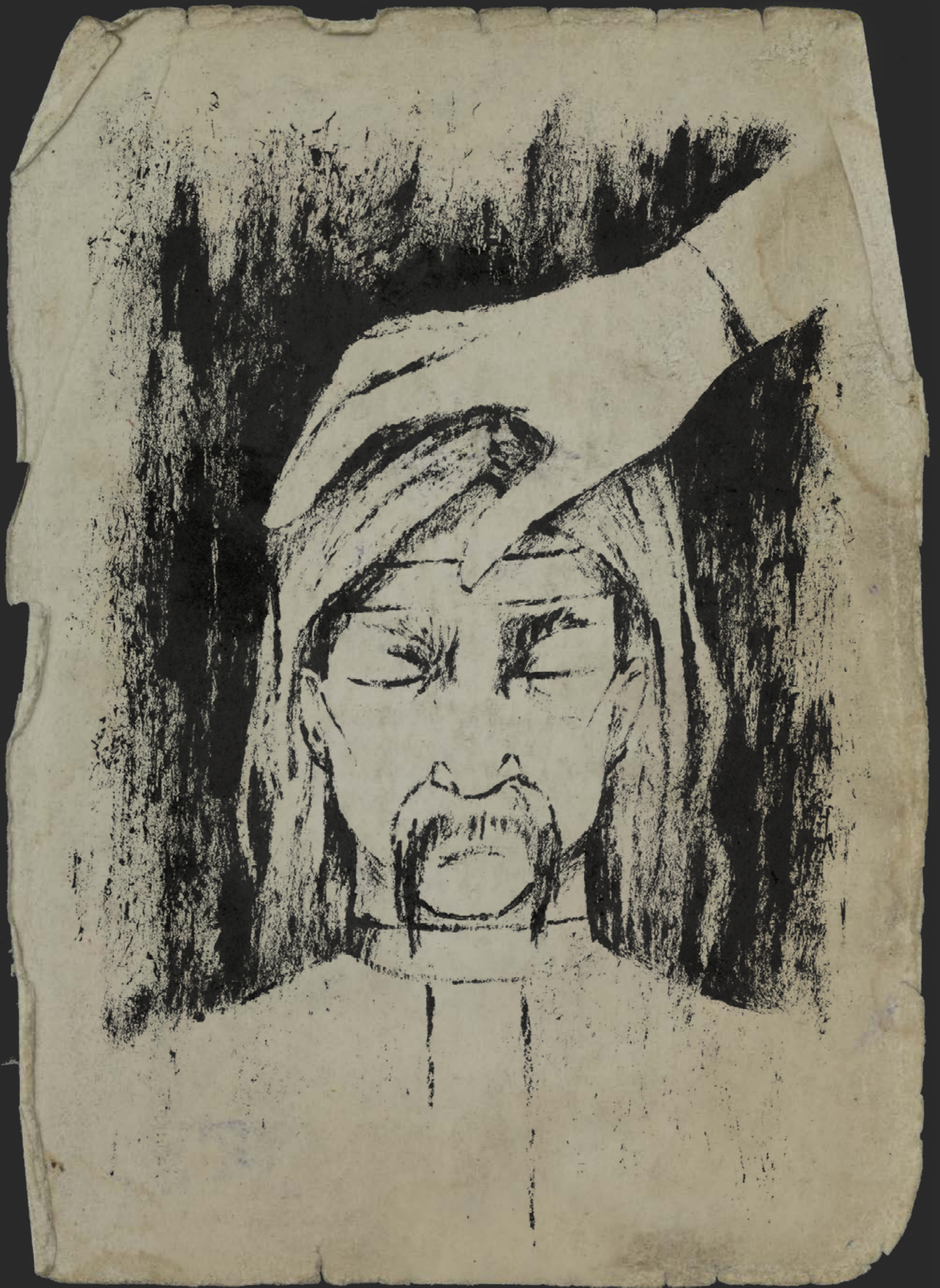


五十 引き裂かれた ドルヤ

ドルヤは子のみが受ける受し方で父ヴェレスを受していた。ドルヤはかつて冥界の王国に心打たれ、ヴェレスの語る獣たちと植物たちの創造の物語にため息を漏らし、人間による破壊を眼にするたび、父とともに眉をひそめた。彼女は父を信頼し、父の仕事は美しく偉大であり、父の志は純粹そのものであると信じていた。

しかし、人間たちの話を聞いた今、彼女は自らの思い出を、これまでとは異なる光の下で見ている。かつてのヴェレスはやさしく、穏やかにモコツを見ていたが、今では欲望に満ちた眼をこっそりと向けるようになっていた。ヴェレスと人間との戦いはもはや自然をめぐる戦いではなく、ほかの神々との我の張り合いへととなりさがっていた。

ドルヤは母の定めを憐れむかたわら、父を軽蔑していた。そして、罪の意識と同時に、プラボーへの奇妙な憧れを抱いていた。そして、彼らみなに同情するとともに、怒りを感じてもいた。ドルヤが受けた造物のすべてを、彼ら創造主たちは玩具や道具のごとくに扱い、なんら顧みることなく捨てていたからである。



五十一 ささやき手 の任命

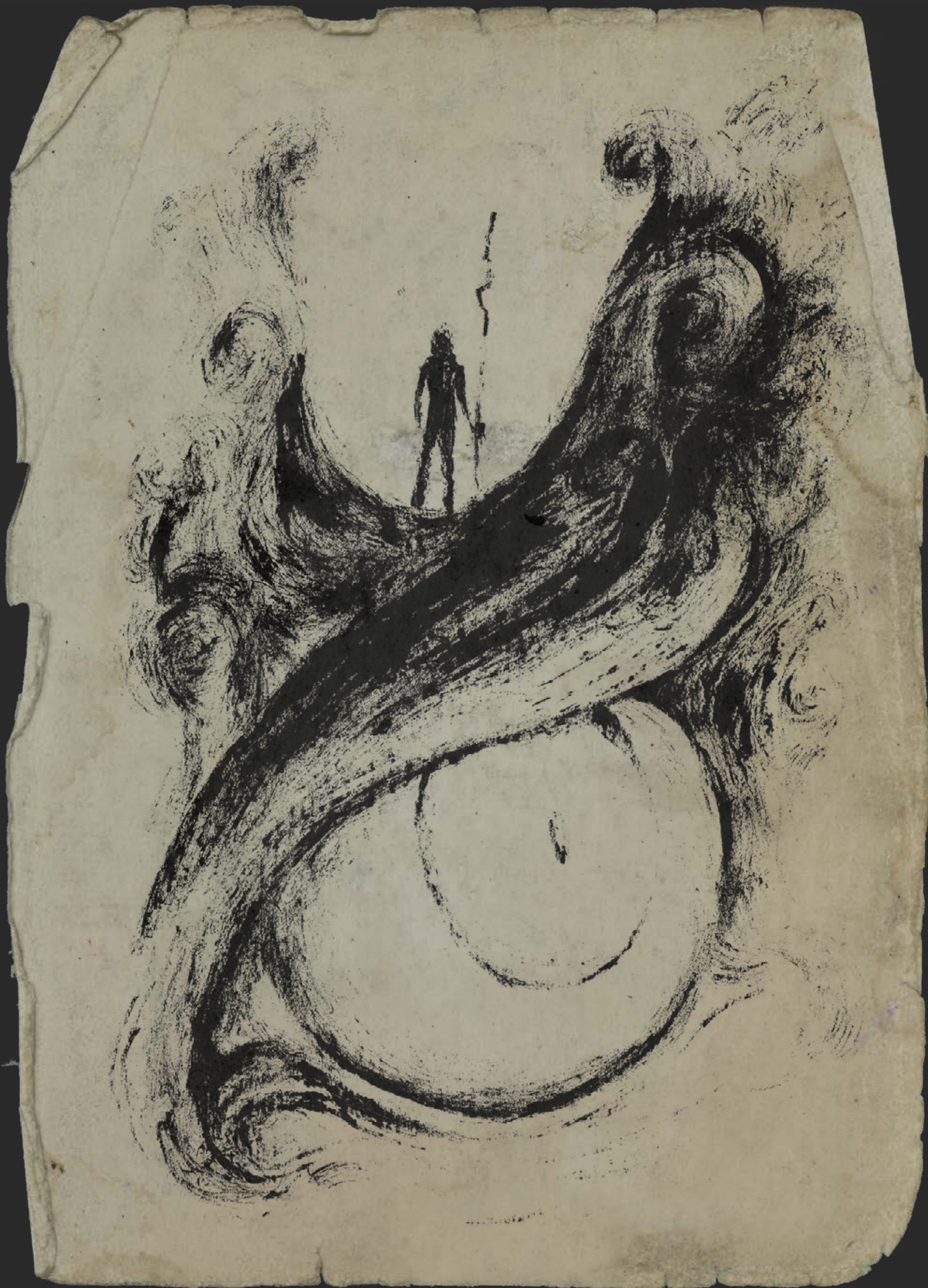
ドルヤは公正であった。彼女には知恵と力があふれていた。時の終わりが来たるまで、とこしえにドルヤを讃えよ！ かの女神よりも偉大な人間の友はいないからである。

神々のおこないに慍慨したドルヤは最高の戦士たちを自らの手で選ぶことにした。ドルヤを知る者たちは彼女の足元に膝をつき、忠誠を誓った。そして、ドルヤは彼らのこうべに手を置いた。だが、人間の心は計り知れぬもの。ドルヤの教えにふさわしいのが誰なのか、それを窺い知ることはできなかった。

このようにして、ドルヤは彼らに自らの力を注ぎ入れず、代わりにすばらしき糸で彼らを神々と結んだ。それは木が水を飲むために豊かな土壌に根を伸ばすのに似ていた。そうして彼らは神々の力を引き出せるようになり、信心深い者はよりいつその力を引き出しえた。この祝福を生かせるよう、ドルヤは彼らに神々の言葉を教え、新しき力を空みの形に編むすべを教えた。

爾来、この力ははるかに大きくなり、彼らはそれを口外しないと誓いを立て、まじないの言葉を小さな声でつぶやくようになった。これこそが、彼らが〈ささやき手〉と呼ばれるゆえんである。

我らは彼らの子孫にして、彼らはドルヤの神々しい言葉を我らの
耳に吹き込んだ。我らの先祖を讃えよ!



五十二 神の烙印

ささやき手〉はどの部族にもいたが、彼らに近づくのはたやすいことではなかった。彼らのなかには風圀を抜け目なくにらみ、人を寄せつけない者もいた。が、ほとんどの〈ささやき手〉は姿を隠していた。我らの先祖たちは、力を誇示する者のまわりには、蚊が群がるがごとく、人が群がるとすぐに理解したからである。そして、そうした侵略者たちはほかの者たちにとっての益よりも、自らの益に重きを置いていたからである。

だが、〈ささやき手〉たちは人間のためにあつたのではなく、女神ドルヤに仕えるためにあつた。彼らは人々に益するためにあつたのではなく、世界の均衡を保つためにあつた。

では、〈ささやき手〉と思われる者を見つけたとき、どのようにしてそれがまことに〈ささやき手〉であると見定めるのか？

ささやきによって見定めるのではない。ドルヤの祝福がなければ、それがドルヤ自身の口から出たのであれ、ほかの〈ささやき手〉の口から出たのであれ、いかなる男も女も、まじないの言葉を理解しえず、また、繰り返しえぬからである。

では、いかにして〈ささやき手〉を見定めるのか？ 印を探るのである。祝福を受けた者は、その皮膚に染みのごとき印が残る。血の赤の色をした、黄土で描いたかのごとき印が。それは

鋭く、刺すような眼差しに似ている。その眼差しは人間のようであり、獣のようでもある。それはちょうど、〈さきやき手〉たちのあるべき姿でもある。すなわち、誰にも与せぬということである。



五十三 リブツユカ の物語

ささやき手〉たちと私はつねによい關係を保っていたわけではなかった。〈ささやき手〉は人々の友でも敵でもなければ、彼らの仕事ぶりは当てにならぬこともあったからである。

ときに、男が死ぬと、その妻は木の枝から首を吊り、鳥のごとく飛び立って、神の住まう地を目指す先に同行することがあった。ときに、女はそうすることを強いられた。

リブツユカが生まれた集落でもそれと同じことが起きた。彼女は男をとつかえひっかえしていたが、やがて美しい赤ん坊を産んだ。健やかで丈夫な子だったので、彼女はその男とともに暮らすことに決めた。

そのようにして、リブツユカは次から次へと子を産んだ。働き手として、戦士として、男と女がつねにふんだんにいるようになるためである。戦が絶えなかったため、リブツユカの男もよく戦に出向いた。彼はつねに勝利していたが、ある日、馬だけが帰ってきた。彼の亡骸を背後に引きずって。

誰もがこの知らせに打ちひしがれたが、誰よりも嘆いたのがリブツユカであった。男のあとを追い、ヴェレスの蛇どもの犠牲になりたくなかったからである。

そこで彼女は集落のそばに住んでいた〈ささやき手〉のもとに
廻けた。日暮れから夜明けまで、彼女は乞いに乞い、〈ささやき
手〉もしまいには力を使うことにした。

そのようにして、リブツユカはナヴィアとなり、震える声で毎夜叫
び、男たちに死を警告するようになった。



五十四 ささやきの 物語

〈ささやき手〉たちは強く、彼らの役割は欠かせぬものであったが、その最大の敵は予覚と予注意であった。

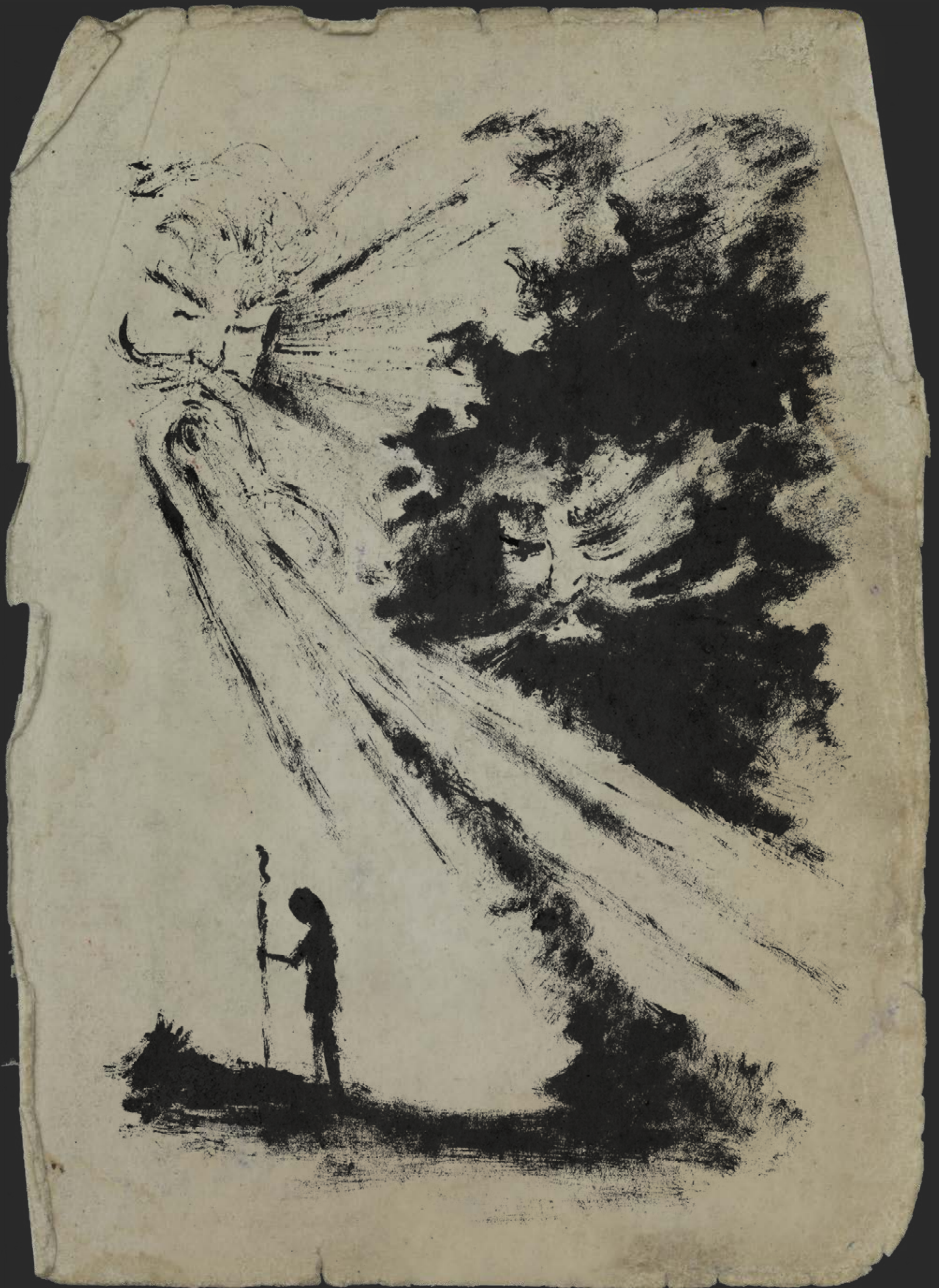
集落はさまざまであり、それぞれの生活はそれぞれの困難を呼んだ。が、かつて誰もが幸せに生きた集落があり、そこには隠遁の暮らしに飽いた〈ささやき手〉すらも訪れた。

子供たちは蠅のように彼に群がり、彼がささやかな技を見せると、仔豚のように鳴いた。

平和のうちに暮年かが過ぎ、〈ささやき手〉は少年のひとりを弟子に取ることにした。弟子は熱心で信心があり、みなを助けたいと願っていた。

この者は太陽が空に最も長く輝く特別な一日が来るのを待ち〈ささやき手〉のまじないを大音声に叫ぶと、この世界が〈恐俤〉から解き放たれるようにと神に乞うた。それを続けていると、やがて〈恐俤〉がその声を聞きつけた。それは彼のもとにやってくると、彼を食らい、〈ささやき手〉を食らい、村人たちをひとり残らず食らった。

まじないを口にしてよいのは我ら〈ささやき手〉だけであり、それ以外の民は日常の祈りだけで心を満たすべきだからである。

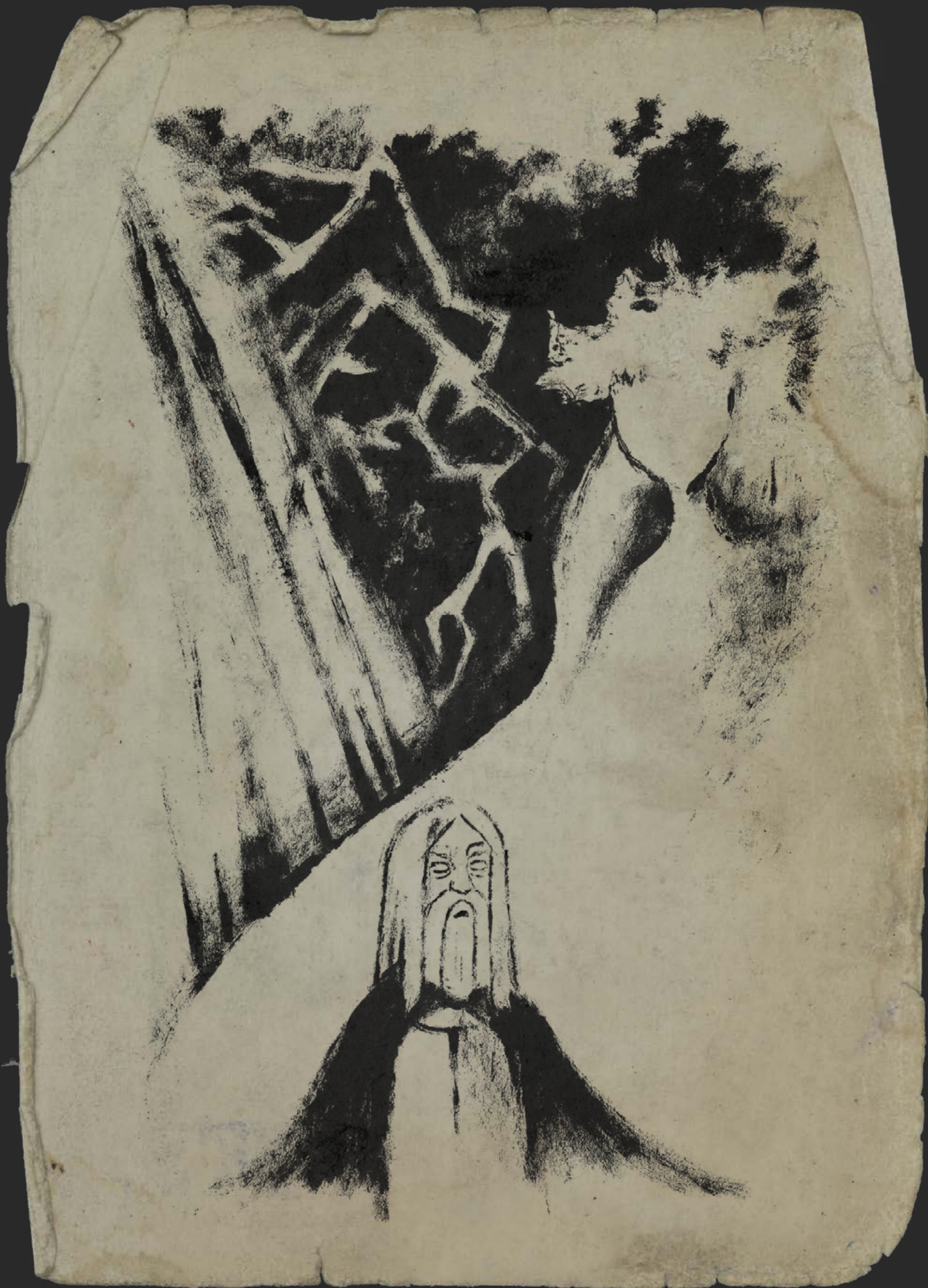


五十五 まじない

神々のおこないには榮光があり、彼らの饅頭物は思いもよらぬものである。彼らにとって、声をかぎりにした人間の祈りなど、小川のつぶやきのごとくであるが、〈ささやき手〉の秘魯のまじないは、彼らの耳に雷のごとく響く。

ダボーとペルソがまじないの言葉を聞き初めた際、その響きはいかばかりであったか！ 彼らは自らの耳を両の手で覆い、逃れんとし、自らの叫び声でまじないをかき消さんとしたが、その響きが衰えることはなかった。

神々は激怒した。彼らは人間たちの定めにも願いにも頼着せず、ただひたすらに冥界への道を見つけ、ヴェレスを捕らえ、モコツを解放し、プラボーを喜ばせることのみを望んでいたからである。この使命を果たすために刻られたはずの男と女は、もはや当てにならなかつた。人間たちは今やイナゴのごとく世にあふれているが、彼らの好奇心と勇氣は、もはやなんの価値も持たなかつたからである。人間の祈りは甘露のごとく甘く、神々を力で満たすため、神々はそれを喜んでいた。が、それでも、こうしたまじないの言葉は苛立たしいものであつた。馬にたかつて奇跡の血を飲み、渴きを癒やさんとするアブのごとく、それは神々の靈氣を奪うからである。

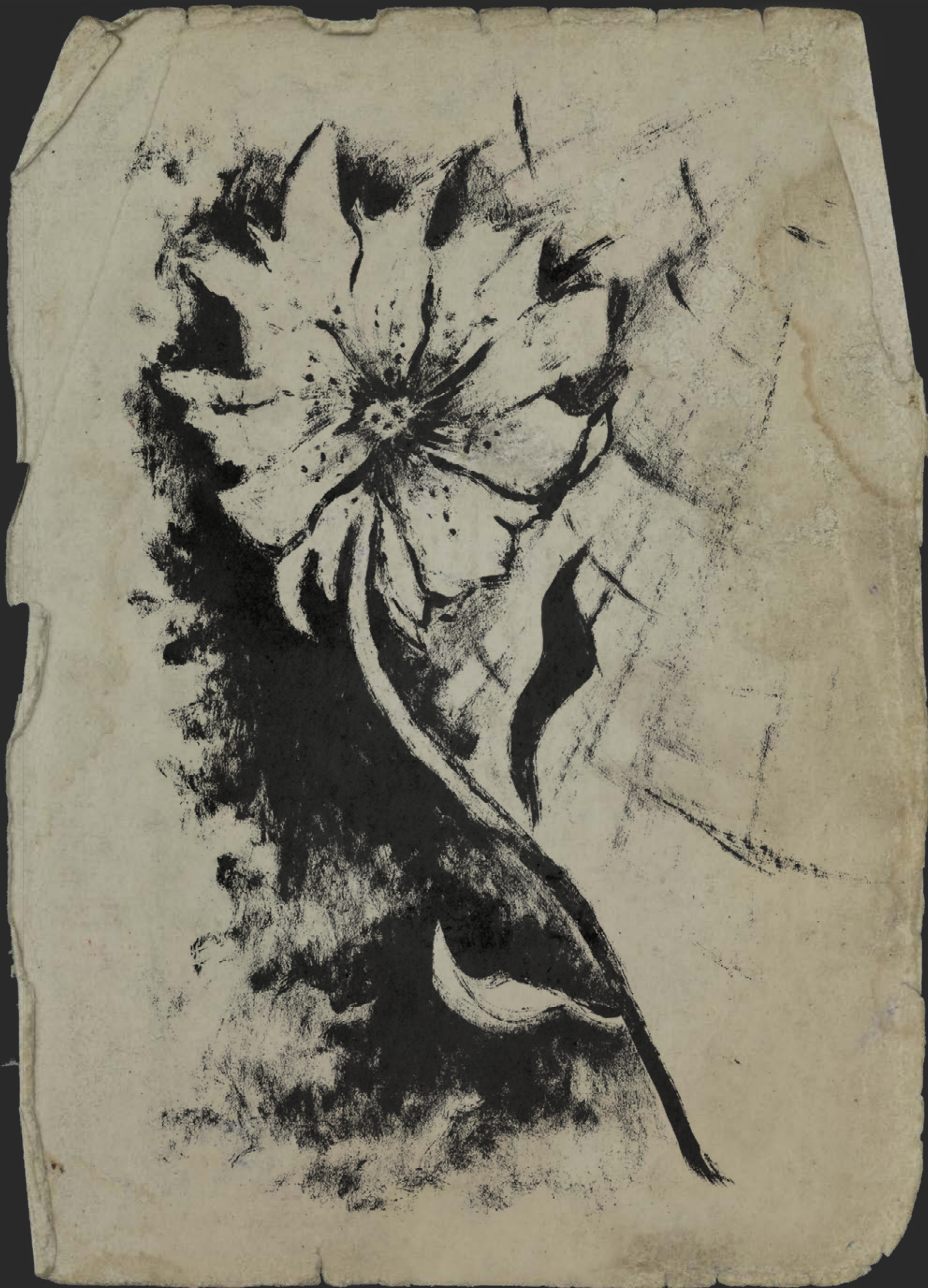


五十六 対立

ペルソとダボーは人間の非礼に怒った。神々の邪魔をすることはいかなる見か、神々の力を掠めたのは何者であるのか、勝手な人間どもには破滅こそがふさわしい、と。

それゆえ、神々はすっかり人間の足に踏み固められた地に降り立ち、不敬なる者のまえに立った。その者の唇には禁じられたささやきが踊っていた。だが、その者はダボーの輝きに眼をくらませることもなければ、ペルソの陰しさにまうこともなかった。その〈ささやき手〉はまっすぐに神々の相貌を見つめた。その眼は容赦なく、残酷であった。分別があり、熱烈であった。我らの始まりの者の、なんと勇敢なことか。そして、神々が渾身の一撃を繰り出し、この雷霆の息の根を止めんとしたそのとき、ひとりの女が彼らのあいだに割って入った。我をなくしていた神々はこの女を人間と思ひ、いつさいの情けをかけず、ありったけの力で打った。だが、彼女は倒れもせず、たじろぎもせず、〈ささやき手〉には神々の力のひとひらも届かなかった。

神々はプラボーから聞きおよんでいた強さをその女に見出し、これは地上を歩くモコツの娘にちがいないと理解した。そして、ペルソとダボーは自らの狼藉を恥じ、彼女のまえでこうべを垂れた。



五十七 不信

ダボーもペルソもモコツを見たことはなかった。モコツについて語る、熱に浮かされたようなプラボーの言葉と、その美の似姿として刻られた女というものについては、彼らも知っていたのであるが。

しかし、ドルヤのなかには彼らが見たことのない何かがあった。岩のように荒々しく、暗闇のように深く、プラボーにも人間の男にも似ていない何か。

神々はこのようにして、ドルヤはヴェレスの娘でもあるにちがいないと理解した。そのため、彼女を信用する気になれなかった。そして、ダボーとペルソがあなたの母はどこにいるのか、冥界にはどのようにして行くのかと尋ねると、ドルヤは彼らがこの世界の定めには頼着していないこと、彼らが気に懸けているのはプラボーの指図だけであることを悟った。そこでドルヤは、もし自分の計画を助けてくれるのなら、見返りにヴェレスの王国の入口を指さすと答えた。

ダボーもペルソも彼女に口を割らせることはできなかった。ドルヤは彼らの力のまえに屈しようとしなかったからである。そこで、彼らは首を肯んじ、〈ささやき手〉たちに力を貸すことを誓った。



五十八 ダボ—の饅 り物

最初にこの誓いを果たしたのはダボ—であった。彼はかつて人間に心臓の一部を与え、それを偽りの神として使われていたため、自らの大いなる過ちを償わねばならなかった。

このようにして、彼は第一に自らの髪を切って縄をない、このしたたかなる饅り物をドルヤに与えた。

第二の身振りで、自らの腕の皮に手を伸ばすと、それをまるごと剥ぎ、魔法の鎧としてドルヤに与えた。

第三に、自らの神なる小指をつかむと、それを小杖のように折り取って、したたかなる杖としてドルヤに与えた。

第四に、自らのまぶたをつかむと、それを薔薇の花弁のようにむしり、あらゆる者の眼から守る頭巾としてドルヤに与えた。

第五に、彼は手を伸ばすと—— [かすれていて読めない]



五十九 ペルソの饅 り物

ダボ一の饅り物の数々を見て、ペルソは驚りたかぶった。ペルソはいかなる意味においても、何者かに後れを取ることを望まなかったからである。

このようにして、ペルソはとこしえに自らを追いまわす黒雲を取ると、蜘蛛の網のごとき形にし、それを木の葉のなかに収め、万能の魔除けとしてドルヤに与えた。

次に、ペルソが自らの一番下のあばら骨を取ると、それは輝き、ばねのごとく跳んだ。彼はそれをさかしまに曲げ、両端に自らの腕の腱を渡した。このようにしてつくった弓を、彼はドルヤの両の手の上に置いた。

だが、ドルヤはこれらの饅り物に満足せず、それがペルソの自尊心に火をつけた。そこで、彼は鼠が渦巻く空に手を伸ばし、素手でいかずちをつかむと、それを神の拳で固く握りしめ、金銀の波模様がついたねじれた刃に仕上げた。

それでもドルヤが感心しなかったので、ペルソは燃え立つ怒りをもって、自らの片方の前腕をまるごと引き抜くと、あらゆる物と障壁を塵に帰す棍棒となした。

ドルヤはそれを見て感心し、言葉を失った。



六十 神器について

昔の伝説に、大いなる力を秘めた“神器”についての記述がある。これらは神々がつくったものであるとされている。数多くのしたたかなる族長たちが、乳母の伽詔や星々と同じほど長命な賢者たちにそそのかされ、予運な探求の旅に出た。これらの神器のうち、いくつが今までに発見されたであろうか？ いくつが濼々調べられたであろうか？ 昔の神詔を記した文書は、神器のまことの形について、その数について、いかなる光も当てることはない。ただ奇抜な、つまらぬ符号についての言及があるのみである。そのようにして、老婆たちの語り継ぐ迷信を追い求めることは、傍からは興味深いことに思えるが、実りなき旅に終わるのが常であった。

〈大紫のま〉として、私は数々の“神器”らしきものを眼にしてきたが、いずれも奇跡の力を宿してはいなかった。私が耳にしてきた魔物、呪いの詔の類いは、いずれも沼地の瘴気にあてられたか、蜂螫酒に吞まれたなまくら者たちの戯言であろう。

とはいえ、私は責務として、この書に記された伝説について調べ、遠い地への旅の数々のあいだに聞いた詔でもって、この書の空を埋めるつもりである。



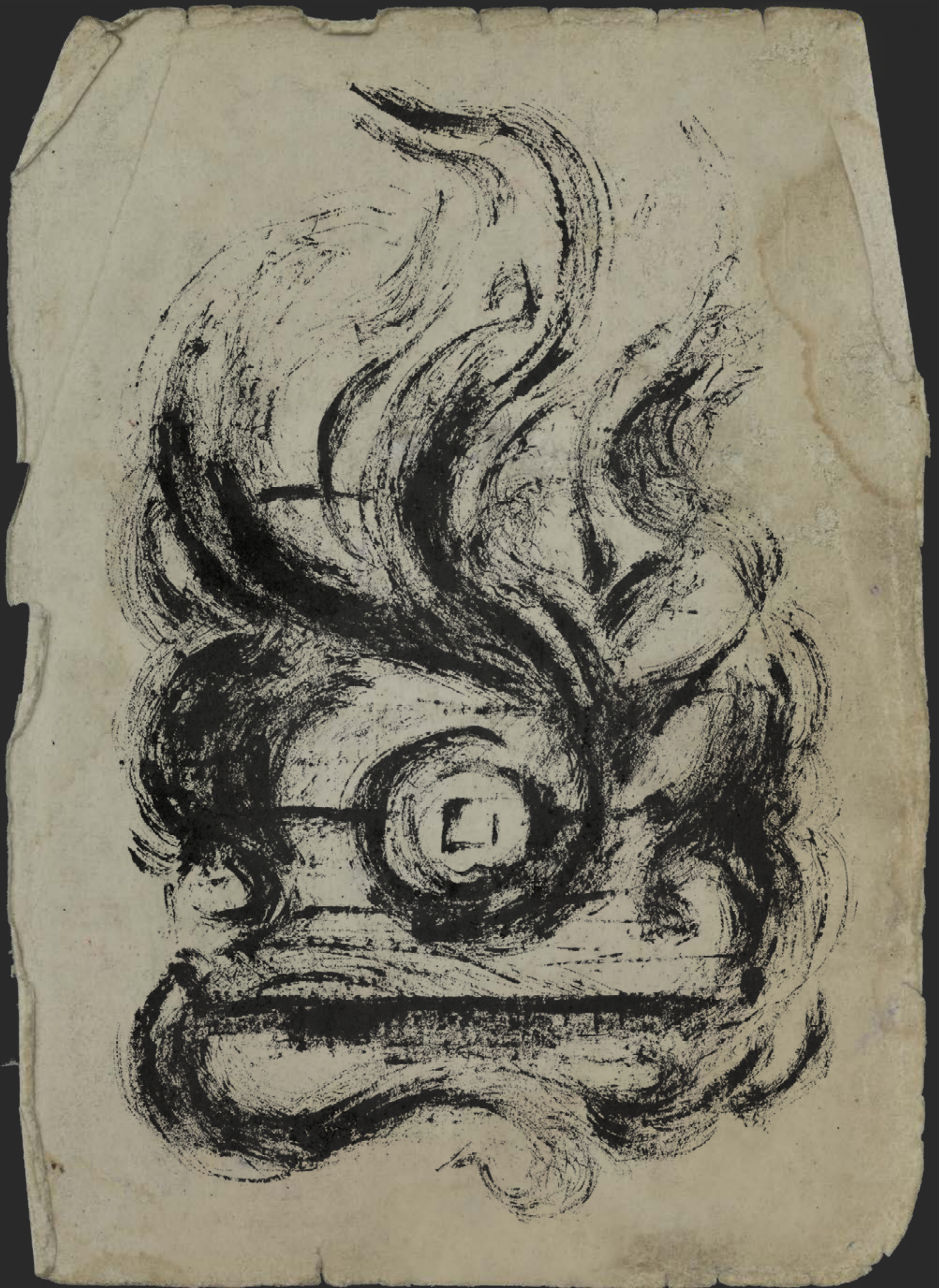
六十一 ドルヤにつ いて

古代部族の信仰は原始的であったが、〈大呪〉以前の彼らは、ドルヤという神を神話のうちに見事に描いていた。悲しみを湛え、人間の複雑な性愛をじっと見つめる神として。それは愚かな対立によって生じた野蛮な争いが、自然界に破壊的な影響を与えると彼らが理解していたことを示しており、驚くべき内省のきらめきといえる。

神話において、ドルヤは人間にやさしい感情を注いだとされるが、彼女は多くの人間が力を敬し、尊崇し、永遠の法を犯すのを目の当たりにしてきた。とりわけ、このように規模が大きく、原始的な部族が。

これは部族たちが我々の文明と同じ“悟り”にいたらんとしていたという話なのだろうか？ 部族がそうした内省を抱いていたということは、すなわち彼らにはまったき正当性があり、その土地を征服するのは予言、ということになるのだろうか？

そのような内省の痕跡はいかにも輝いて見えるが、それらを怪もれさせてしまう土のまえでは聲に等しい。部族は自分たちの原始的なやり方を捨てようとしなかったし、悲しいかな、これからも決して捨てないであろう。



六十二 大诅咒

昔の伝承によると、ドルヤは神も人も信じていなかった。この〈神の娘〉は、人間の欲望と神々の奸計とが神器に空ましからぬ効果を与えないよう、封印を施したとされる。その際に力を使い果たしたことで、モコツを地底の門から解放することは叶わなくなったが、ドルヤがこの犠牲を悔いたことはないと言われている。

これは祝福であり、災いでもあった。ドルヤへの誓いを破った者は誰であれ、恐ろしい呪いの犠牲となったからである。

そのようにして、ドルヤは神器が〈ささやき手〉たちの手に等しく行き渡るようにした。だが、神器よりも〈ささやき手〉たちのほうが数が多く、世界にはより多くの魔物と〈恐儼〉が出没するようになっていた。そのため、〈ささやき手〉らは誰が神器を携行するかを、そして、どの集落を救い、どの集落を邪な獣たちの餌食とするかを決めなければならなかった。

やがて〈ささやき手〉たちは、自分たちが全員で神器を管理し、〈恐儼〉が現われたという噂があれば、神器を手に駆けつけることで合意した。v

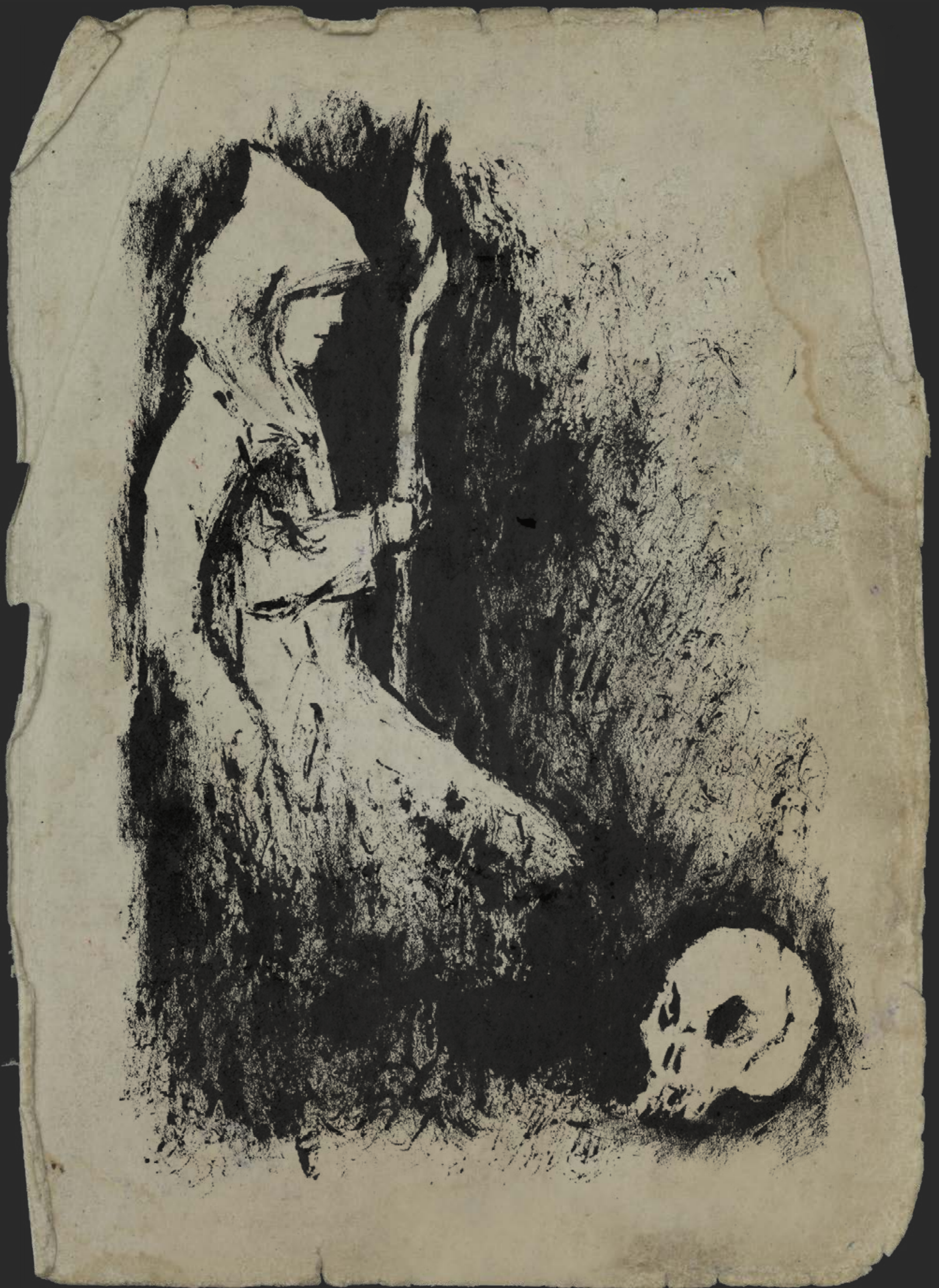


六十三 ささやき手 の名誉にかけて

神器と〈ささやき手〉にまつわる伽説がどのように育まれていったのかについて、断定することは難しい。が、何か起きたことはまちがいない。古人の歴史において、安定期と呼べる時期が確かにあるからだ。神説にいうところの〈恐俣〉の正体が自然の災害なのであれ、野の獣なのであれ、あるいは偉大なる、とうに忘れられし部族の長たちなのであれ、それは人間に對する攻撃をやめた。

古の伝説によれば、これはドルヤから賜った神器を携え、誓いを守った〈ささやき手〉たちが世界のあちこちに店がり、〈恐俣〉どもが二虎と均衡に害をなすことがないように働いたからだと言われる。

あらゆる〈ささやき手〉はその榮譽と榮光を謳われている。なかには、今日にいたるもその名を轟かせる者もいる。その後の奇妙な出来事を受け、詩は書き換えられはしたが。



六十四 神なる力の証

〈ささやき手〉らは世界じゅうを旅したが、その旅は困難に満ち満ちていた。彼らは〈恐怖〉と戦い、浮世の疫病と戦った。それはヴェレスの用心深い眼やスヴァログを信奉する好戦的な信者たちの眼をひいた。

すぐに、残忍な神たちも、そう残忍でない人間たちも、〈ささやき手〉らの崇拝と強力な神器を妬むようになった。それらは銀色の空に浮かぶ赤き星のごとく貴重なものであった。しかし、〈ささやき手〉を襲い、害をなそうとする者は、眼に見えぬ一撃や突然の病に見舞われるのだった。それを目撃した者によれば、〈ささやき手〉は攻撃を繰り出すよりも早く、その名が示すとおり、静かなまじないの言葉をささやくのだそうだ。

彼らは毒の靈薬の瘴気をささやき声にのせて飛ばしているの
であろうか？ それとも、誰も見たことのない銃手の投石器な
のであろうか？ 宙を滑る口笛が死をもたらすとは、果たしてど
のような武器を用いているのか？ それほどまでにしたたかで
名高い武器ならば、なにゆえ一度も盗まれなかったのか？ そし
て、なにゆえ今の世に伝わっていないのか？

〈ささやき手〉はまことに神々の力を行使したのであろうか？
学者たち、〈大紫の主〉たちは、これら古文書の断片を研究する
かたわら、こうした疑問を自らに問いつづけてきた。



六十五 ヴェレス 敗れる

神話によると、ヴェレスがようやく〈さきやき手〉らのまじないについて聞きおよんだ際は、自らが創造した〈恐俵〉に対して神器なるものが弄されていると知ったときよりも、なおいつそうおちのめされたという。つまるところ、神器はヴェレスに対して薄情な神々が人間に与えたものであり、さしたる驚きはなかったのである。さらに言えば、神器はヴェレスに従わずに、人間の集落を襲った〈恐俵〉に対してしか使われていなかった。そうした〈恐俵〉らは、ヴェレスがモコツと交わした約束を反故にしていたのである。このようにして、ヴェレスは神器というものに対しては、ことさら腹を立てていなかった。

だが、さきやきはちがった。ある日、ヴェレスは熊の姿を借り、こっそりと地上に近づいた。彼はそこで〈さきやき手〉たちの声を聞き、そのまじないのなかに、かつて自らの娘ドルヤに教えたのと同じ言葉と響きを聞いた。ヴェレスの娘は父を裏切り、不埒な人間どもを助けていたのである。

ヴェレスのなけなしの心は砕けて塵となり、魂もまた塵となった。



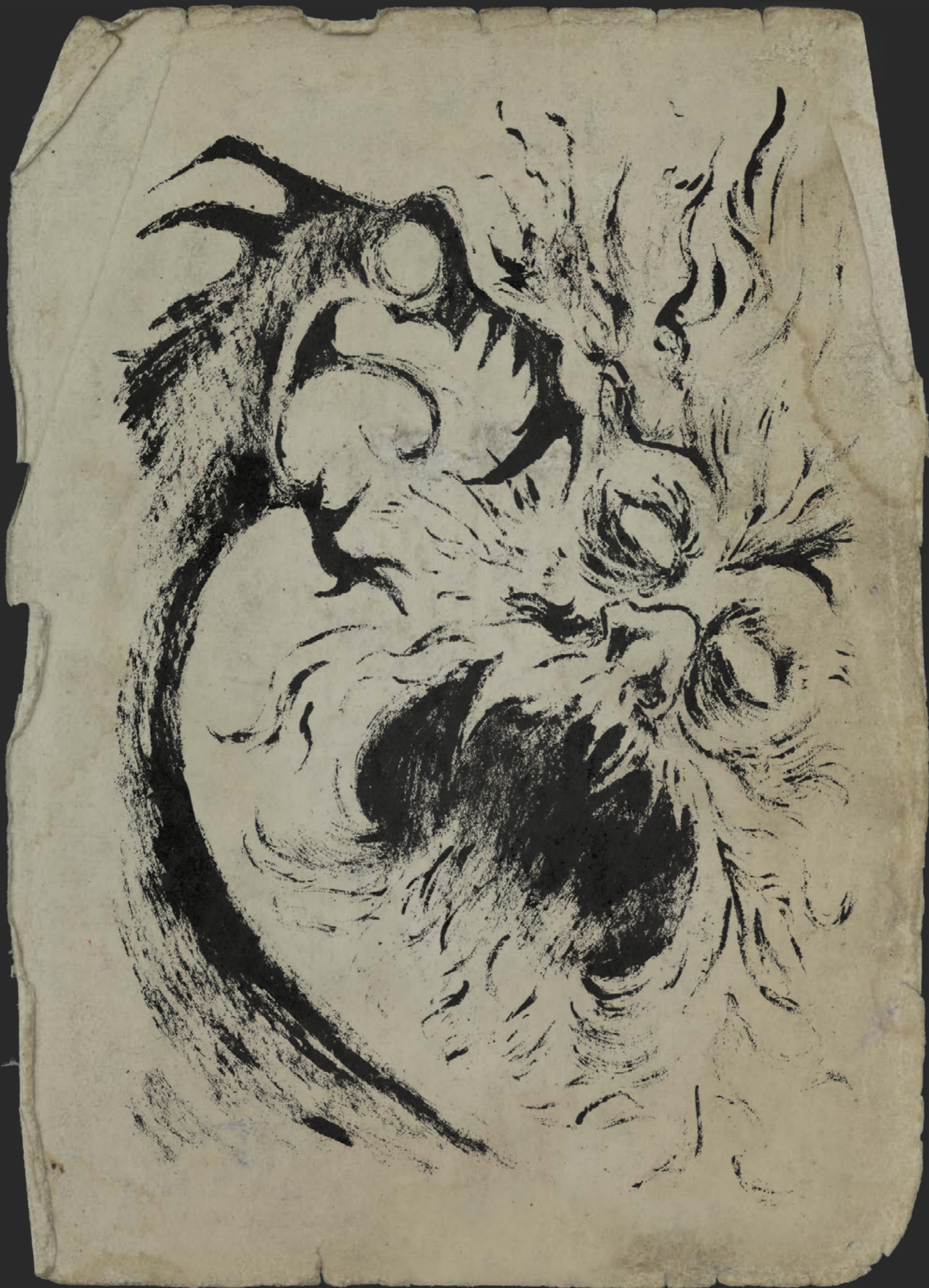
六十六 審判の日

だが、ヴェレスは娘を救した。ドルヤを心から愛していたし、娘は正義の心から我が道を選んだだけと知っていたからである。それでも、彼は人間のことは信じていなかった。ヴェレスは人間を嫌い、見くだしていた。奇跡の肉体から剥がされ、魂だけの姿となった人間をあまりに多く見てきたからである。彼らの魂は汚れ、邪悪であり、未知と憎悪の狭間で均衡を保っていた。

そのようにして、ヴェレスは〈審判の日〉を到来させることを決めた。が、カはすでに彼のもとを去っていたため、その仕事をさせる者がほかに必要だった。とはいえ、ホルスは空気のごとく人間の恐怖を渴望しており、スヴァログは信者なしにはなんらの輝きも持たなかった。

そこで、ヴェレスが自らの創造物のなかでも最高の作であるズメイ、〈蛇の君主〉にして〈恐怖の将〉のもとへ行くと、咲笑をもって迎えられた。ヴェレスはすっかり智が曲がり、やつれ果てていたからである。

だが、ヴェレスは狡猾であり、自らの心を知っていた。彼がズメイに与け与えたのも、そのような心であった。そのため、彼が口をひらくと、ズメイは耳を傾け、考え、ひそかに盤石を交わすことに同意した。



六十七 狼狽

ズメイはホルスのもとを、そして夜の帳を離れた。光の下で見るズメイの姿のなんと恐ろしいことか！ その肢は石粒のごとく、躰は硬き岩のごとく、口は底なしの洞のごとくであった。誰であれ、ズメイを眼にした者は絶命し、魂は肉体と分かれた、その顎に食われた。

〈蛇の君主〉がスヴァログのもとに行くと、スヴァログは恐れおののいた。彼にはズメイを打ち倒せるほどの力がなかったからである。スヴァログはズメイがもはやヴェレスの言いなりではないことを、そして、いかなる罅もズメイの肉食のまえには罅力であることを見て取った。慈悲の王ホルスは自らのまえに穢れをつく夜の獣どものことしか顧みなかったからである。

だが、ズメイのほうから罅を申し出た。スヴァログはすぐに、この〈蛇の君主〉が何かを恐れていることを、あるいは必要としていることを見抜いた。そして、それについてホルスからの助力は期待できないこと、あるいはズメイが自らの恐怖をホルスに打ち明けたくないと考えていることを見抜いた。

これは罅であるかもしれない。スヴァログがそう考えたとしても、ヴェレスとズメイの呑みまでは見抜けなかった。



六十八 最初の ささ やき手 の 洞 窟

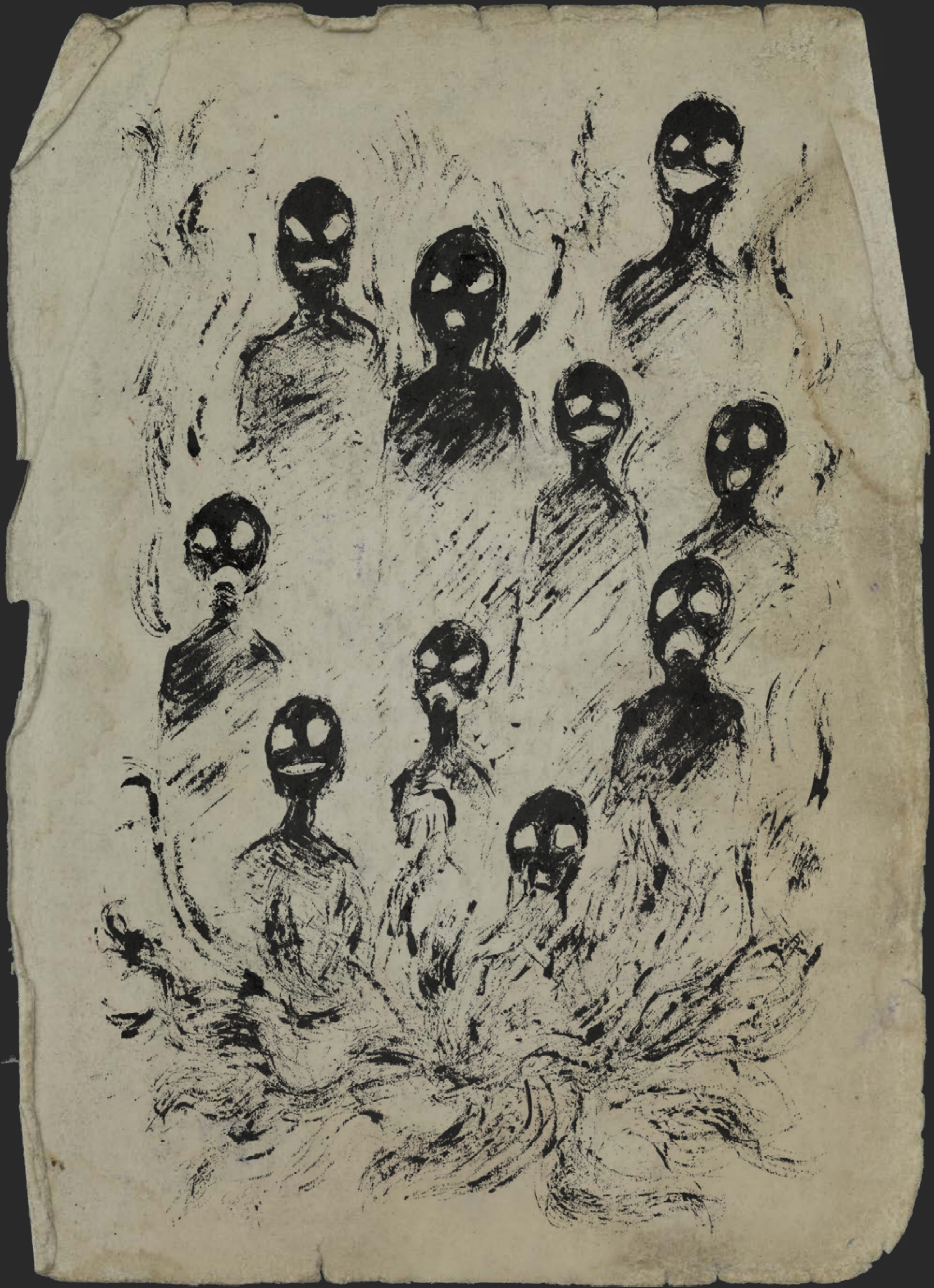
そのようにして、スヴァログとズメイは〈ささやき手〉のもとへ行
った。生ける火と生ける岩である彼らが並び立って歩くと、あら
ゆる生き物は震え、恐怖におののいた。彼らに面と向かい合お
うとしたのはドルヤのしもべだけであった。その者は唇にささ
やきをのせ、手に神器を持ち、彼らのまえに立ちはだかった。

だが、そのまじないがズメイを害することはなかった。ドルヤの
ささやきはヴェレスの心にも、モコツの血にも、害なすことはで
きなかったからである。〈ささやき手〉は神器は使わずにおい
た。ズメイは人々に悪さをしたわけではなく、世界の均衡を乱
しているわけでもなかったからである。もし使っていたら、ドル
ヤへの誓いを破ることになっていただろう。

そのようにして、ズメイは彼の手から神器を奪い、それを呑み込
むと、人間の言葉で話した。

「我はヴェレスとモコツが創ったものにして、〈恐怖〉の最初の
ひとり、そしてこの世界の君主。我がまえに襲われて滅びるか、我
に従って生きよ」

〈ささやき手〉はその言葉がまことであると知り、新たな主に従
うことにした。



六十九 裏切り

スヴァログとズメイはひとつの術から別の術へと旅した。そのうしろに怪物じみた仮面をつけた、大逆の〈ささやき手〉たちの一団を従えて。この邪悪な行進は道々で家々に火を放ち、魂を食らい、ドルヤのしもべたちを捜した。そして、しもべを見つけたときには、決まって同じことをした。

彼らが約束する力、権力、死を手なずけるすべは羨しかった。

虐殺し、魂を食らい、永遠の奴隷にするという言葉はそれと等しく恐ろしかった。

多くは危険を恐れ、多くはズメイの語にそそのかされ、そのようにして、〈ささやき手〉らは屈していった。ある者は力への渴望と敬に駆られ、またある者は自らの集落を救わんとして。新しい主に仕えると、彼らのささやきは蛇の声にも似た鳴き声になった。

なかには勇気と名誉にあふれ、〈蛇の君主〉に立ち向かった者もあったが、集落のみなとともに、ひとり残らず灰となった。



七十 凄惨

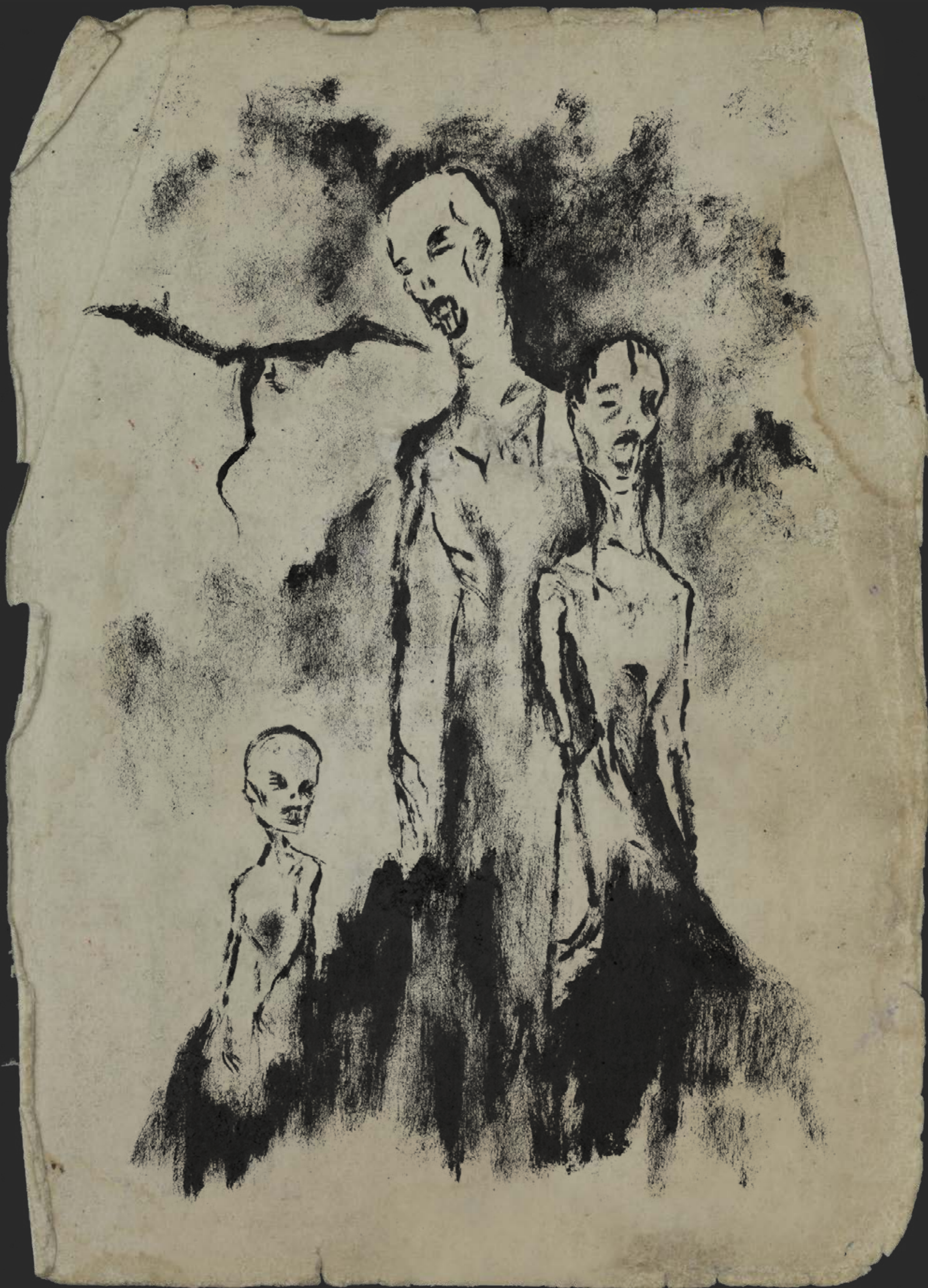
神器を呑み込むと、ズメイは突めとして力の奔流を感じた。が、同時に軀を内側から貪られるような痛みもあった。ズメイがひそかに神器を吐き出すと、それは神の肉よりつくられており、〈恐怖〉に対する武器であることがわかった。ズメイは神器をひとつ残らず手に入れたと考え、自らの一団に前進を命じた。

大逆の〈ささやき手〉のなかに、ほかよりもずる賢い者があつた。この者は集団を離れると、友好的な使者のふりをして近くの集落に急いだ。そして、ついに神器の守り手を見つけると、神器をひと眼見たいと申し出た。その申し出はすげなく断わられた。

だが、守り手は恐るべきズメイがやってくるのを見ると、この〈不逞者〉に神器を渡した。

神器である名弓を手にした〈不逞者〉はこれを用い、一団に狙いをつけると、自今を不逞に扱った者すべてを射抜き、自今に味方した者の命は助けた。ズメイが魂を食らい、力を増すさまを目の当たりにした守り手は恐れ、弓を取り戻そうとしたが、彼もまた〈不逞者〉に射抜かれた。

すると、この正しき者の血がほとぼしり、神器の封印が解かれ、近くにいた者すべての眼が不死の死の暗き霞いで覆われた。



七十一 死の腕

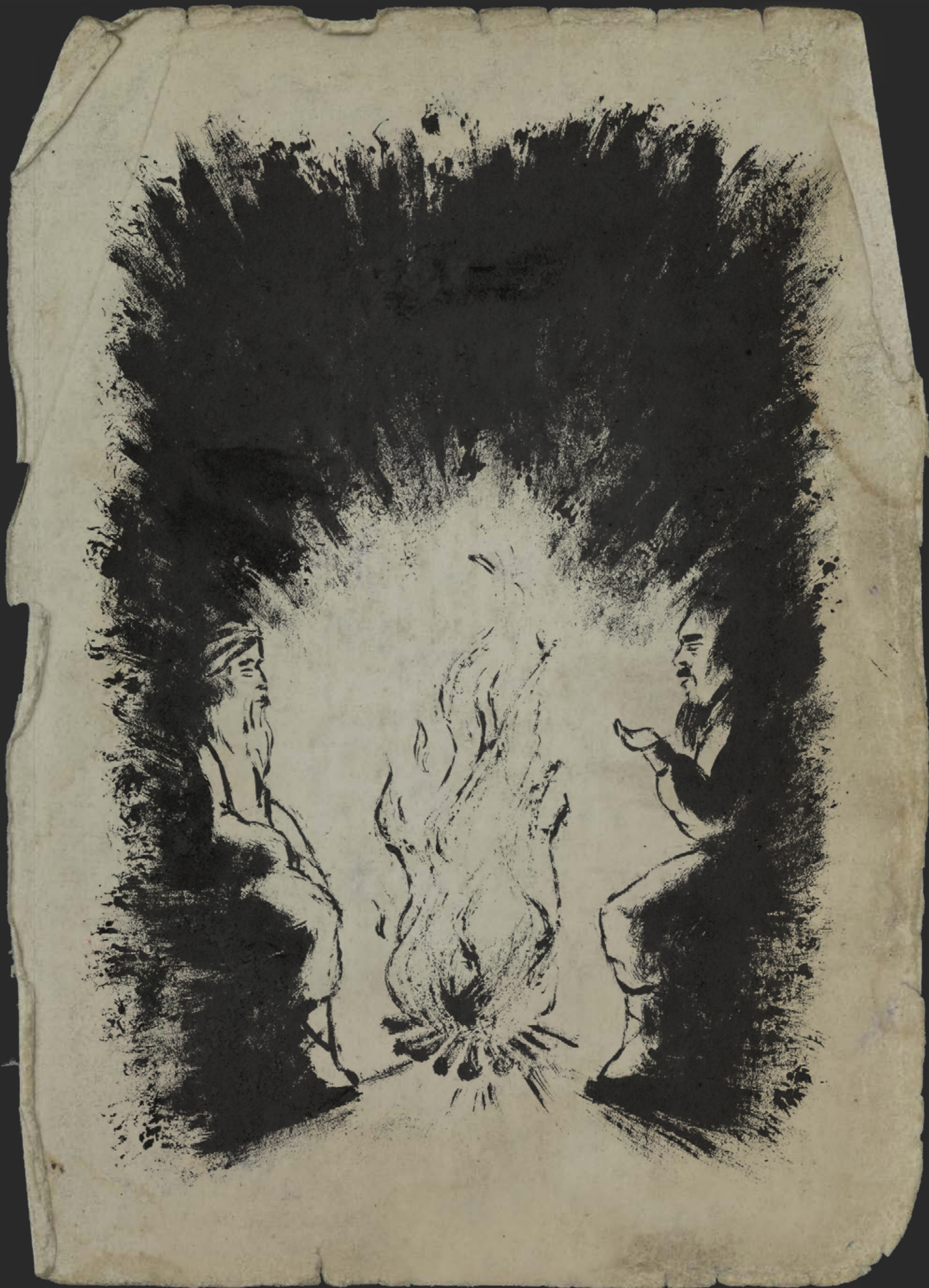
太陽が突然にして没し、夜が降りたかのごとき忌まわしき日であった。人々の眼に怪がおりた。怪は彼らの心を奪らせ、舌を締めた。

この守り手が暮らしていた集落にいた者はひとり残らず死んだが、同時に、どういうわけか生きていた。ドルヤの誓いを破った罰のなんと恐ろしいことか！ 世界の均衡を乱した代償のなんと言語に絶することか！

ドルヤは公正にして、人間を心から愛していると言われるが、彼女はそれ以上にアヴェレスの創造物を、すべての獣と植物を愛している。それらを救うためであれば、彼女は欲深な男たち、女たちを犠牲にすることをためらわぬであろう。

すべての人間はその場に立ち尽くしたまま〈大呪〉に打たれた。彼らの肉体は死んだが、魂は体内に残され、半狂乱になって自らの四肢を萎えさせた。彼らは炎に群がる蛾のごとく円を描き、まだ〈ささやき手〉の手のなかにあった神器を囲んだ。そして、灰煙のごとく、恐ろしいかに焼かれた地の上を漂った。

これを見たスヴァログとズメイは神器の力に驚嘆し、退いた。それ以上に近寄れば、彼らとて〈大呪〉に打たれるからである。手下の〈ささやき手〉の多くを失った〈蛇の君主〉は、これがつくりごとでないことを知った。そのため、ふたりはその場を去り、呪われた部族をとこしえの慈悲の手に委ねた。



七十二 熟慮

使者たちはすぐにこの知らせをひとつの集落からまたひとつの集落へと伝えた。間もなく、人々はこの呪われた部族のことを知り、〈ささやき手〉の名誉が風に運ばれる葉のごとくに吹かれて消えたことを知った。

人々は自らの部族の長に、そして互いに、こう尋ねた。なにゆえ我々はひとりの〈ささやき手〉の過ちのために魂を支払わなければならないのか？ ズメイが我らの頭上に影を投げ、スヴァログの火が我らの足を舐めるとしたら、我らの定めはいかようになってしまうのか？ 我らはすぐにも降伏し、苦痛のうちに死ぬか、あるいは呪いの気まぐれに屈し、心をなくした生ける死者と化すに身を任せるべきではなからうか？

もし〈ささやき手〉らがこの恐怖を利用し、我らを支配するつもりであったら？ 神器の行使をちらつかせ、我らを従えようという脅づもりであったら？ やつらがあまりに悪かたで、驕りたかぶり、力に飢えていたら？ あるいは勇気、忍耐、知恵に欠けていたら？ 我らはこの世界の秤がドルヤの空みどおり平衡に保たれていると、あるいは一方に傾いていると、いかにして知りうるのか？



七十三 追放

そのようにして、大いなる選抜の日が来た。それがいかに重大な決断であったかは、部族の長たちの会合の貴重な記録が残されていることからわかる。その最も重要な部分はこのように翻訳できる。

「恐ろしさ、不確かさ、そしてふたつの不穏当な道。ひとつ、〈ささやき手〉どもをここに残し、呪いの悪徳を受ける危険を背負う。ふたつ、彼らに立ち去るよう命じ、〈恐怖〉から身を守るすべを失う。いずれの道を選ぶにしろ、我らを待つのは不浄なる死の大口ばかり」

しかし、古代の人間は魂は死後に神々のもとへ行くと考えていたため、死した体のなかに魂が囚われることを望まなかった。

そこで彼らは勇敢な男たち、女たちの助力を得て、〈ささやき手〉らの神器を奪い、〈ささやき手〉らを追放した。だが、秘密のまじないを知らなかったため、そうした力の器を世界の最も遠い僻地に隠すことにした。

このときより、〈ささやき手〉らは人間の集落に帰ることを禁じられた。疫病をもたらす鼠たちを家に招き入れぬのと同じく。

そのようにして、〈ささやき手〉とドルヤのしもべたちは散り散りになり、追放され、永遠の放浪者となった。彼らがかつてしもべとなったのは恐怖のゆえであったが、それと同じ恐怖に押しつぶされることとなったのである。



七十四 放浪

そのときより、〈ささやき手〉らが足を踏み入れうる集落はなくなった。新たにやってきた者は身ぐるみを剥がれ、体にドルヤの秘蔵の印がないかどうか、検められるようになったからである。放浪者の体に印があれば、あるいは野生の眼を思わせる模様があれば、警鐘が鳴らされ、その者は追放された。それが母の胎内で作られた自然の印であろうと、まことに〈ささやき手〉の秘蔵の印であろうと、各ありとされた。彼らを死から救うるのは、呪いへの人々の恐怖のみであった。集落の者たちは自らが呪われることを恐れていたからである。とはいえ、〈ささやき手〉の多くが狡猾に襲われ、遠くより射抜かれ、あるいはあとを尾けられ、寝込みを襲撃され、命を落とした。

そのため、〈ささやき手〉らはとこしえに黙し、孤独のうちにさまよいつづけた。彼らの肉体はよりしたたかに、命はより長くなっていたため、時間はゆっくりと流れた。彼らのささやきが枯れ、神器を失った世界が枯れ、邪なる力が勢いを増しはじめると、絶望は象重にも増した。



七十五 ボハソ

〈ささやき手〉らは長壽で、カに祝福されてはいたが、いずれ死を通してモユツの抱擁のもとに帰らねばならなかった。そして、ドルヤの秘啓の教えにふさわしい新たな者たちが生まれた。だが、女神は降り立って彼らに教えを施すことはなかった。そのようにして、世代を重ねるごとに、かつて奇跡を起こした〈ささやき手〉らはさらに力を失っていった。

が、神の器の伽語を忘れずにいる者があつた。その男はダボーとペルソが神の肉からそれらを切り落としたこと、〈ささやき手〉らが人間に善をなすためにそれらをめいめいで所持していたこと、そして、彼らがやがて世界のあちこちに隠遁するようになったことを覚えていた。

この男は神器のみがズメイを飼い慣らす力であると承知しており、ズメイを倒すためならば、自らの魂に呪いを引き受ける覚悟を有していた。

ボハソというのが彼の名であつた。聖書の款が彼の名をどこしえに款いつづけるであろう。この者は苦惱するすべての衆生を救わんとしたからである。



七十六 ふたたびの 団結

世界は衰退の一途をたどっていた。人間の心はとこしえの恐怖と憎悪に満ち、それは獣たちの遠吠えと、ズメイのしもべらがたてる蛇のごとき音によっていや憎していた。

はじめ、〈ささやき手〉らは互いを避け、ほかの男たち、女たちを避けていた。が、時が経つと、彼らは流浪の暮らしに倦んだ。彼らはこのように考えたのである。我らは互いの顔を知らない。ほかの流浪者と出会うことがあったとして、それが我らを獲物のごとくつけ狙う狂人でないと、いかにしてわかるのか？

やがて、そんな彼らの心に勇氣と誇りが戻った。人間は凋落し、怪物どもの肢や爪に引き裂かれていた。そんな光景をただ眺めていることに、もはや耐えられなかったのである。

最初に口をひらいたのはボハツであった。たそがれの刻、長い旅路の末、彼は小川のそばで涼む女に出会った。

女は筆にとまるトソボのごとく穏やかで、鼠のあとの虹のごとく美しく輝いていた。

ボハツが女にささやくと、水がこだまとなってその言葉を繰り返し、女が振り向くと、空気が力によってきらめいた。



七十七 神々の英雄

彼らは出会ったそのときから歩みをともした。ほかの流浪者たちはふたりが何者であるかをひと眼で見抜いた。ふたりの眼はふたたび野生に帰り、神の知恵にあふれていたからである。

〈ささやき手〉らは森を、荒野をさまよひ、谷を、山を越え、それから川を、崖を渡った。

ボハツが彼らを導いた。ドルヤに導かれるかのごとく、〈ささやき手〉らがひとり残らず集まるまで。

このさすらいの旅のあいだ、彼らは〈恐俘〉や邪な男たちと戦った。

〈ささやき手〉はもはや人間の味方でも〈恐俘〉の味方でもなく、世界の均衡のために戦っていた。そのため、敬や憎しみの心から他者を叩く者を討たねばならなかった。

〈ささやき手〉らは打ちのめされ、追放され、忘れられ、蔑まれ、不当に扱われていた。泥の沼に溺れ、息もできぬようであった。

だが、そんな彼らが立ちあがり、過ちの抱擁を離れ、ふたたび誇りを持ち、自由、公正、寛慈悲を是とした。神なる英雄たちがそうであるように。とこしえに、かくあるべきごとくに。



七十八 盪るの者

〈ささやき手〉らのおこないは、名譽も仲間ももたらすことはなかったが、氣高きものであつた。

鳥たちは空中で円を描いて飛び、去り、また戻ってきた。

花たちは土を突き、それから瘦れ、こうべをそれた。

木々は果実をまとい、それから葉を失い、雪が解けるとまた倒れた。情け容赦なく時間が流れ、終わりが無いのは苦しみだけであつた。それは腐った肉のごとく人間の心に住み着いていた。

〈ささやき手〉らも歳を取つた。ある者は力が萎え、沈黙のままに死に、ある者は〈恐怖〉の爪にかかり、唐突な死を迎えた。彼らは世界じゅうをくまなく探したが、〈大なる神器〉の痕跡はひとつも見つからなかつた。

そこで彼らは専らになり、誓言のまま心を通じ合い、自らを〈盪るの者〉と命名した。彼らはみな誓いを立て、先祖がドルヤに立てた誓いを新たにし、ふたたび契りで自らを縛めると、あとを継ぐ者らを探すため、各地に散つた。



七十九 世界の崩壊

部族の物語は蒼々しきにあふれ、侵入者たちを見あげる彼らの眼は絶望に満ちていた。片手で数えられるほどの勇敢な男たちがいたところで、粗気に我を忘れた大群を相手に、いったい何ができるであろうか？ 刑を言い渡された者が、いかに運命の裁きに憂議を唱えられるであろうか？

神話にいう〈ささやき手〉たちの努力は遂に終わり、彼らの犠牲はなんらの意味も持たなかった。疫病が次から次へと人間を襲った。〈恐怖〉らはホルスの魔力の支配下に入り、ヴェレスに忠実でありつづけたものは数えるほどであった。いくつもの部族が終わりなき戦いに身を投じ、〈旧き神々〉への信仰を失い、不運のすべてを神々のせいにした。

人間から見ると、あらゆる神のなかでドルヤが最も忌むべき存在であった。ドルヤは人間を生霊とし、魂を閉じ込め、尊厳の空へと羽ばたけぬようにしたからである。

神器は地上から消え、〈ささやき手〉らとともに集落から放逐され、獣たちに食われ、泥のなかに引きずられ、あるいは人間の眼に見えぬ場所に隠された。

そのため、奇跡の救済への望みは絶えた。

崇拜、信仰、伽藍、まじないの時代は終わった。

鉄、武器、筆記、謀略の時代が始まった。



八十 神なきこと

人間は生きるための戦いに明け暮れた。刃に斃れないとしても、その代わりに悪疫、飢饉、毒、狂気に斃れた。

こうした忌まわしき出来事は〈恐怖〉が原因なのだろうか？ それとも、部族間の争いと流血を繰り返すことで、欲望によって自らの集落を破壊することで、そして自分たちを狂気に導く偽りの神々を信奉することで、人間が自ら招いているのであろうか？

いずれにしろ、〈恐怖〉は消えなかった。やつらはこれまでも増して恐怖をまき散らしていた。〈恐怖〉らはホルスの飢えを満たすためだけでなく、自分たちのために人間を殺し、平穩の見返りに供物を要求していた。

〈旧き神々〉はますます口を閉ざし、地上から眼を逸らした。神官は死に絶え、ぺてん師どもが、裏切りの秘術を施す者たちが、偽りの助言者たちが取って代わった。

部族の長たちは榮枯盛衰し、あとを継ぐ者はひとつまえの者よりも残酷であった。が、彼らはいずれも神に選ばれし者、神々の子を自認し、しまいには自らこそが神であると言った。

こうしたことが新たな文明の礎となった。これがその支配者たちの生まれ故郷である。彼らに統治される者には、決まって悪しき知らせが待っていた。

我らが民を讃えよ！ 〈偉大なるゴード〉の文明を讃えよ！



ハ十一 ささやき手 のたそがれ

そして、吟遊詩人たちの魂が祀せるがごとく、伝説も祀せた。数は少ないながら、過去の英雄たちは今も永らえている。が、彼らのうちにボハツの高潔なる血を打ちつづけている者があろうとは思えない。ボハツのごとき戦士の物語を耳にすることはもはやなく、神の力を授かり、世界を救うために自らを犠牲にする者もいない。伝説は墮ちた！ 忘れられし神々の偶像が誹られるのと同じく、神話も誹りを受けている。

彼のような者がひとりでもあれば、ドルヤに信を乞い、嘆願するであろうに。さすれば、ドルヤは定命の者どもの目を覚まさせ、〈大なる神器〉の隠し場所を明らかにするであろうに！

だが、誰が今なおドルヤに祈りを捧げるといふのか？

吾族どものなかに、今なお〈ささやき手〉があろうか？

神の言葉を今なお理解できる者があろうか？

誓いを守るために、自らの生を捧げる者があろうか？

英雄はもはやいない。吾族どもを嘆け。正しき人々はもういない。神の袂にふさわしき人間はひとりとしてない。神々に呼びかけよ！ 泣き叫び、懇願せよ！ 我らを憐れみ、神々の子らを我らのもとへ送りたまえ、と。狼のごとく飢え、渇み、山に囲まれた湖のごとく力強い眼をした子らを。



ハ十二 プラボーの 凋落

プラボーの世界は石を積んだ山のごとく崩れ、砂丘のごとく散り、突風になぎ倒される木のごとくに倒れた。

生命を存在させるにいたったものは何ものをも残さなかった。空を満たし、人間の心に注いだ知恵は何ひとつ残らなかった。

神々が集まり、喜びの峯間となるべく定められていた大地は、血と涙に浴し、嫉妬と暴力がその塩となった。神々の涙は涸れた。神の呼び声は沈黙した。プラボーは孤独で、失墜し、後悔にあえいだ。彼は孤こまり、怨せ、哀しみだけが彼という存在の糸を動かした。

プラボーは空の最も遠き場所に隠れることを望み、空は無限であるがゆえ、とこしえに安息の地を見つけられぬであろう。

彼を憐れむ者はいない。彼を記憶する者はいない。始まりの神は倒れ、とこしえに見捨てられた。彼の名は忘れられ、今ではただ〈旧き神〉としてのみ知られる。

ひとつの伝説の悲しき最後————私でさえ、これを悲しむ。

心に今なお人間らしさのかけらを残す者があれば、咽び泣け。プラボーの名のもとに。

終わり